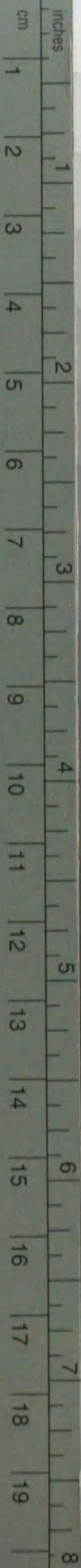


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



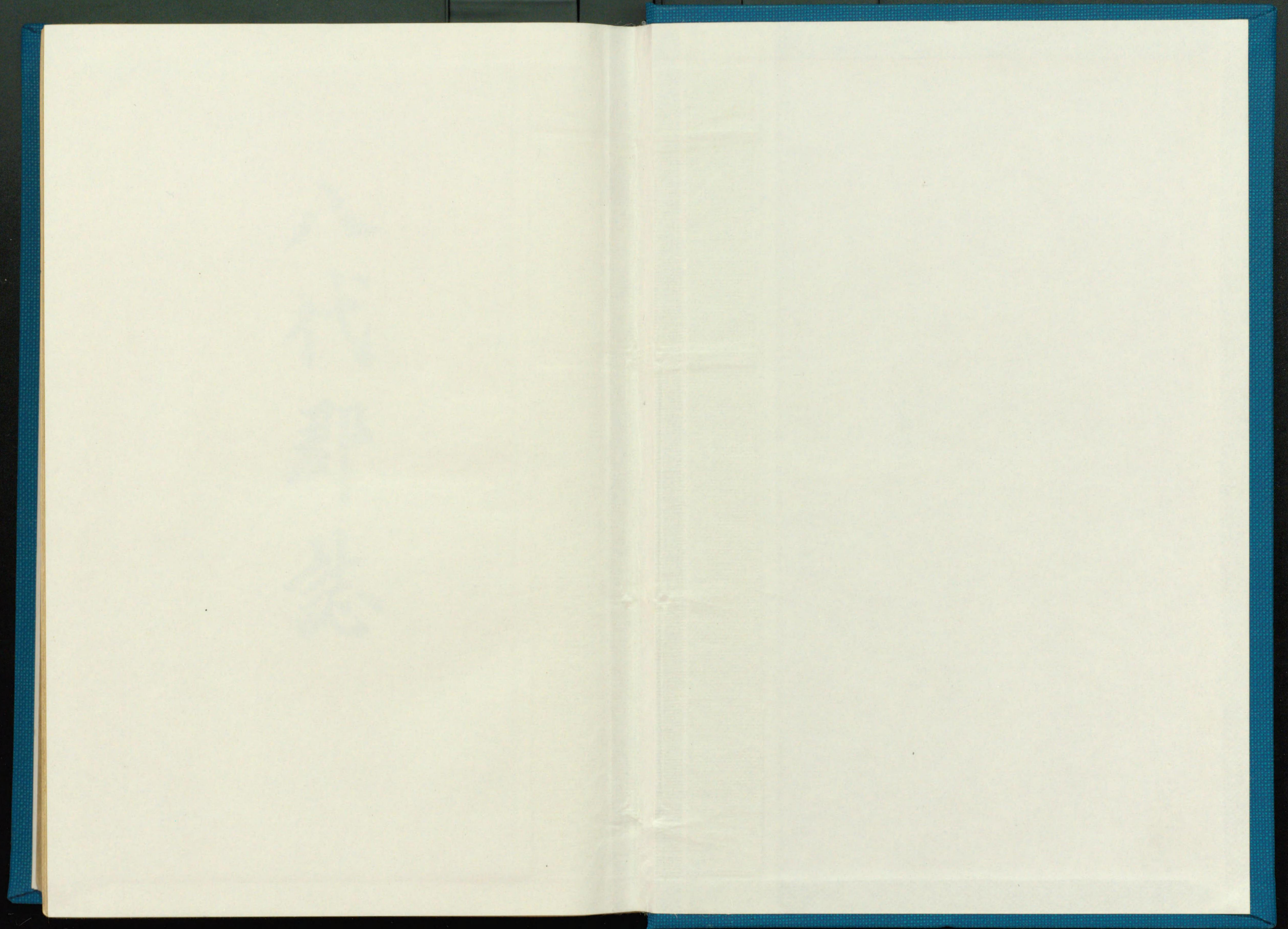
Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



554
197

554-197
1200501509923



2/8/17-85

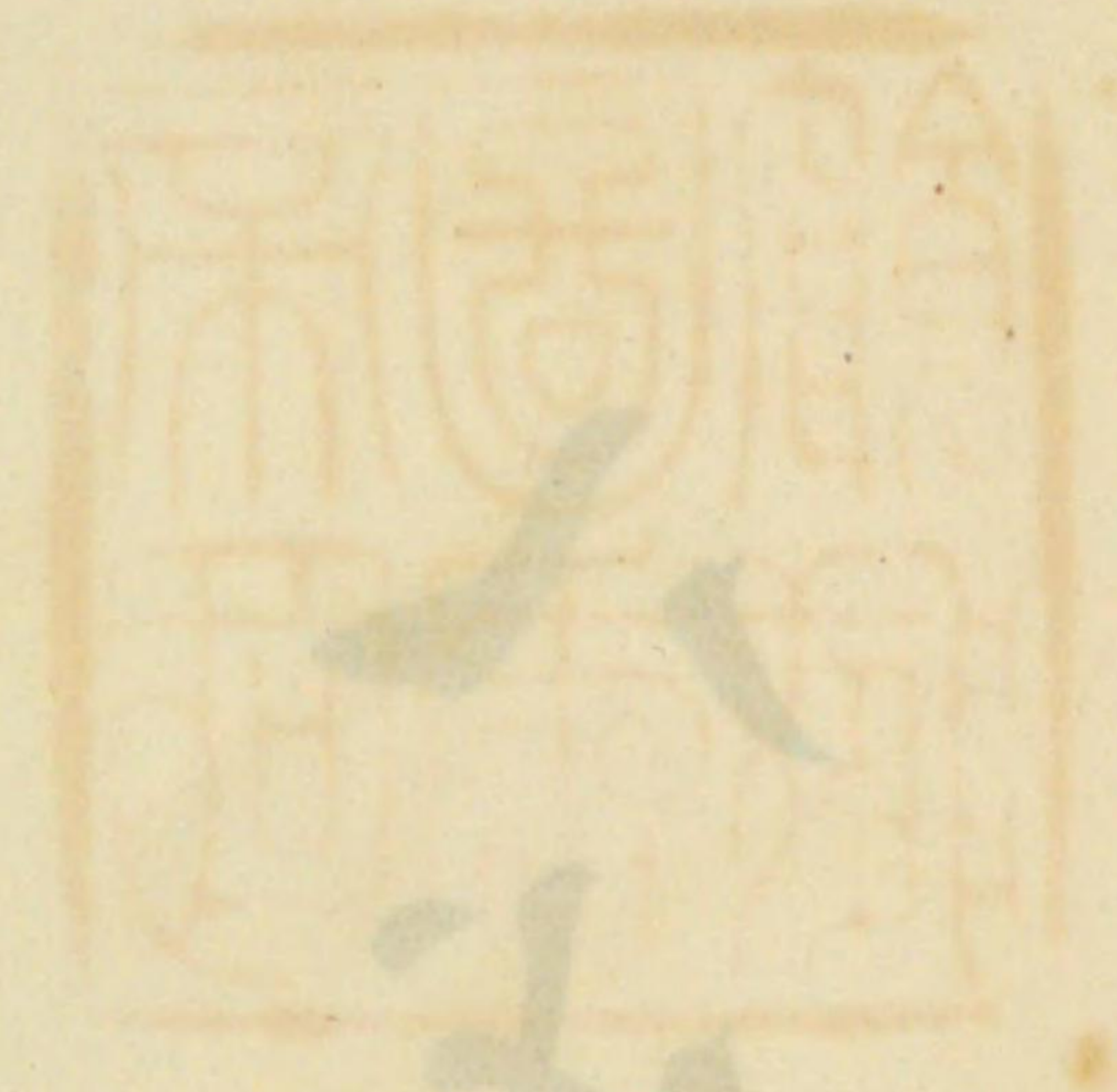


八代郡志



家

命



六

甲

亥





釋

書

卷

第



十

古

下益地

九公山

山

山

山

地

山

山

山

山

比例尺

1:100,000

1900

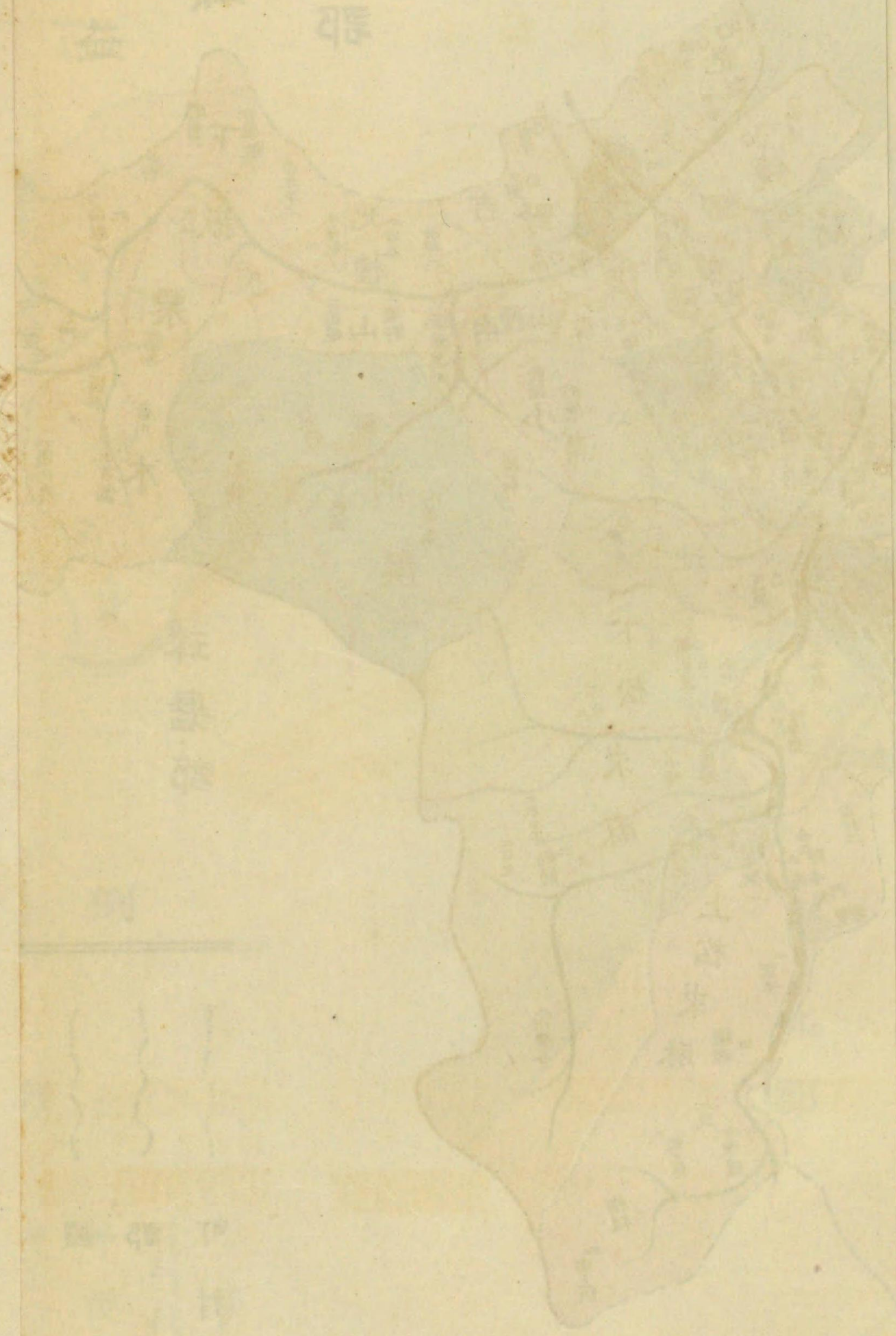


福

文

圖全縣

益縣



益縣

益縣

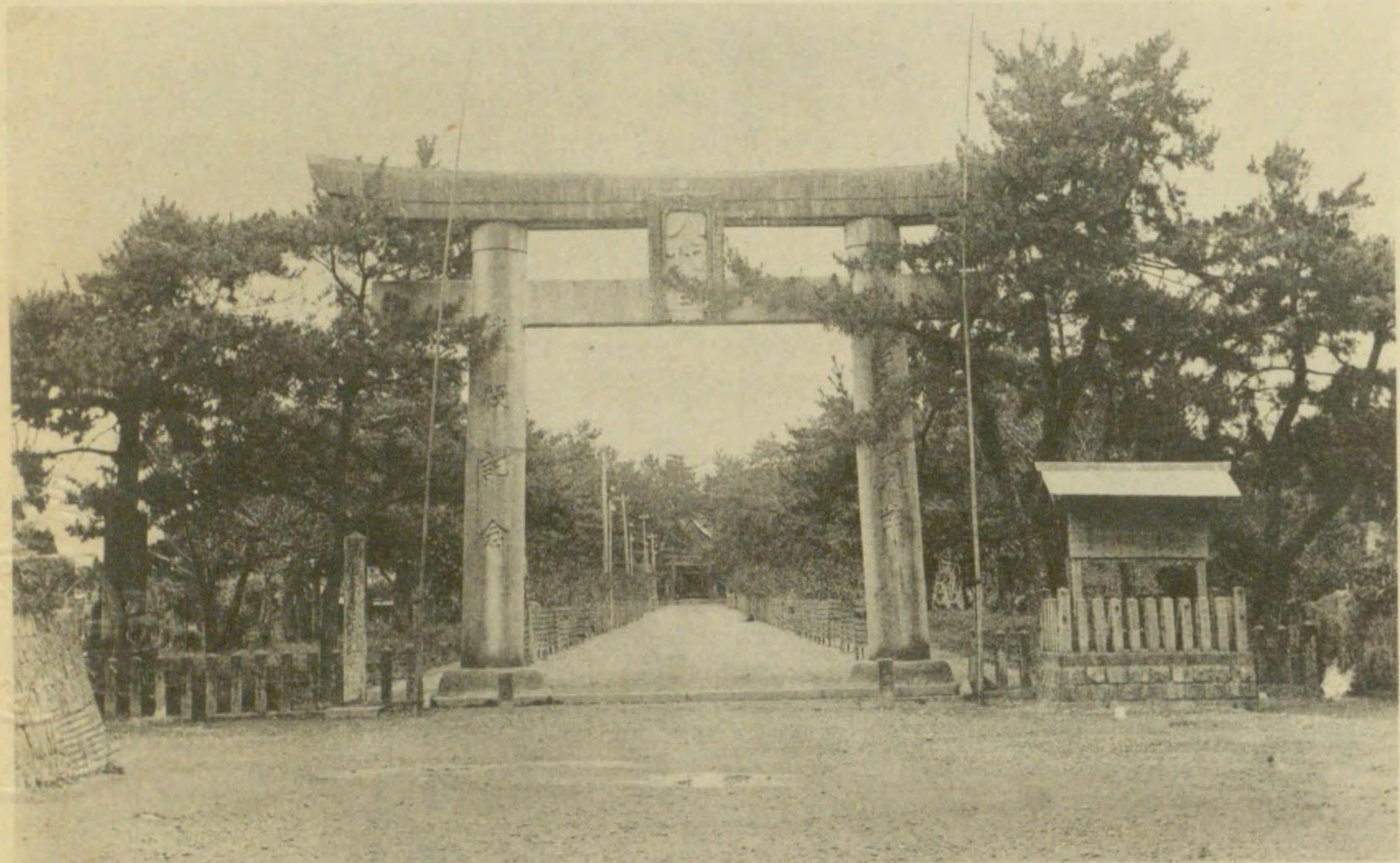


益縣

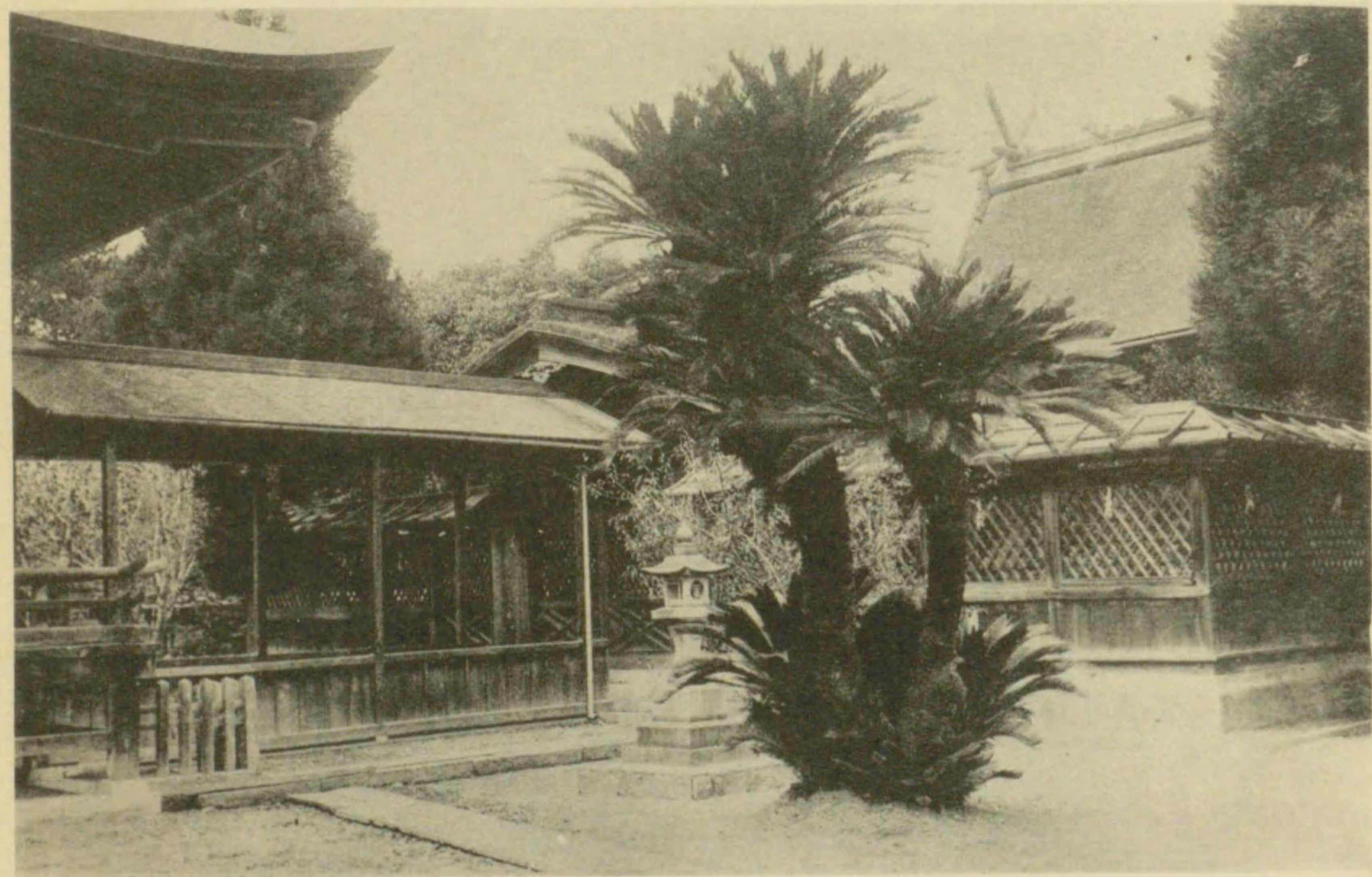
益縣	益縣	益縣	益縣
益縣	益縣	益縣	益縣
益縣	益縣	益縣	益縣

益縣

益縣



八代宮表參道



八代宮



一、八二二...

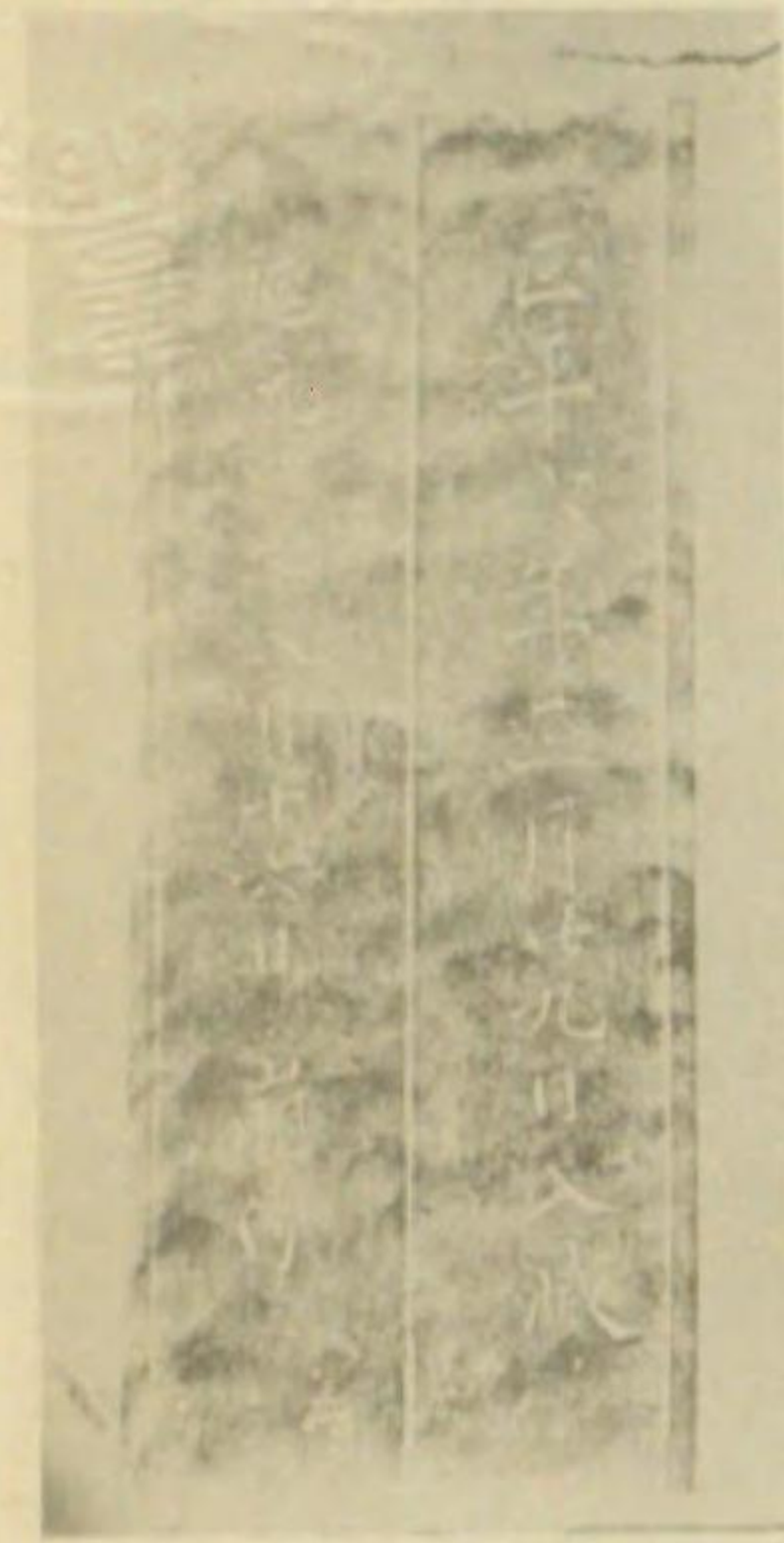


(村地宮) 塚 袖 小 御



(村田高) 址 所 御

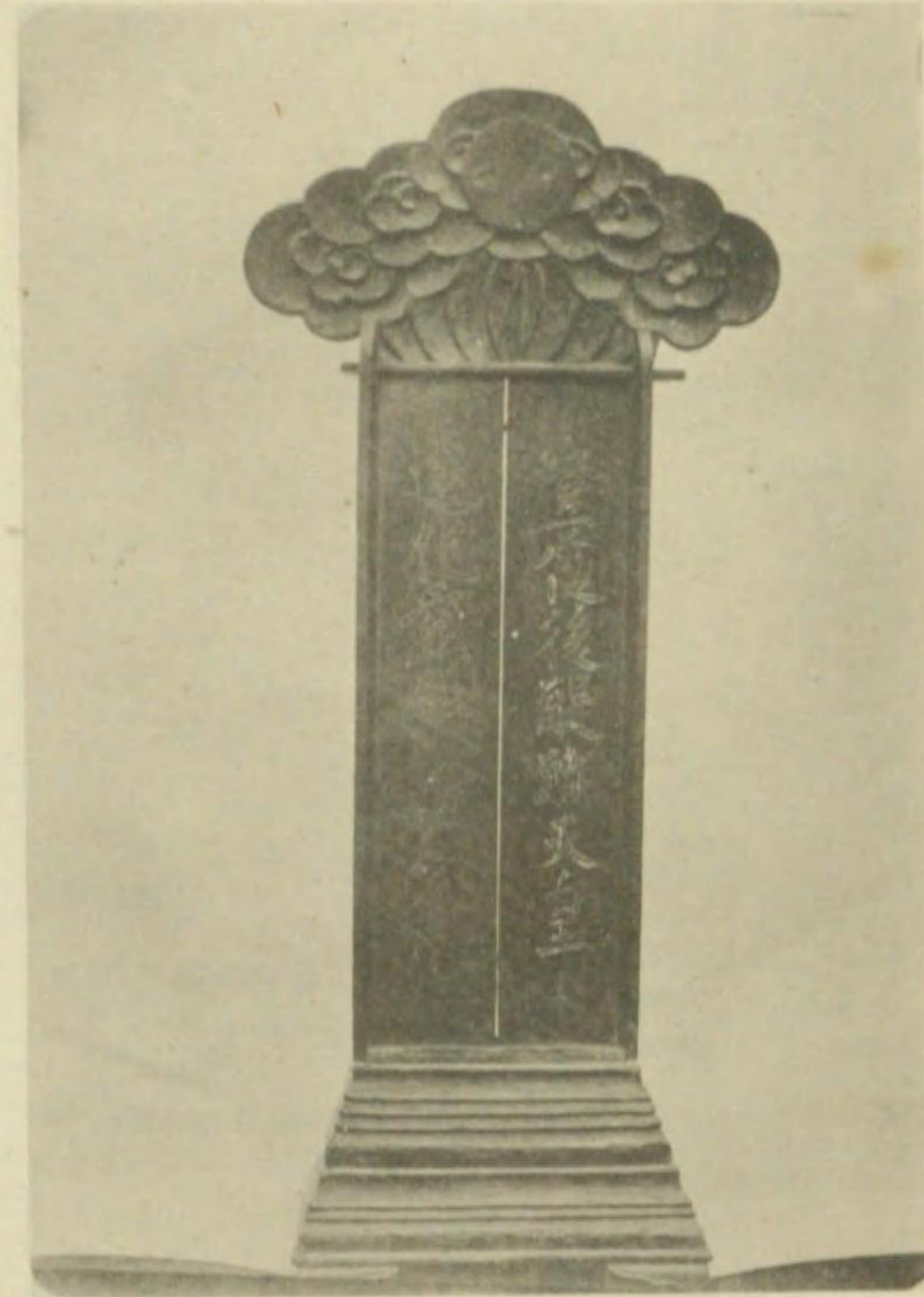




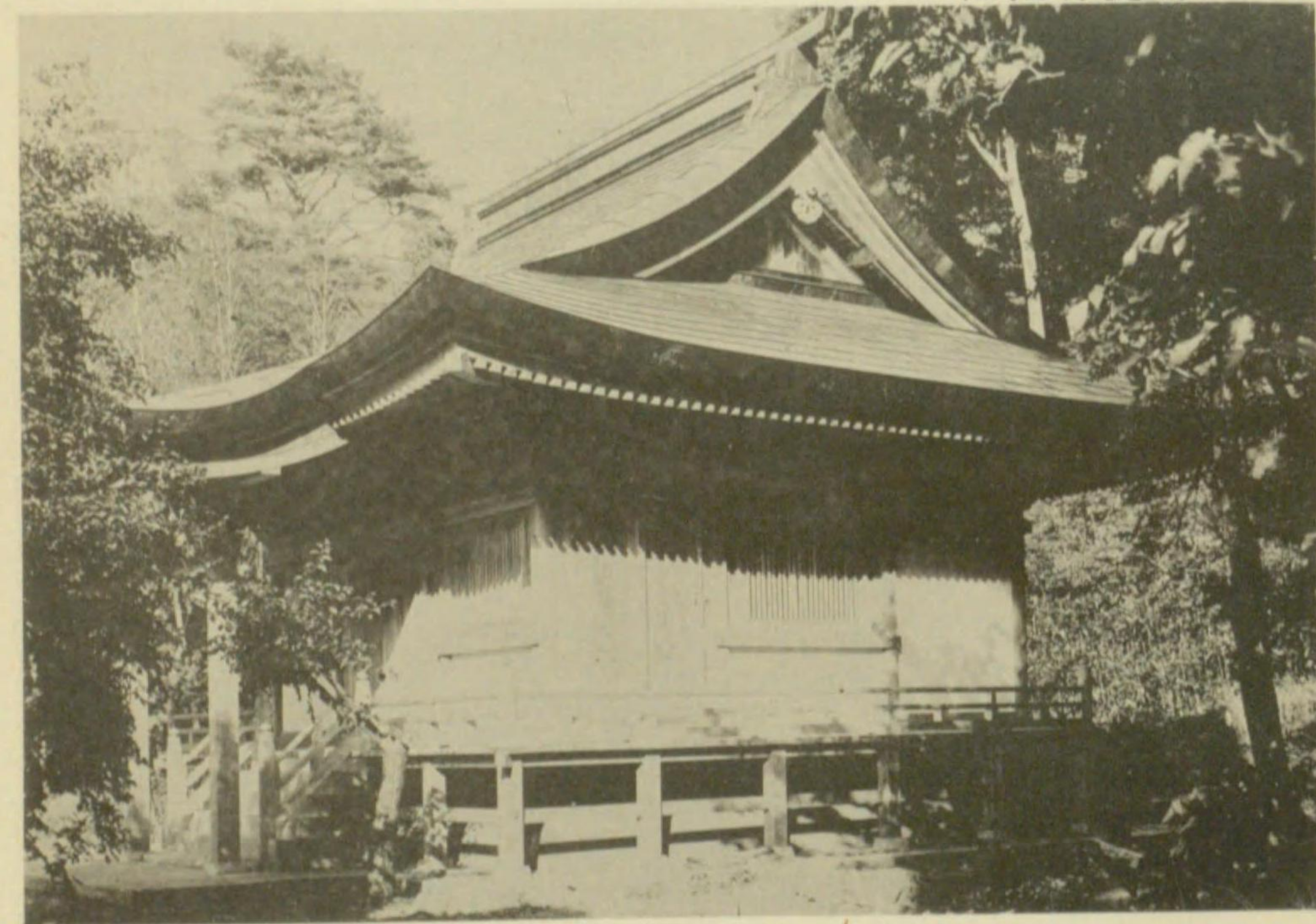
面 背



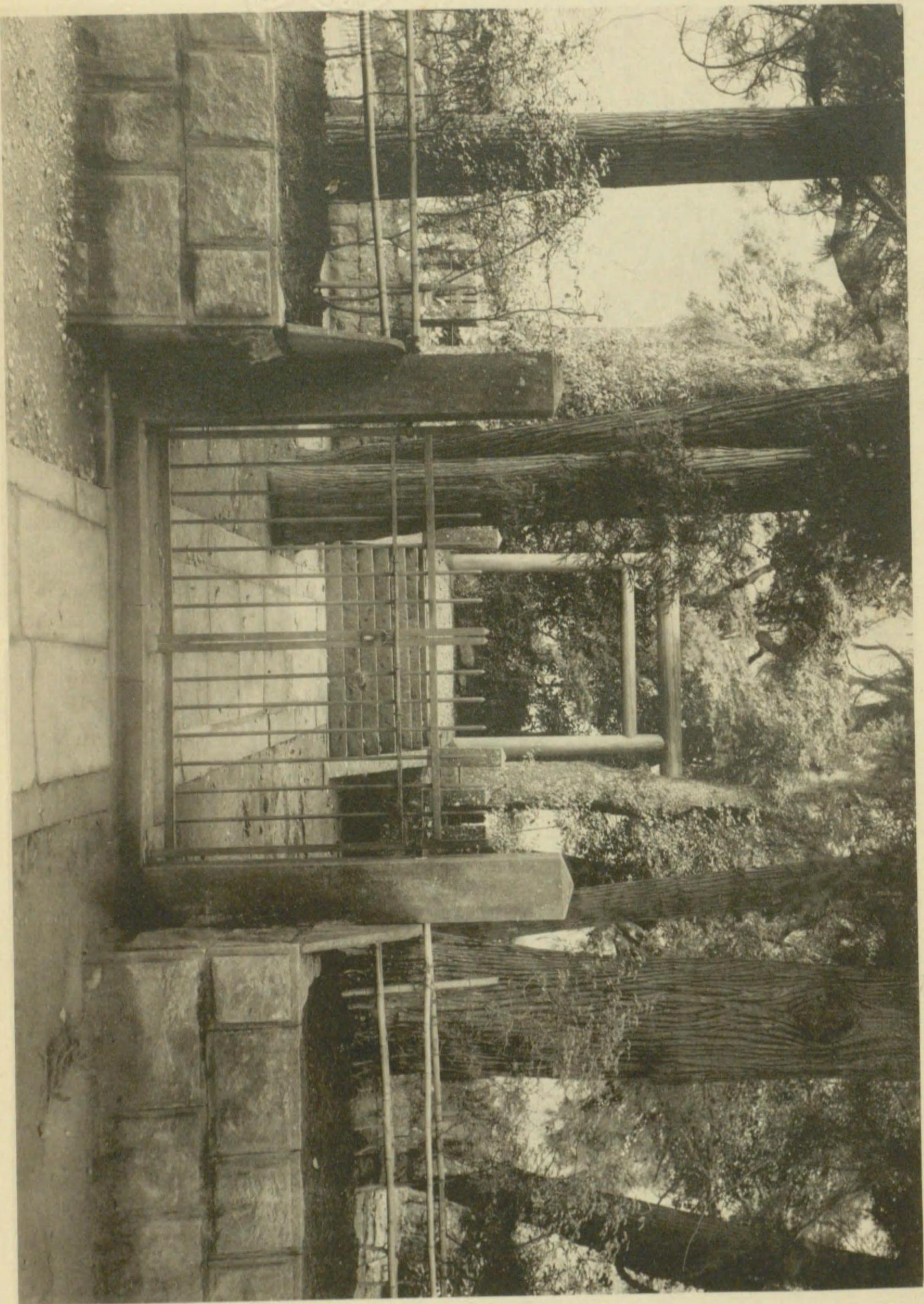
面 前



後 醍 醐 天 皇
靈 照 院 禪 定 皇 尼 御 靈 牌



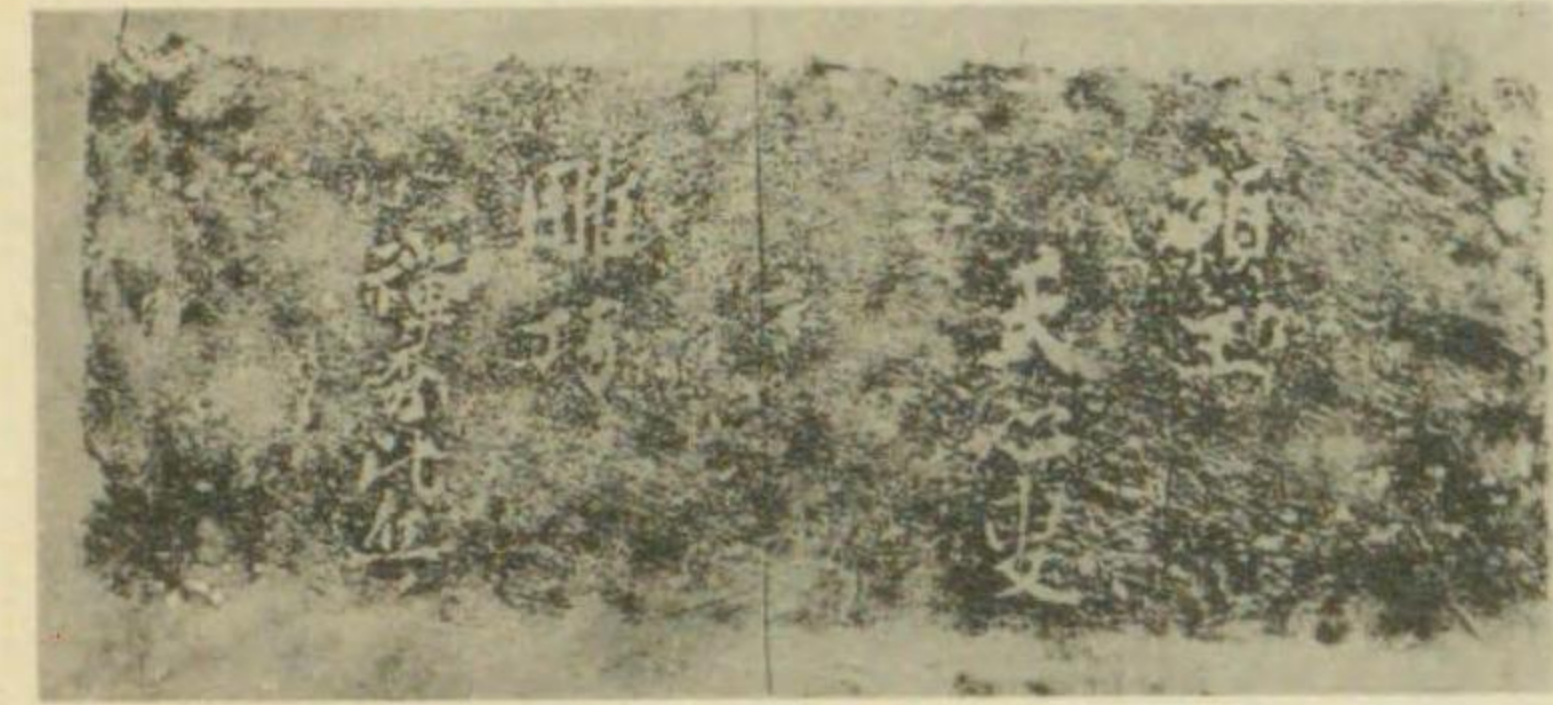
御 靈 殿 (悟 真 寺)



懷 真 親 王 御 墓

3



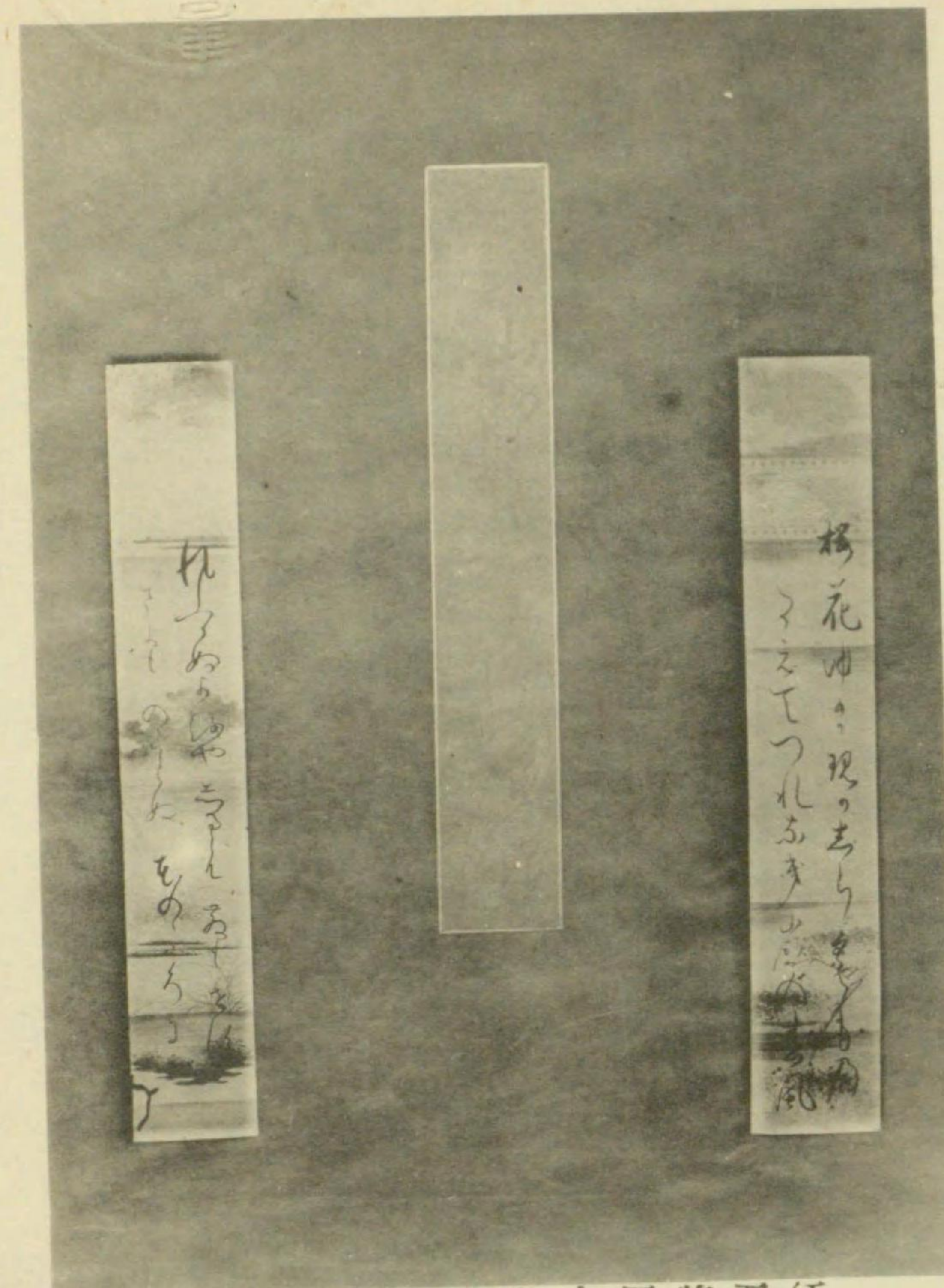


寶 篋 印 塔 願 文



寶 篋 印 塔

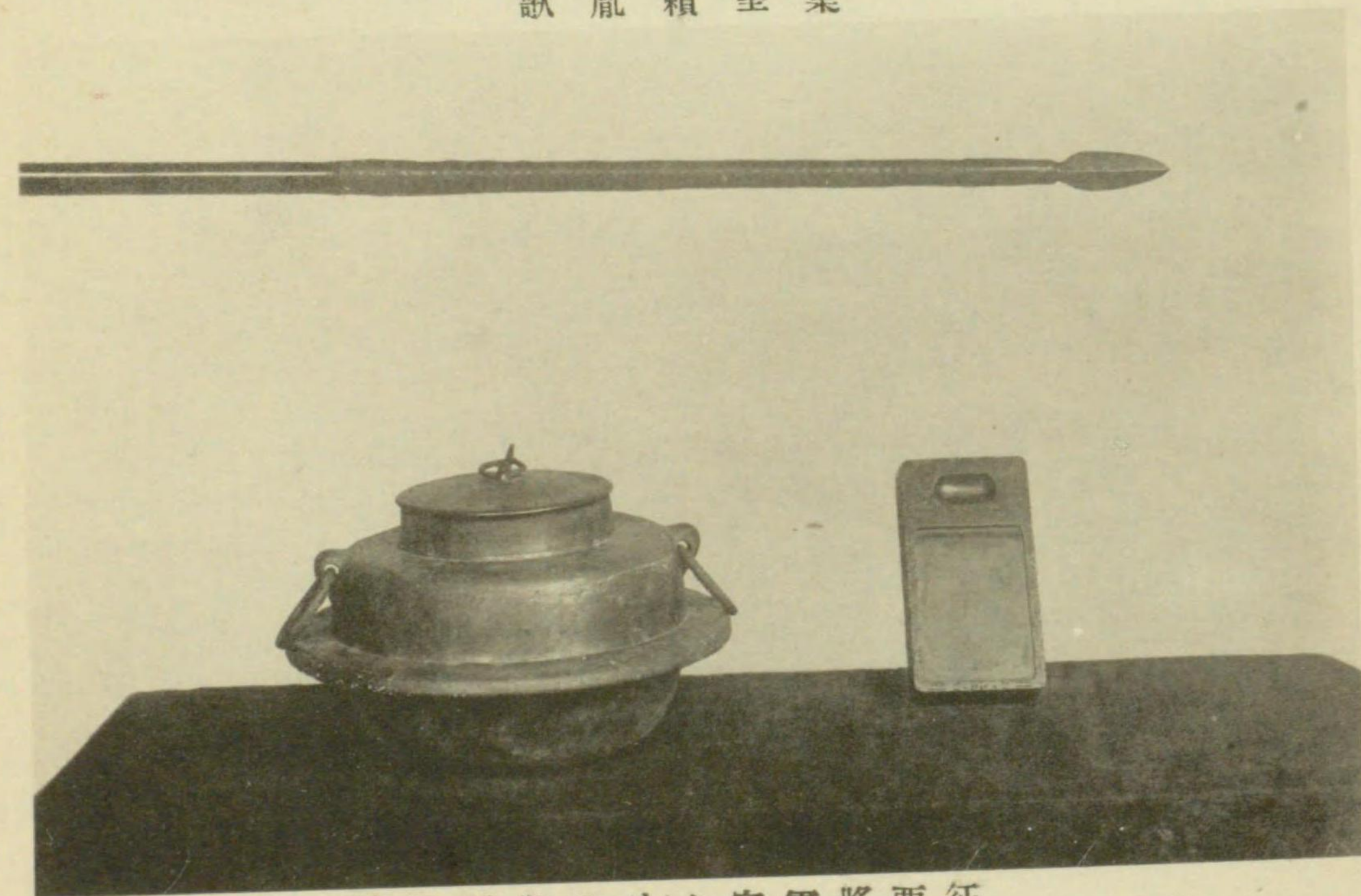




御歌(中央)
 山ふかくわれからむすふ草の庵に
 人もすむさや月のもろらむ

葉室頼胤歌
 櫻花ゆめか現かしらくもの
 たねてつれなき嶺の春風(右)
 風ふかぬよおやしらん散りもせず
 さきものこらぬ花のころに(左)

(藏氏磨清村中) 歌御宮軍將西征
 歌胤頼室葉



品賜下御のりよ宮軍將西征
 (藏氏磨清村中)

期款止封事言官軍大兵獲賊之
 雖言其利或城守之似在防敵中
 九列士軍士防北之切備若其州之
 法句月之系國之弊唐民之憂慮
 亦柳板之進軍軍勢之不振
 為征西大將軍而石州之方官軍
 急其直備備之？其活息者？其
 海而防軍之軍而防之而防之
 防之而防之
 丁未年七月廿八日
 九月十六日在石州

後醍醐天皇御繪旨
 (阿蘇家所藏)

此後國八代在
 內子山御所志比
 村家之辨集大社
 丁未年七月廿八日
 丁未年七月廿八日
 丁未年七月廿八日

伯耆文書
 (出雲大社所藏)



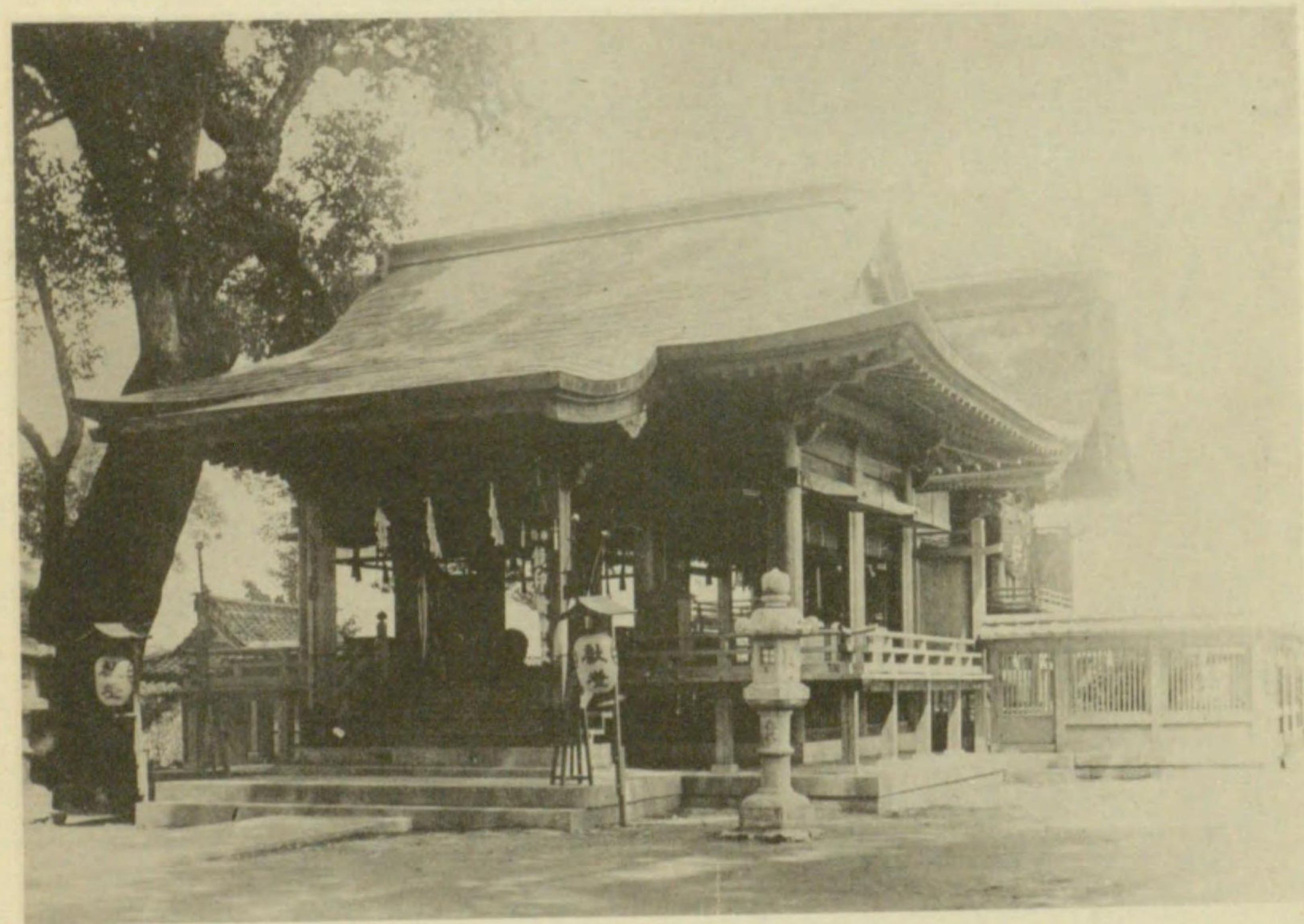
松井神社



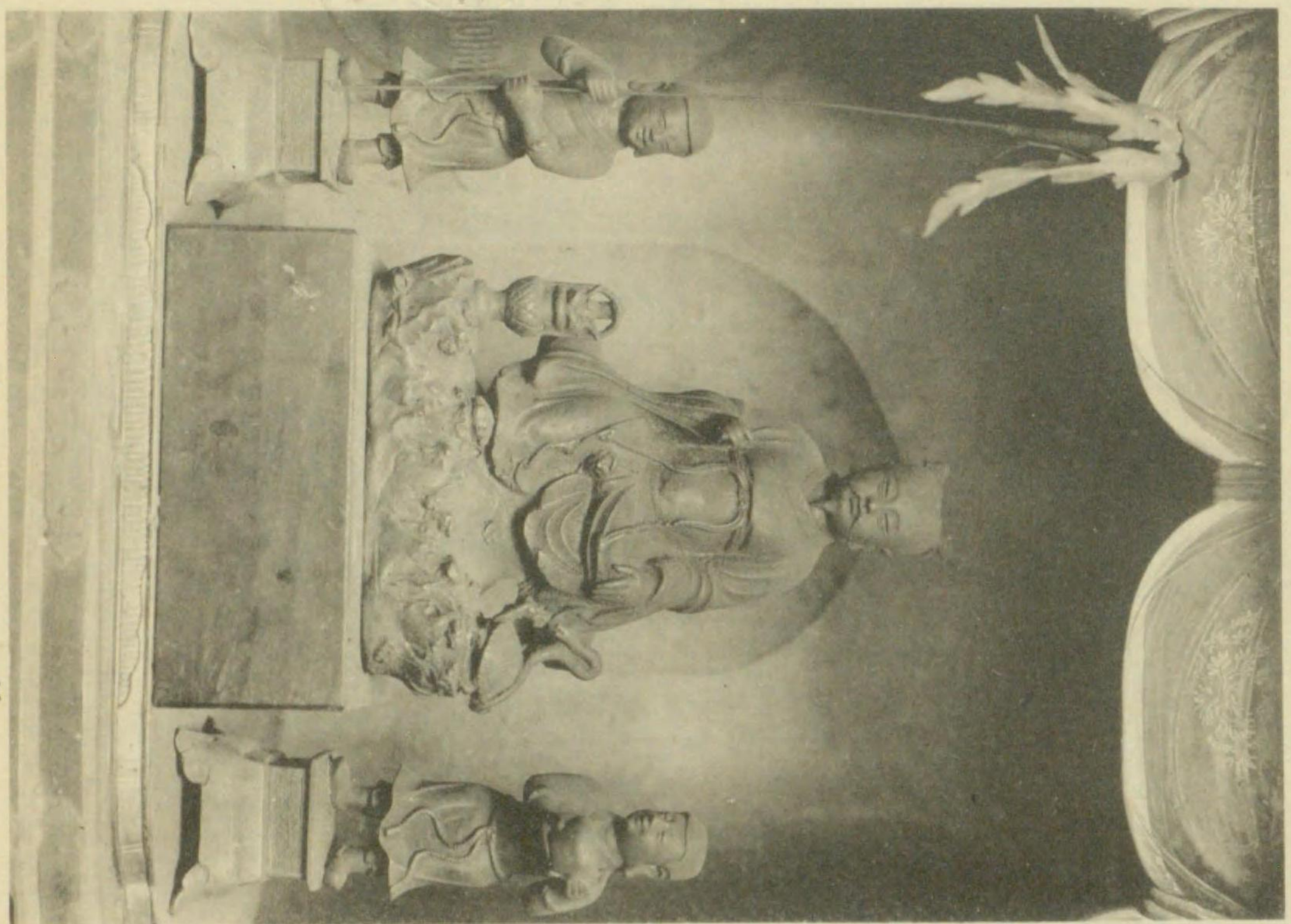
加藤神社
(文政村)



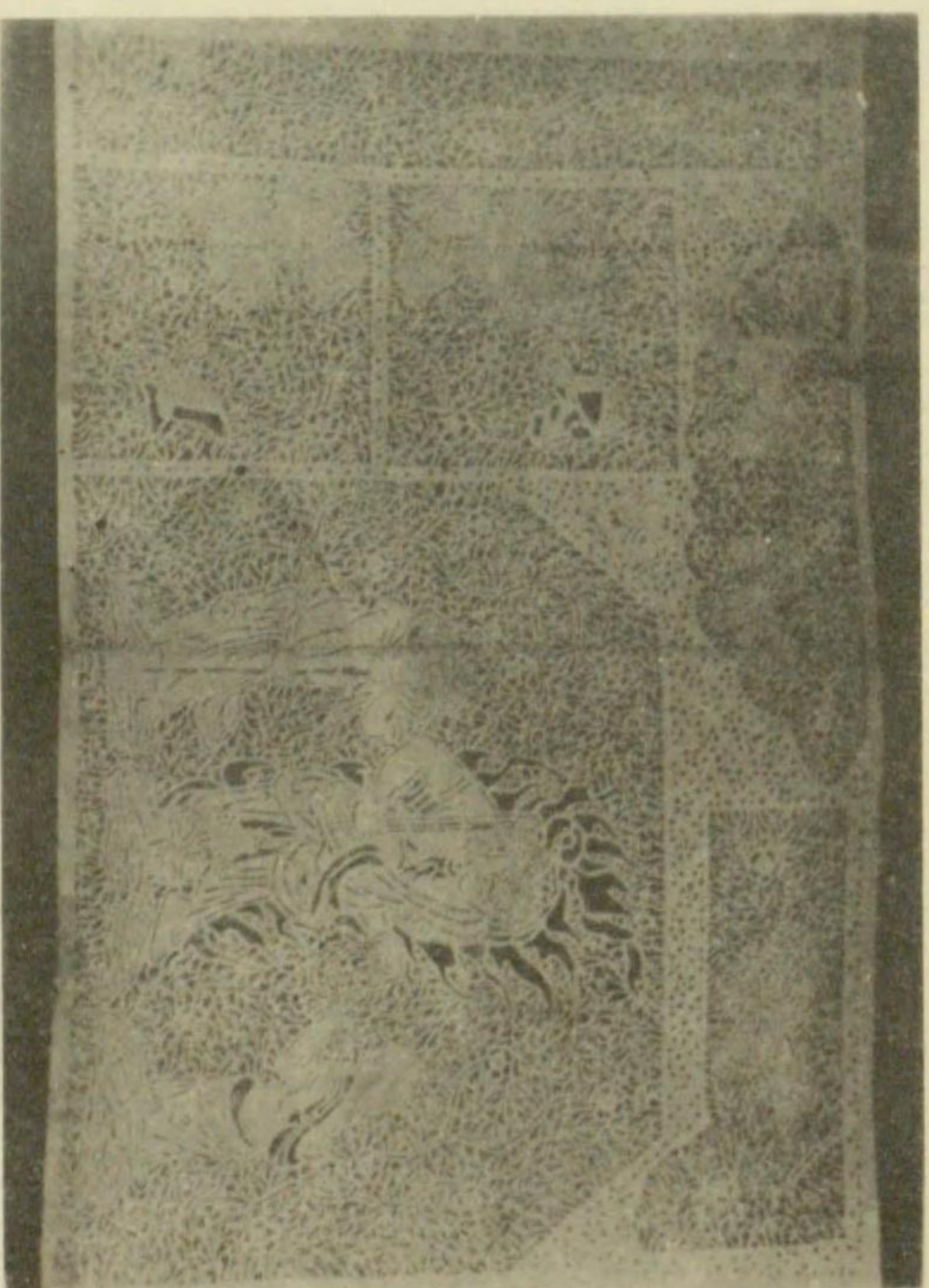
三 神 宮 (町原宮)



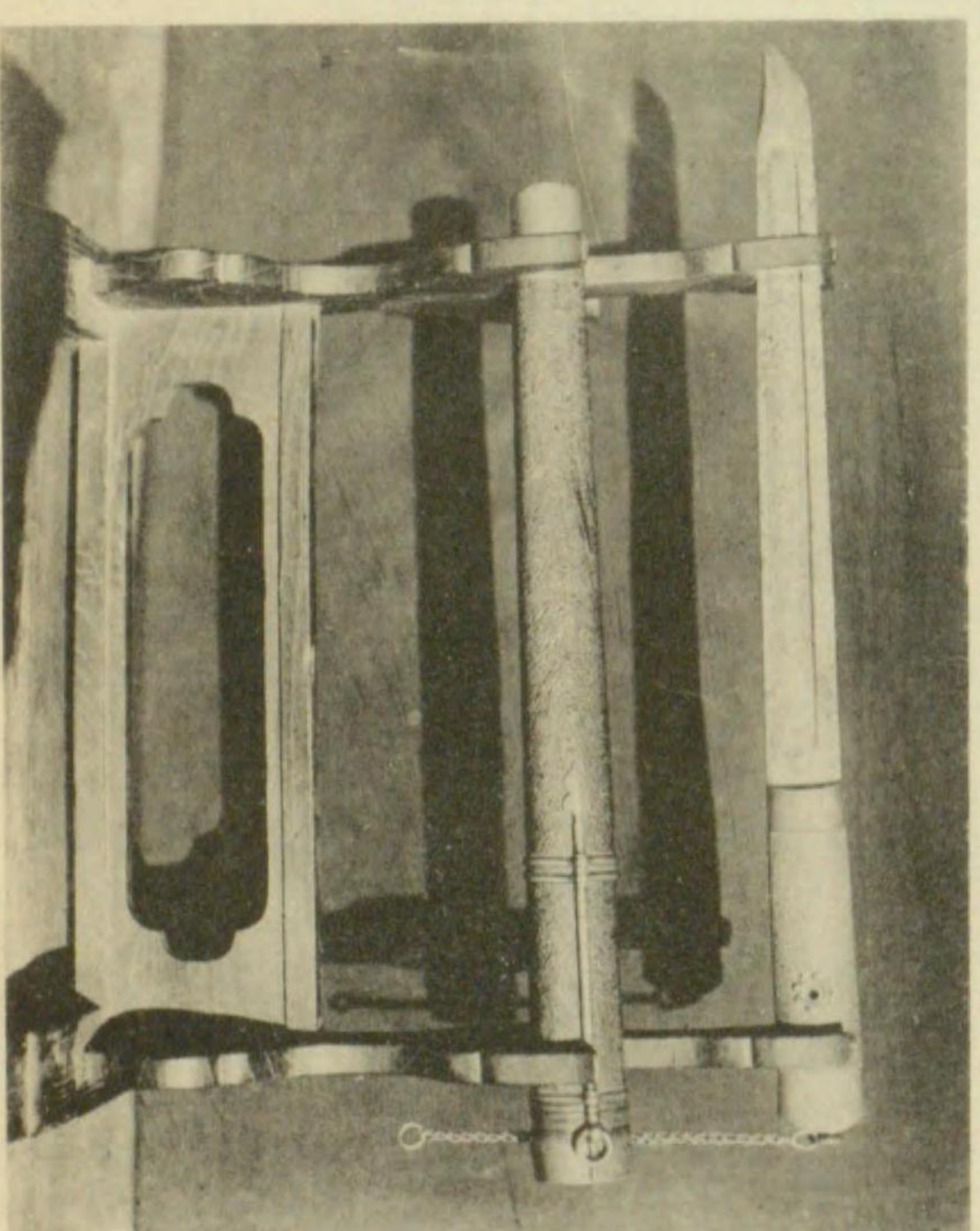
印 鑰 神 社 (町鏡)



佛地本見妙

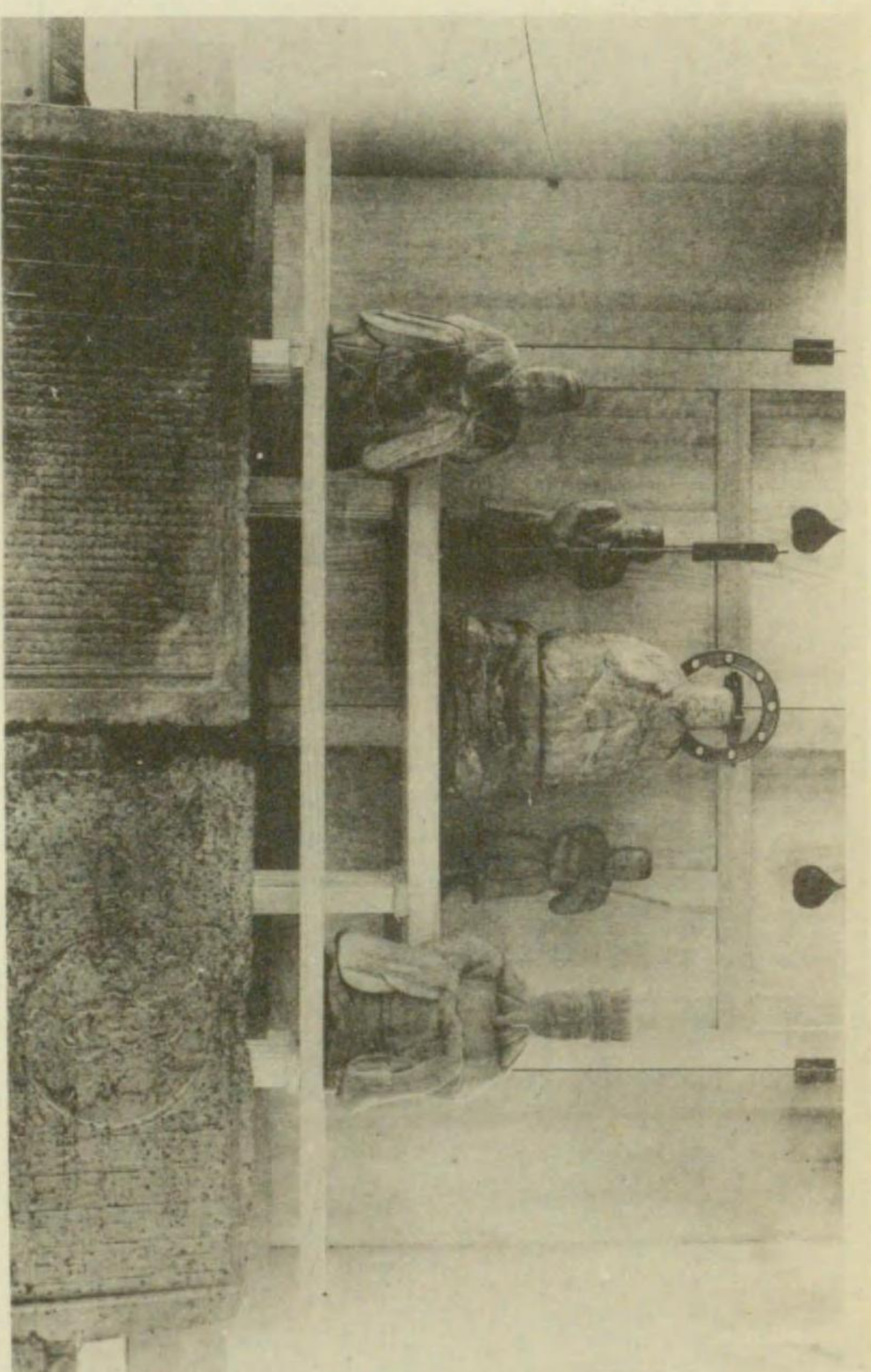


革平正

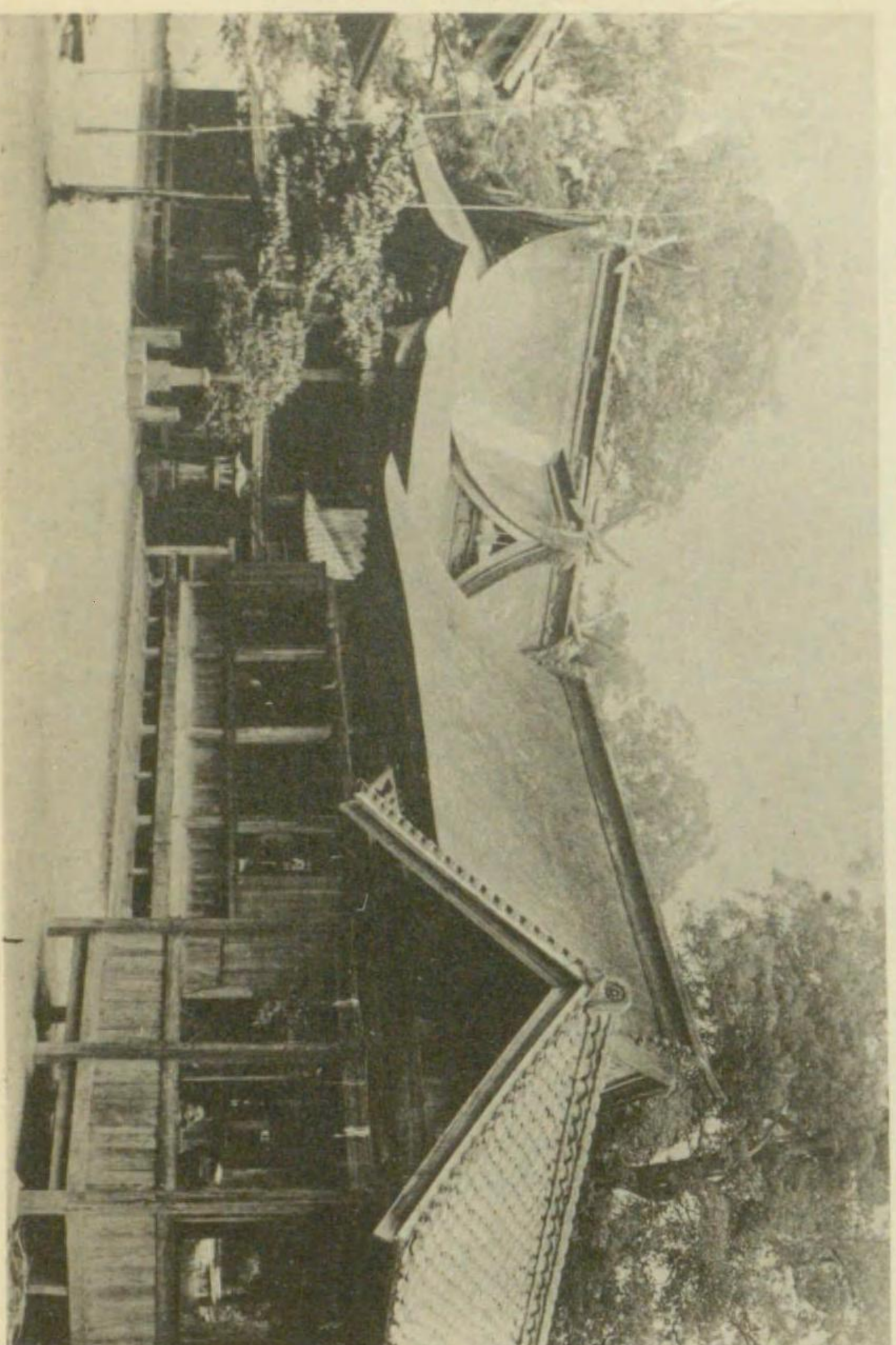


劍實四

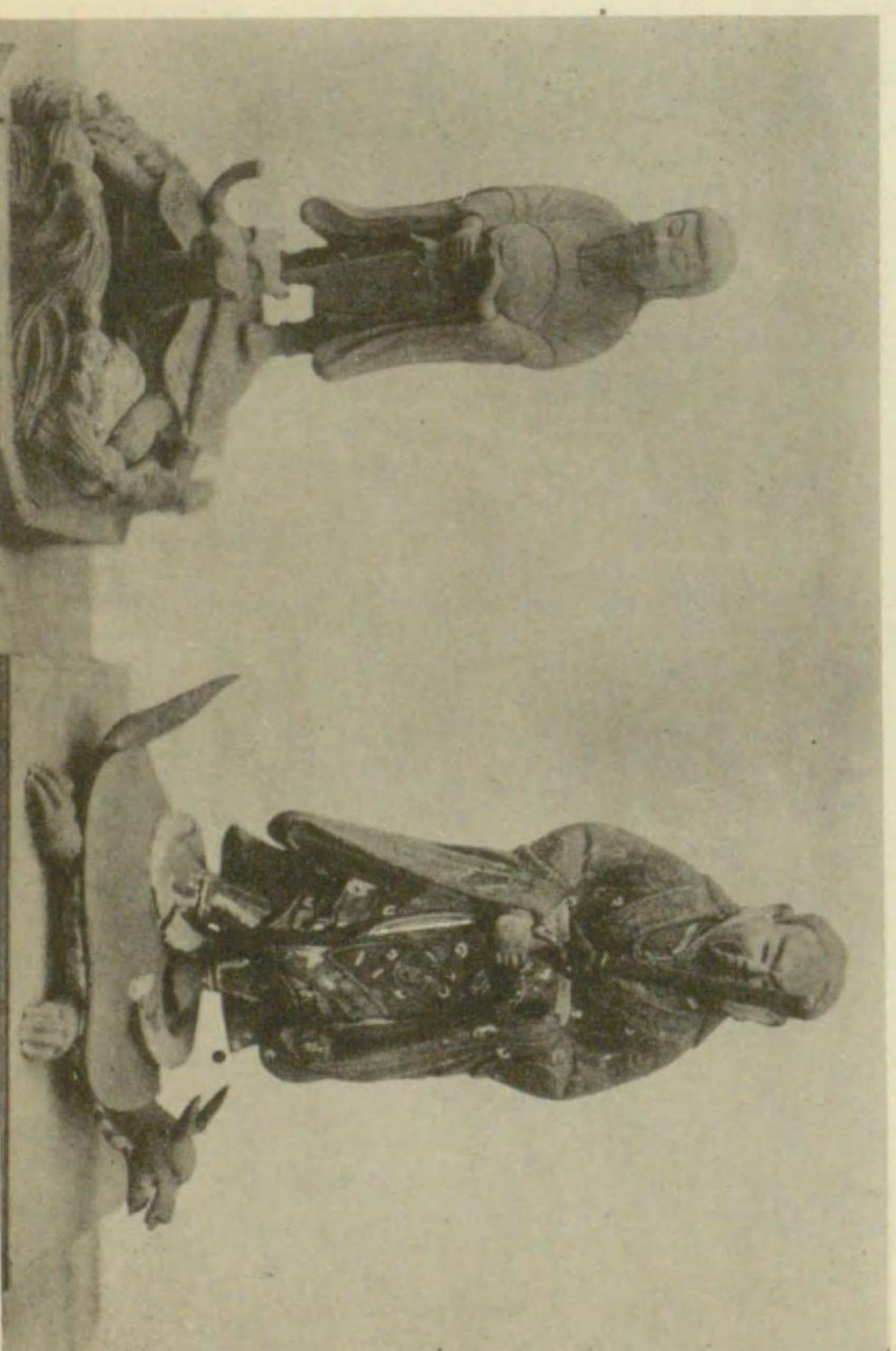
八代神社(舊妙見宮)寶物



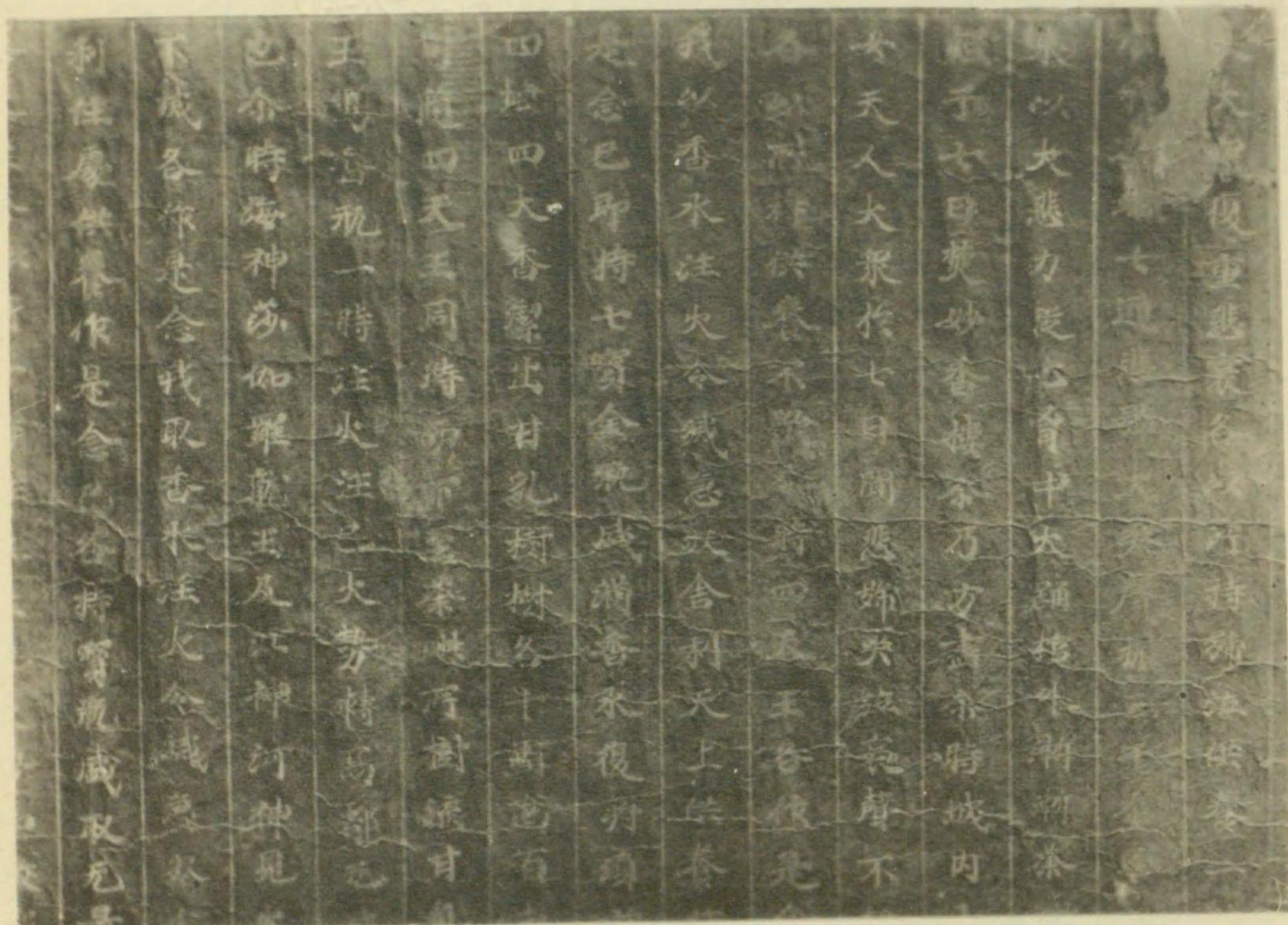
神符靈



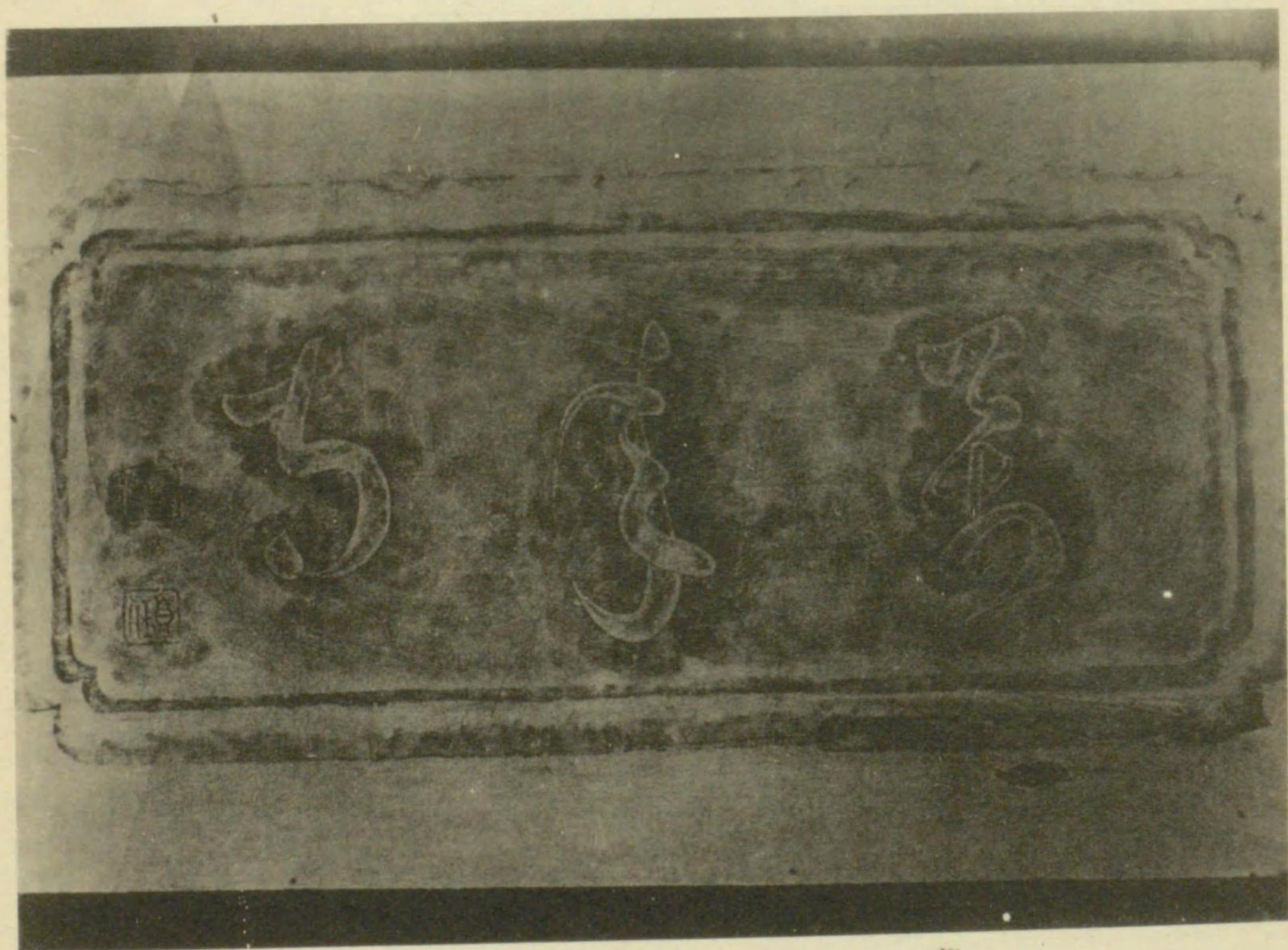
八代神社 (舊妙見宮)



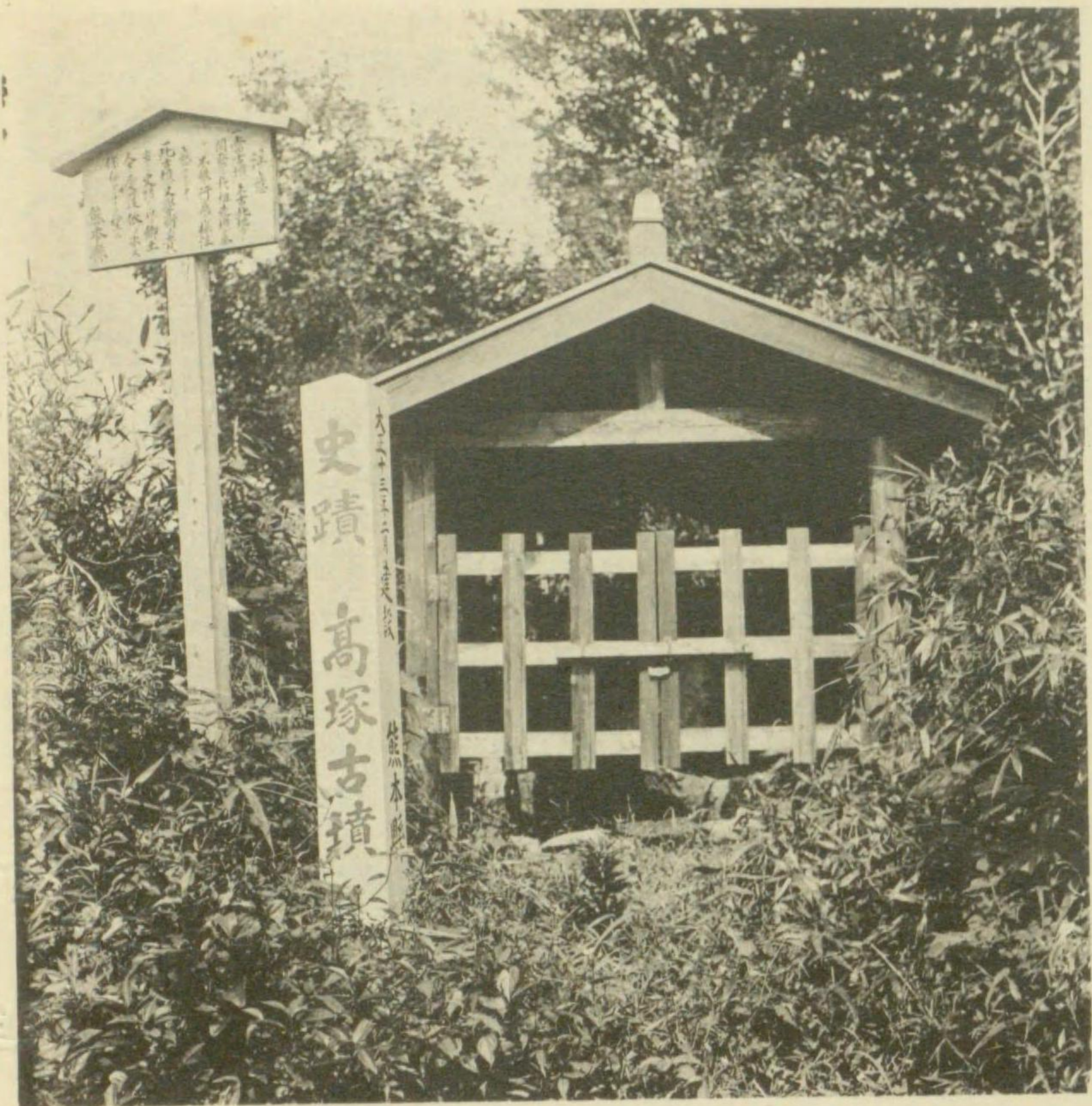
白木山妙見



菅公筆紺紙金泥法華經(舊神藏所藏)

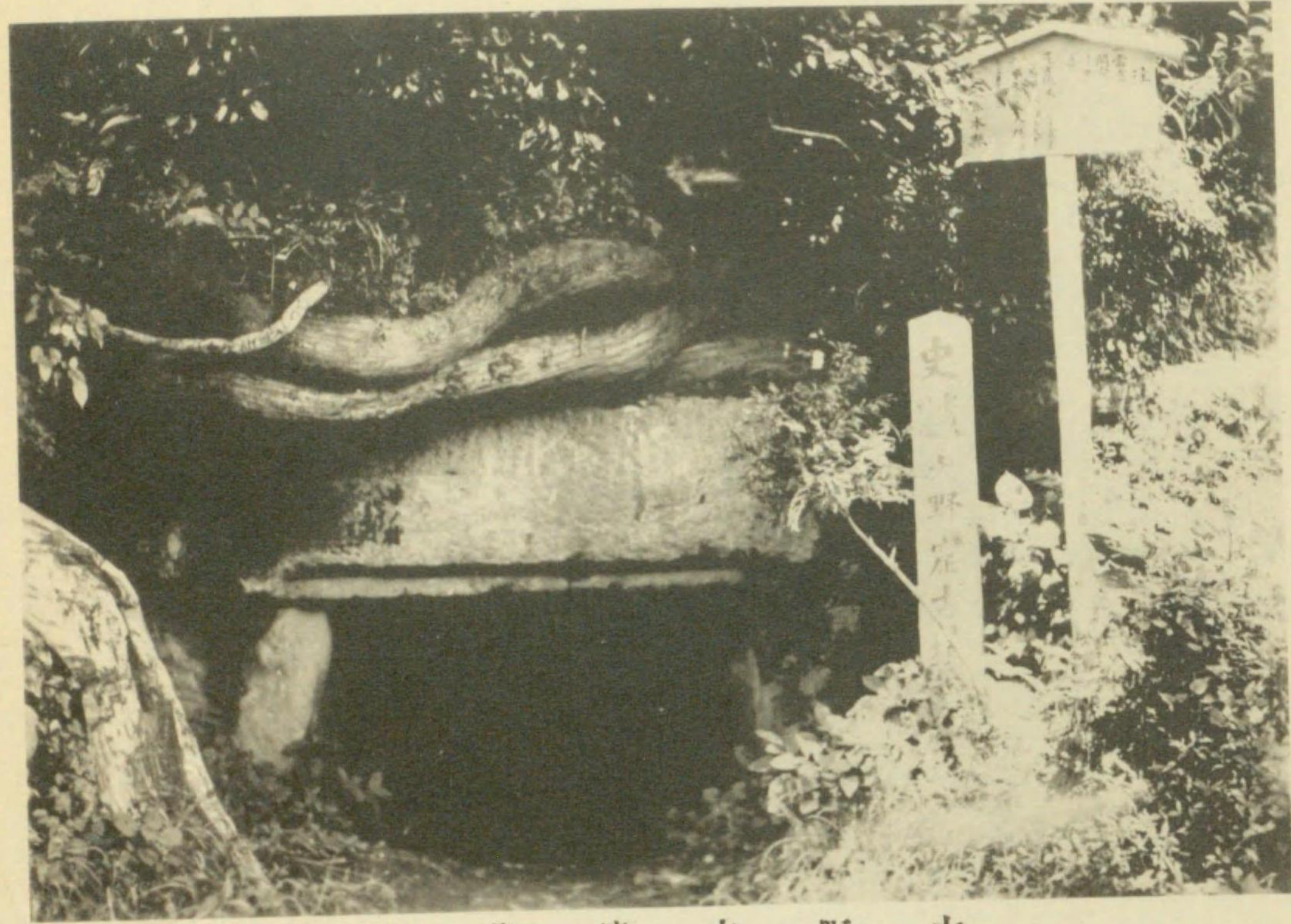


萬年寺額
(高田村)

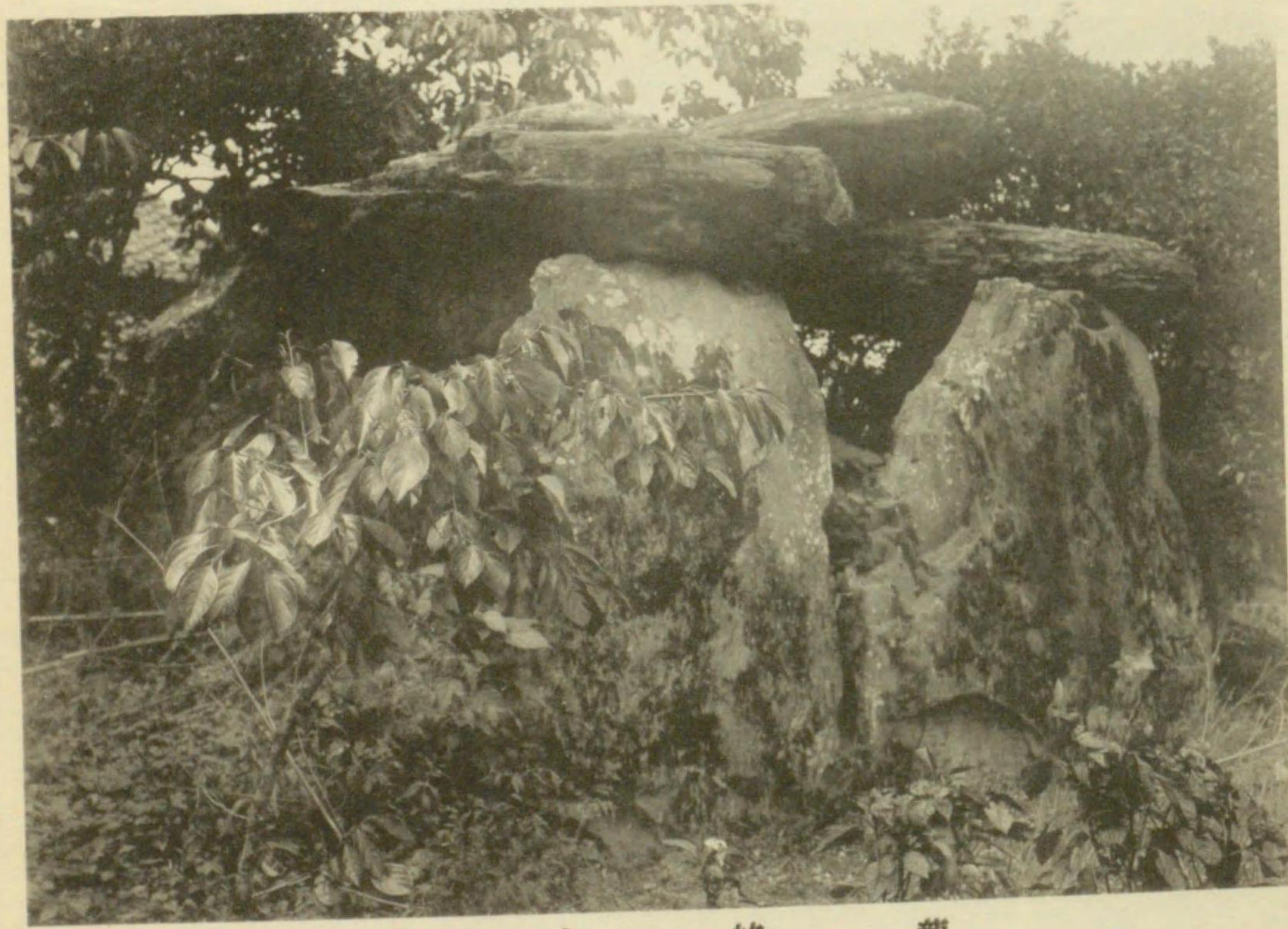


古墳發掘物





大野古墳美道

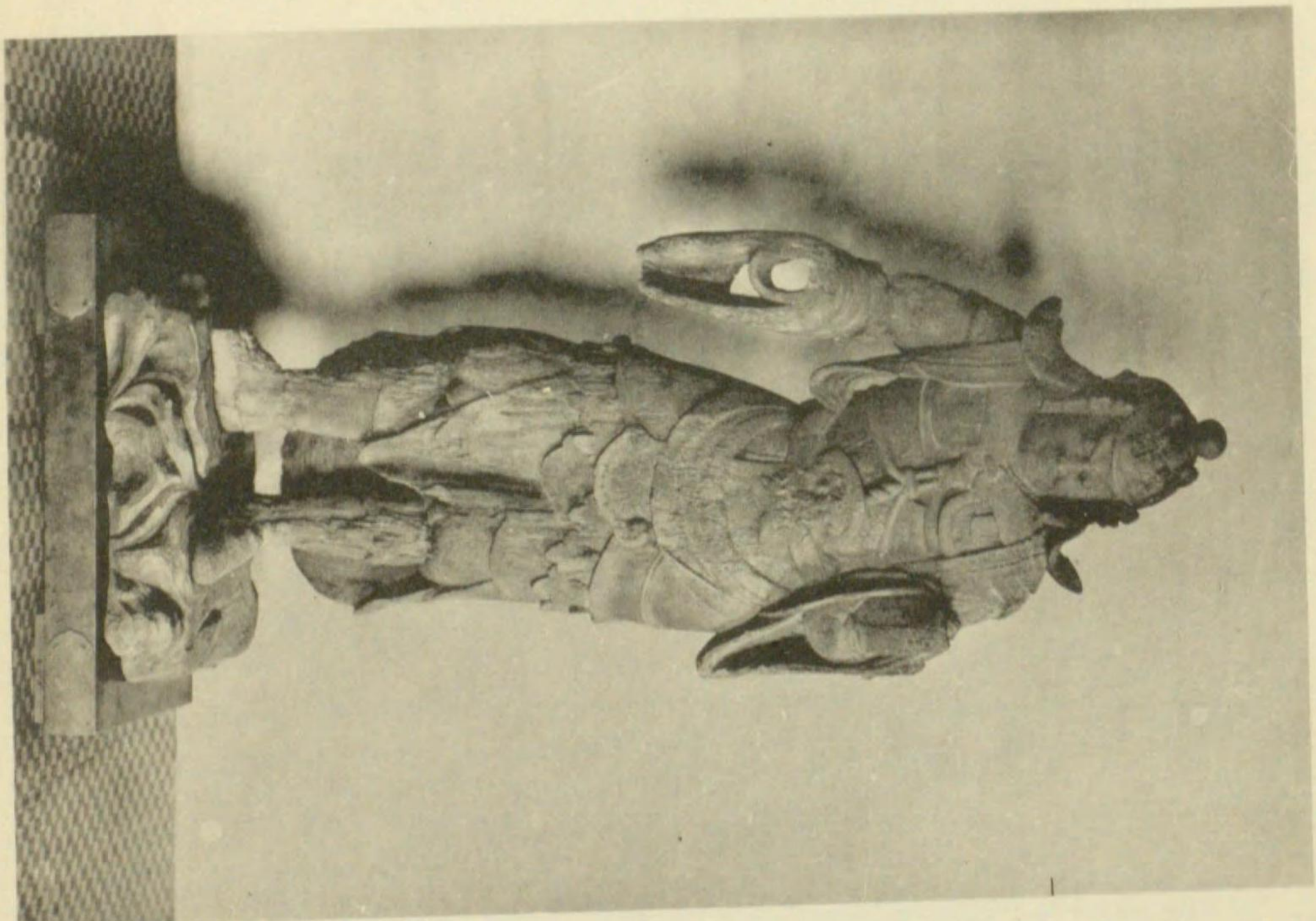


龍峰古墳



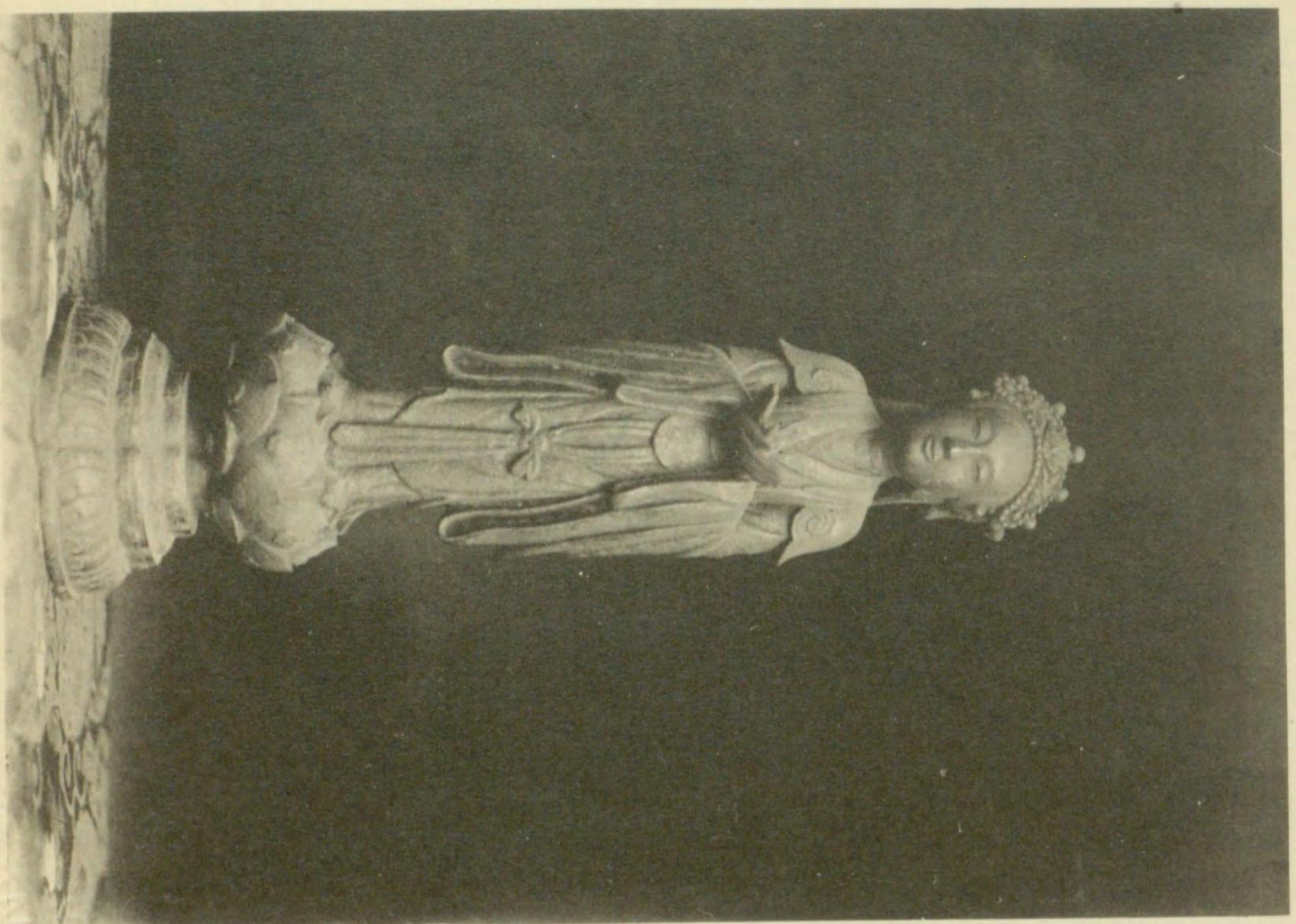


(寶國)來如師
尊本寺醫

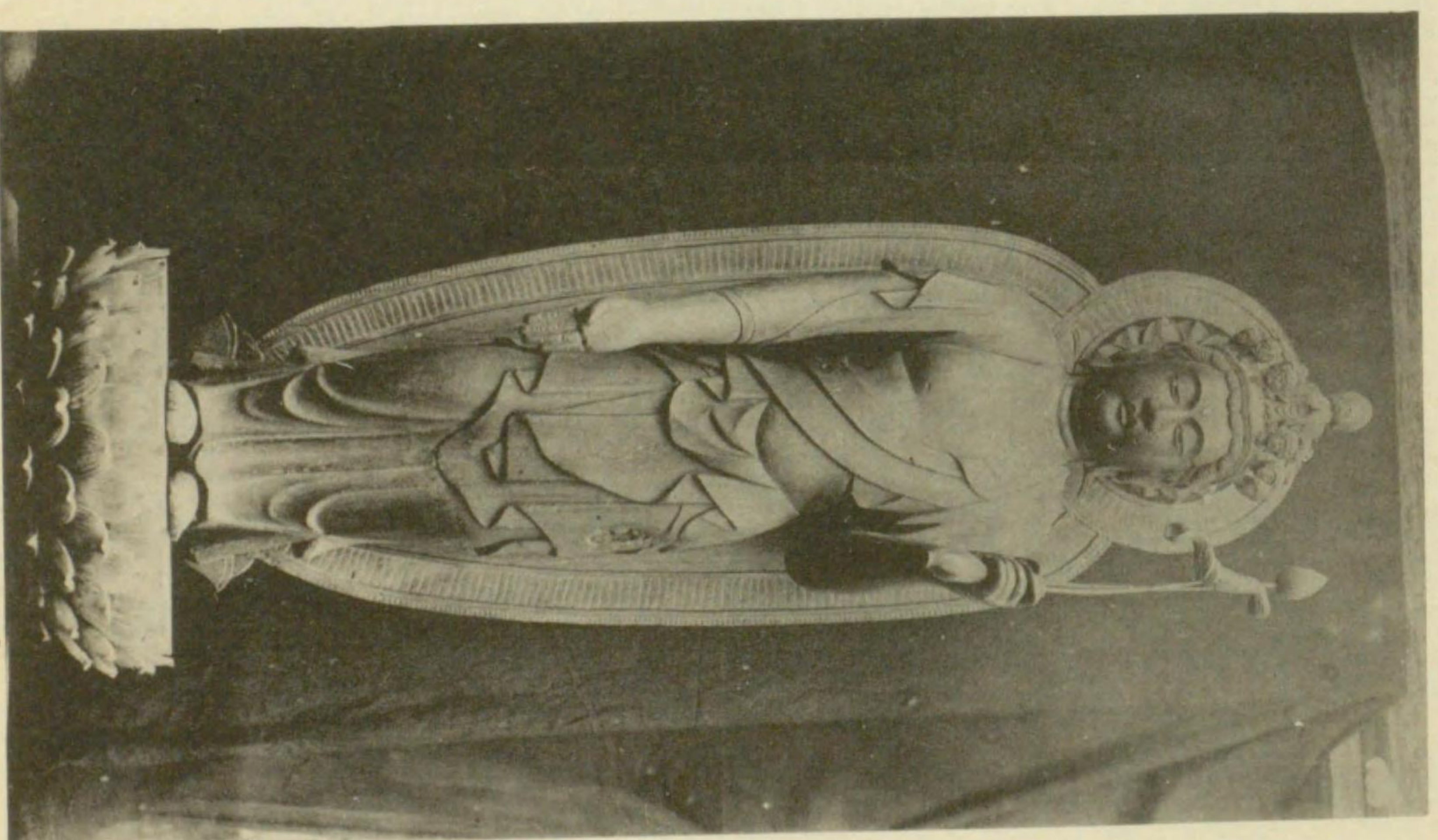


(寶國)天門沙
尊本院言明





觀世音菩薩
(春光寺)



十面觀音
(高田村茶木)

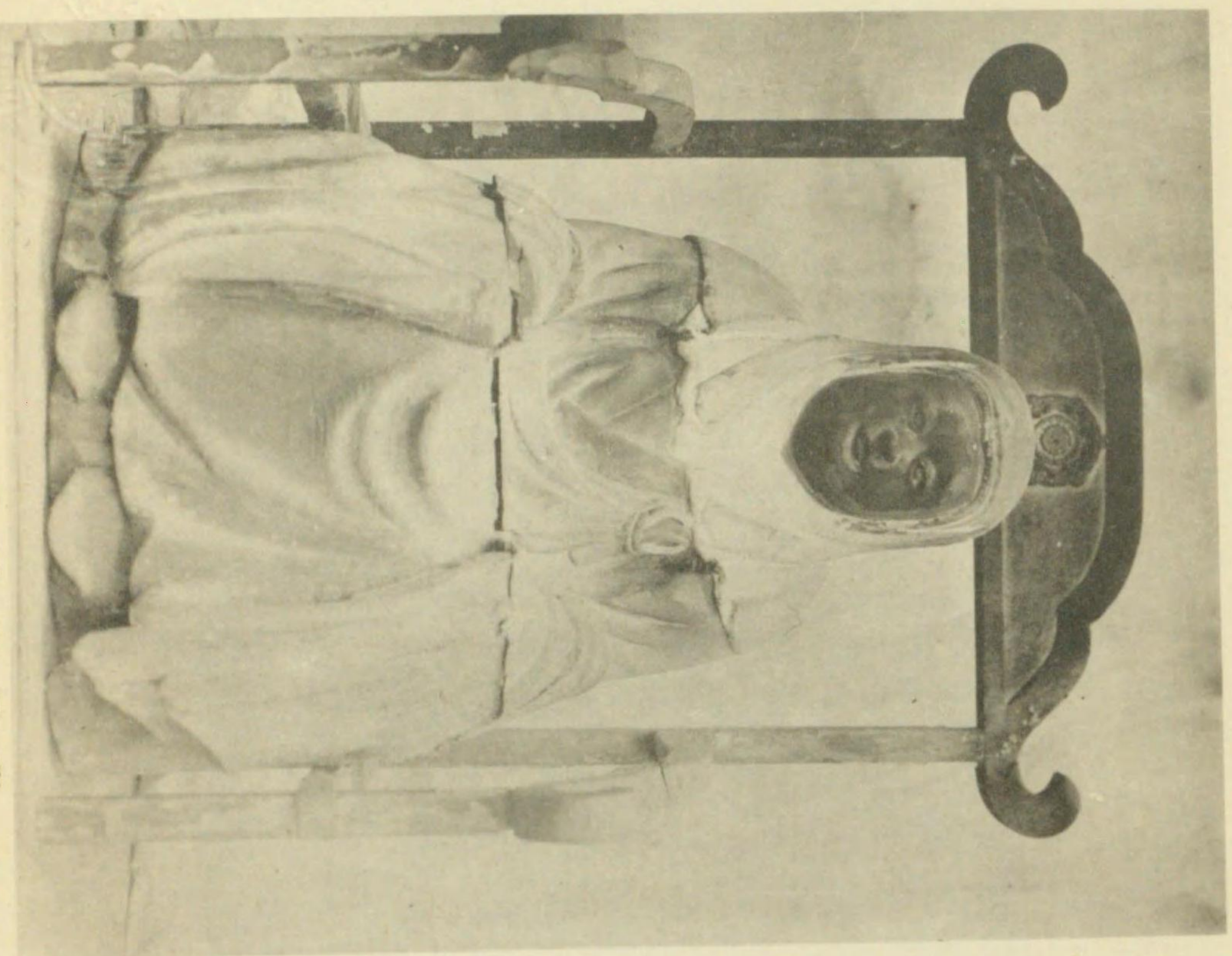


1915年
三月
十日

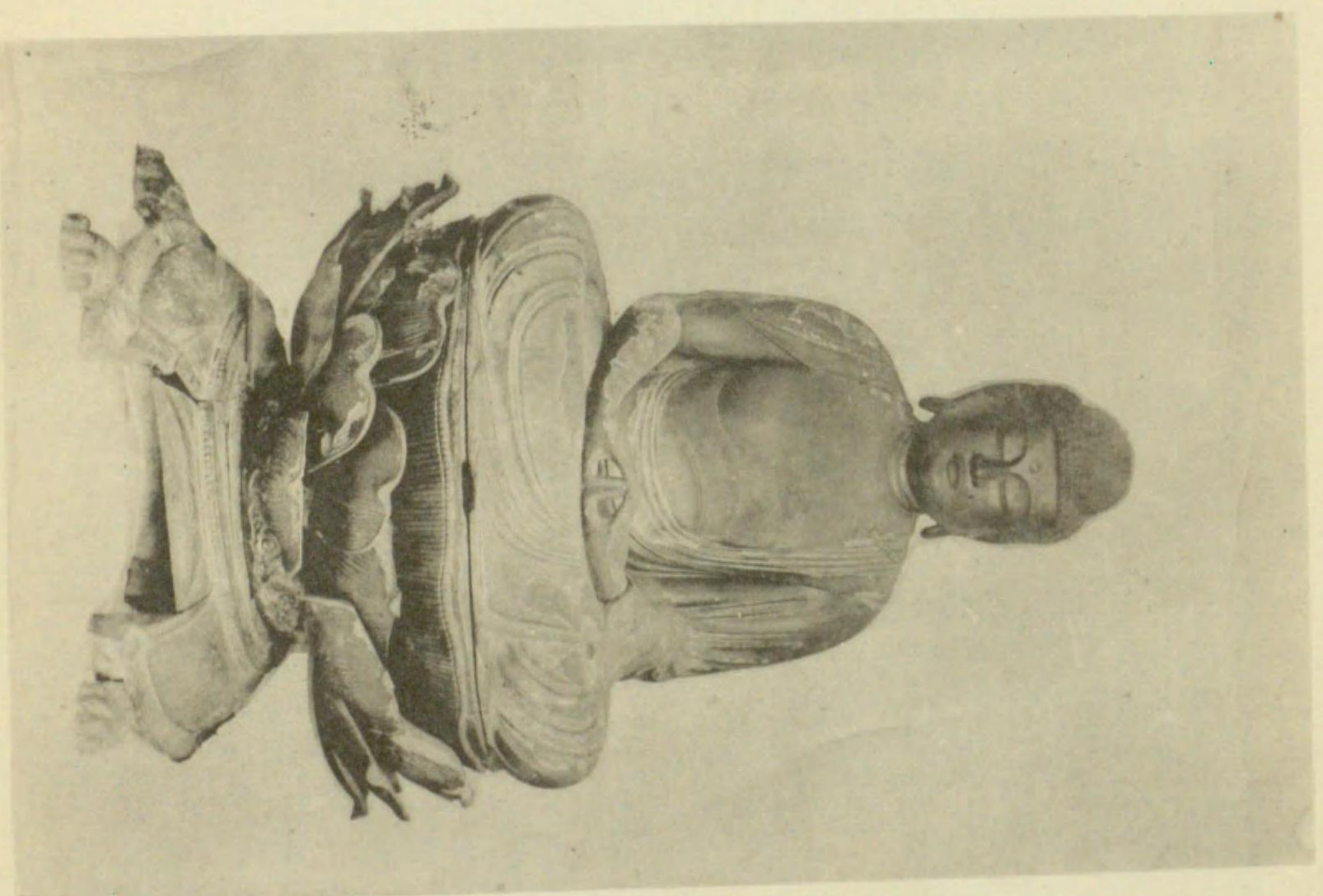


藏地院光圓舊

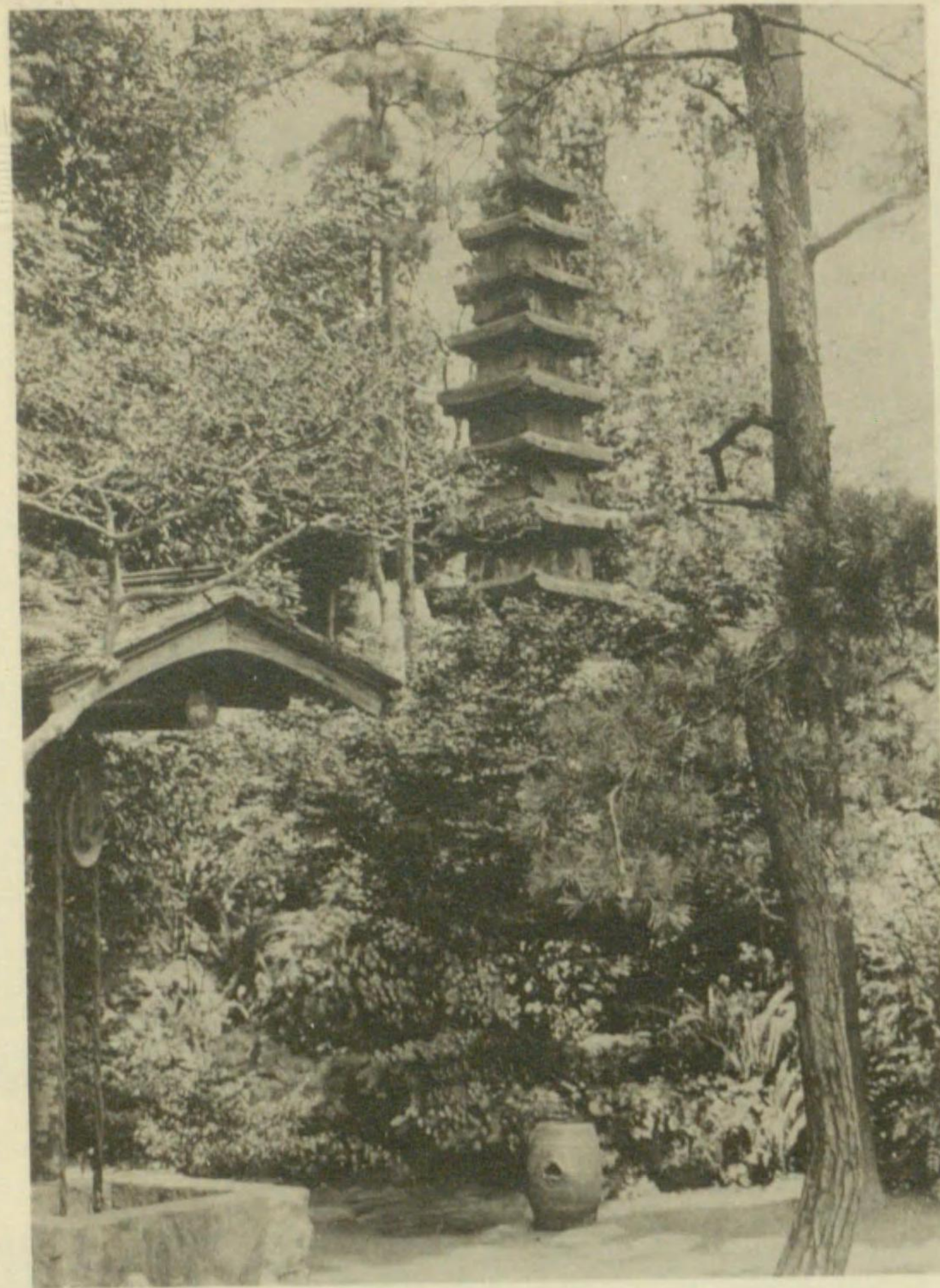




像ノ尼利舍院光圓舊



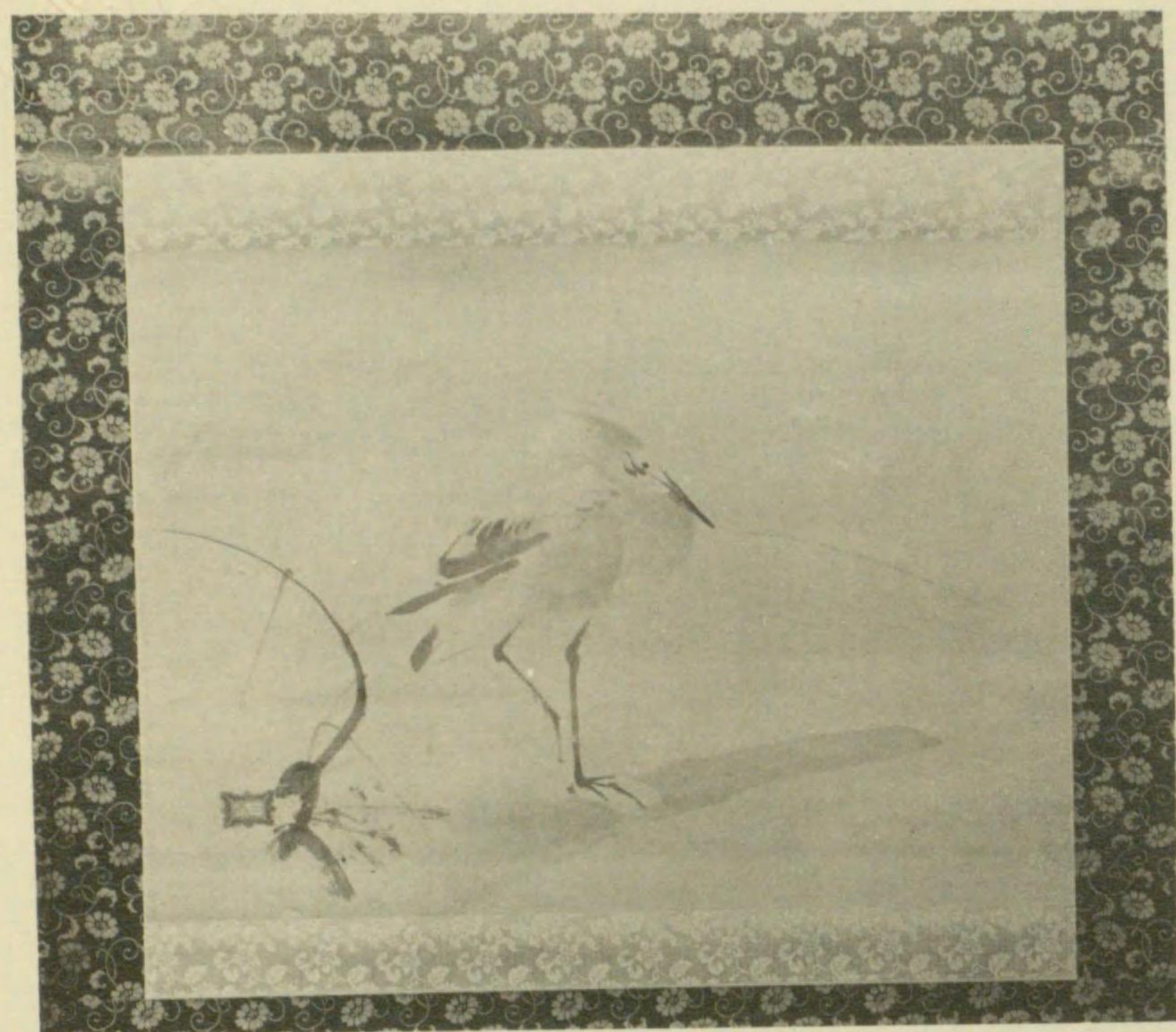
像來如陀彌佛地本社見妙
置安ノ堂迦釋下階付地宮
轉移リヨ下山符盛年四治明



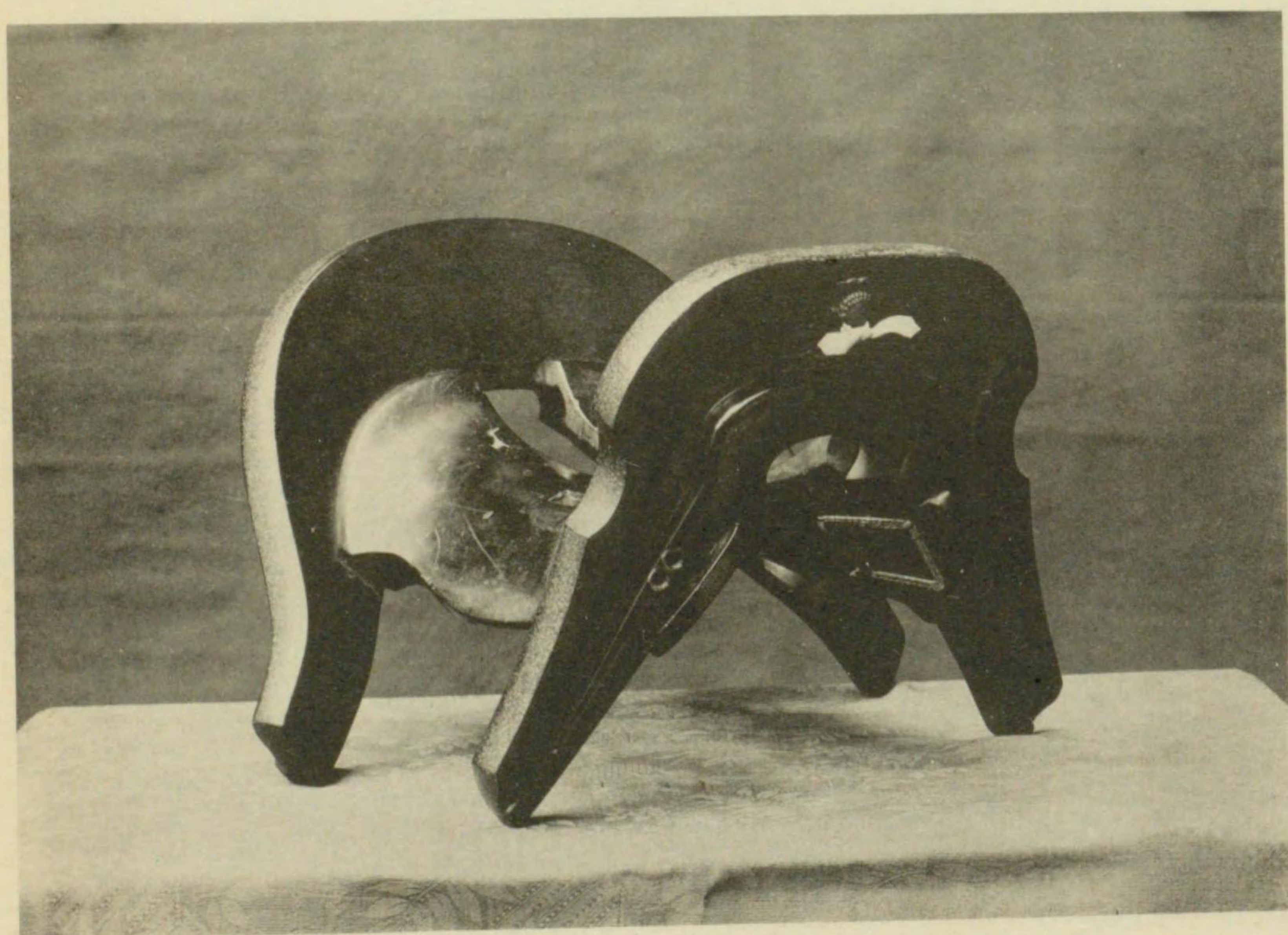
（内庭氏米）塔 重 三 十



窯 燒 田 高



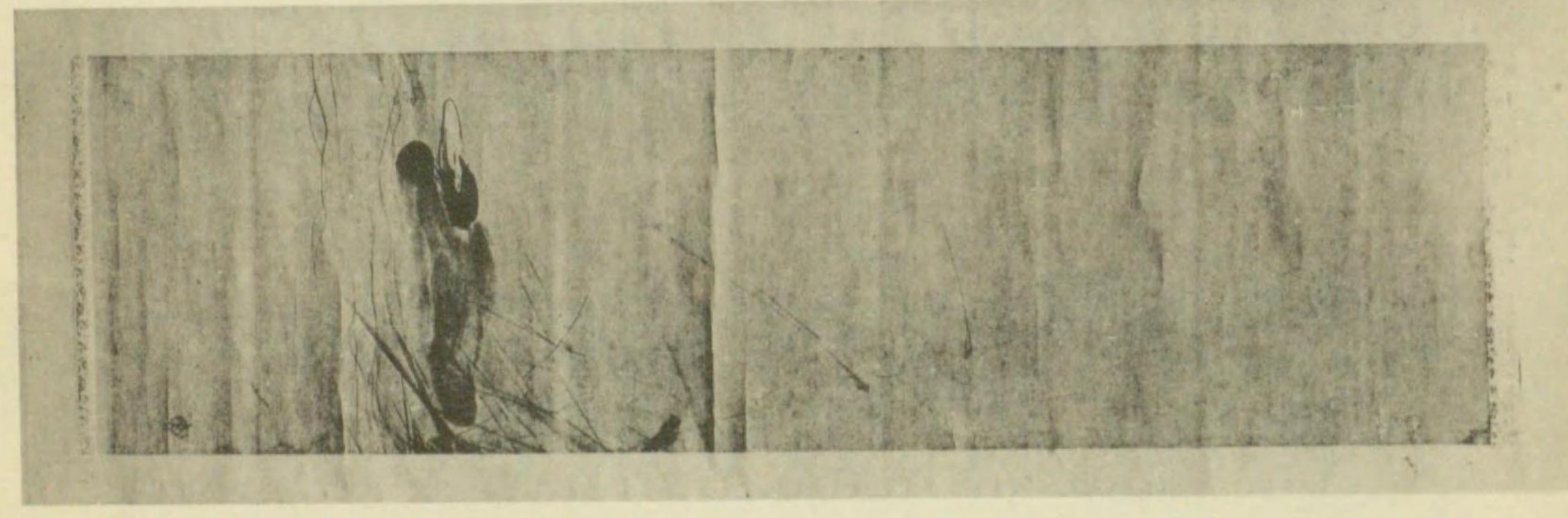
筆藏武本宮



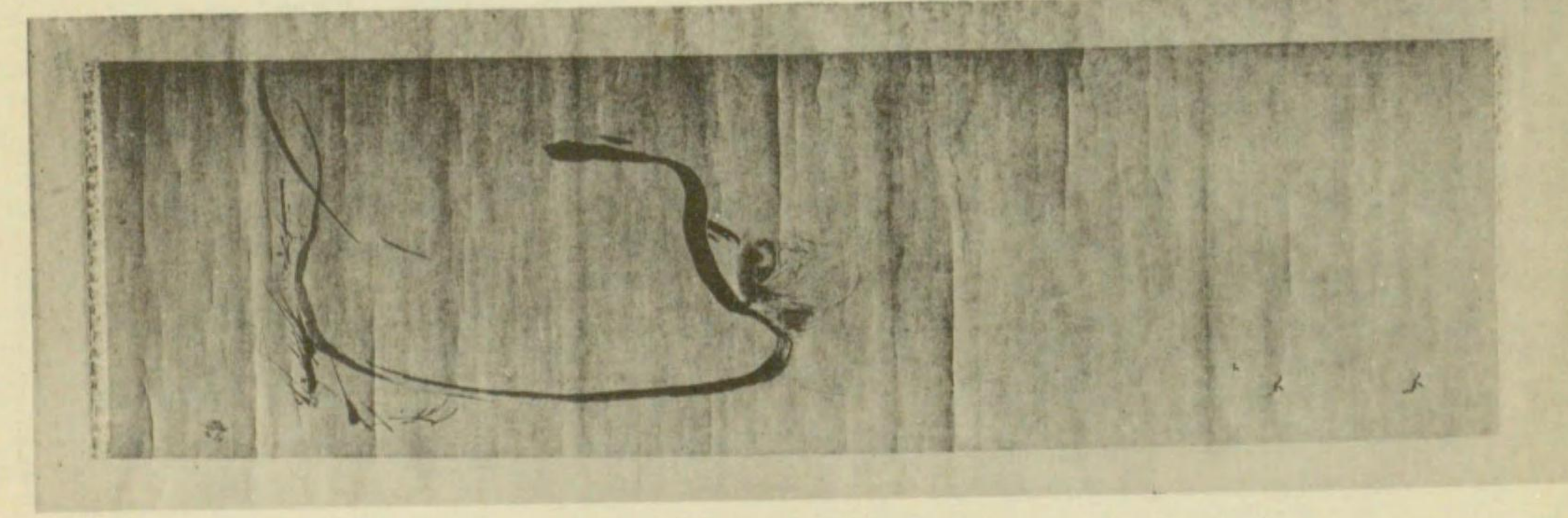
鞍 乘
作藏武本宮



華



武

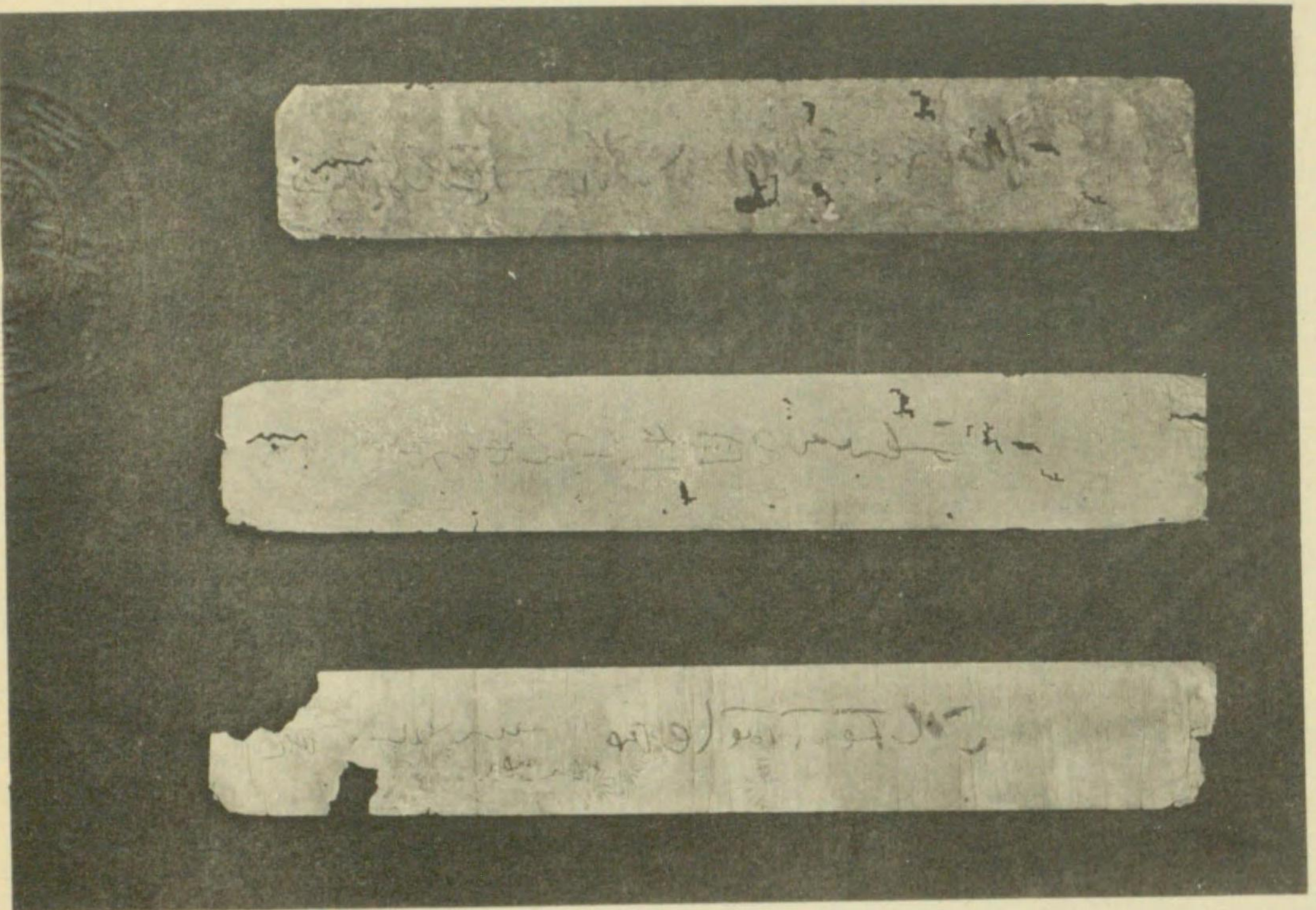


宮

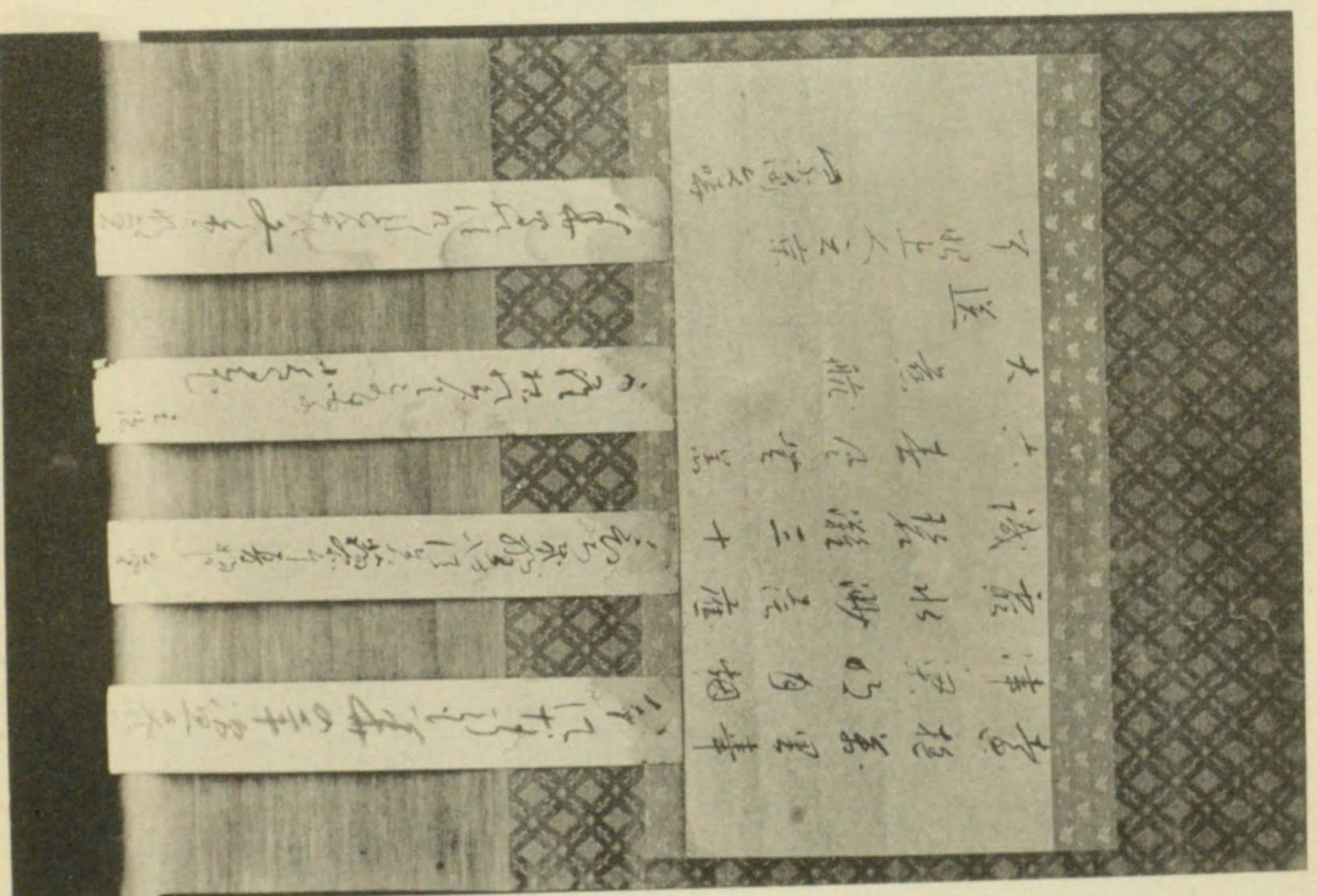
藏

本

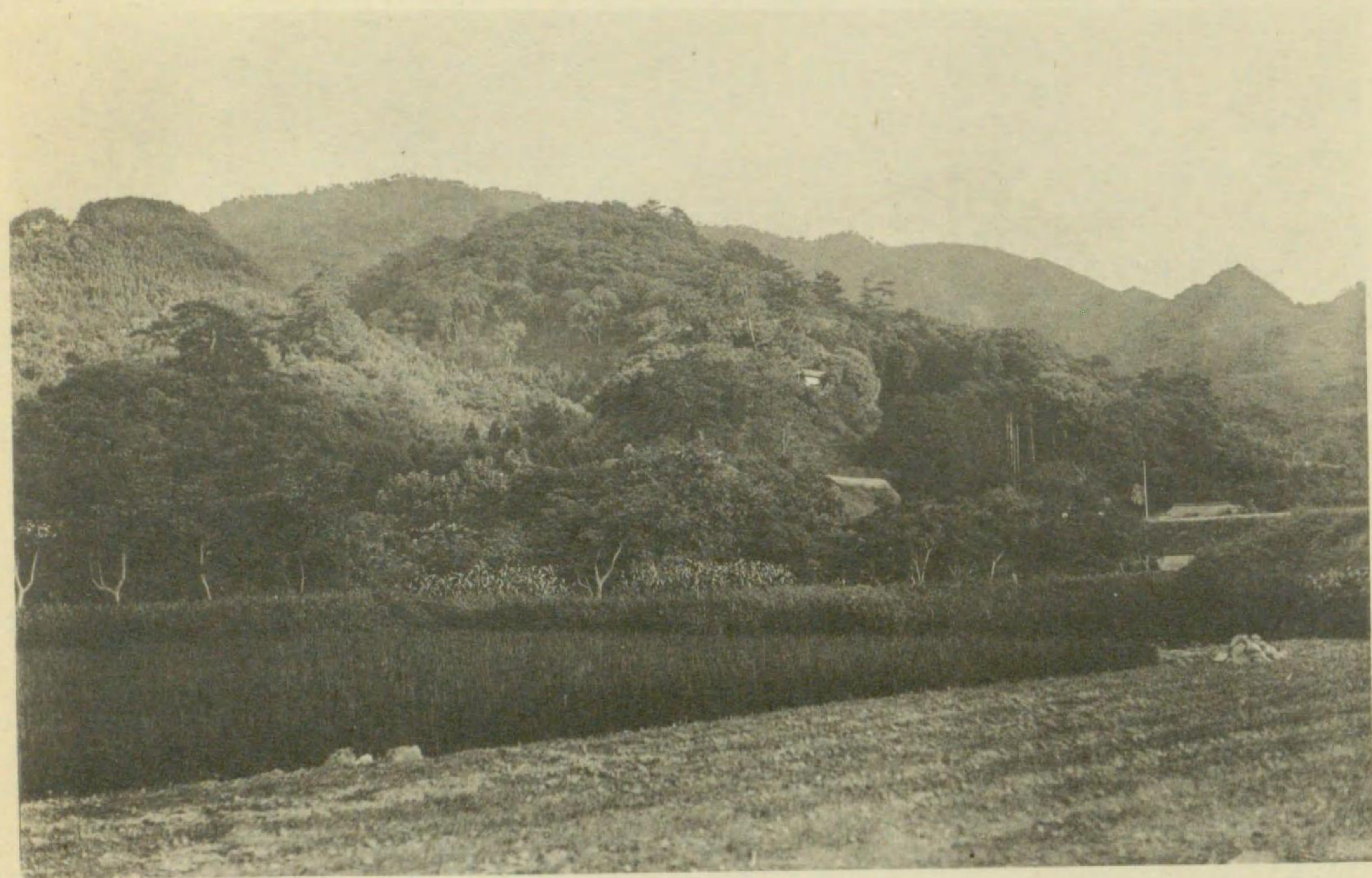




筆因崇山西



筆曉文

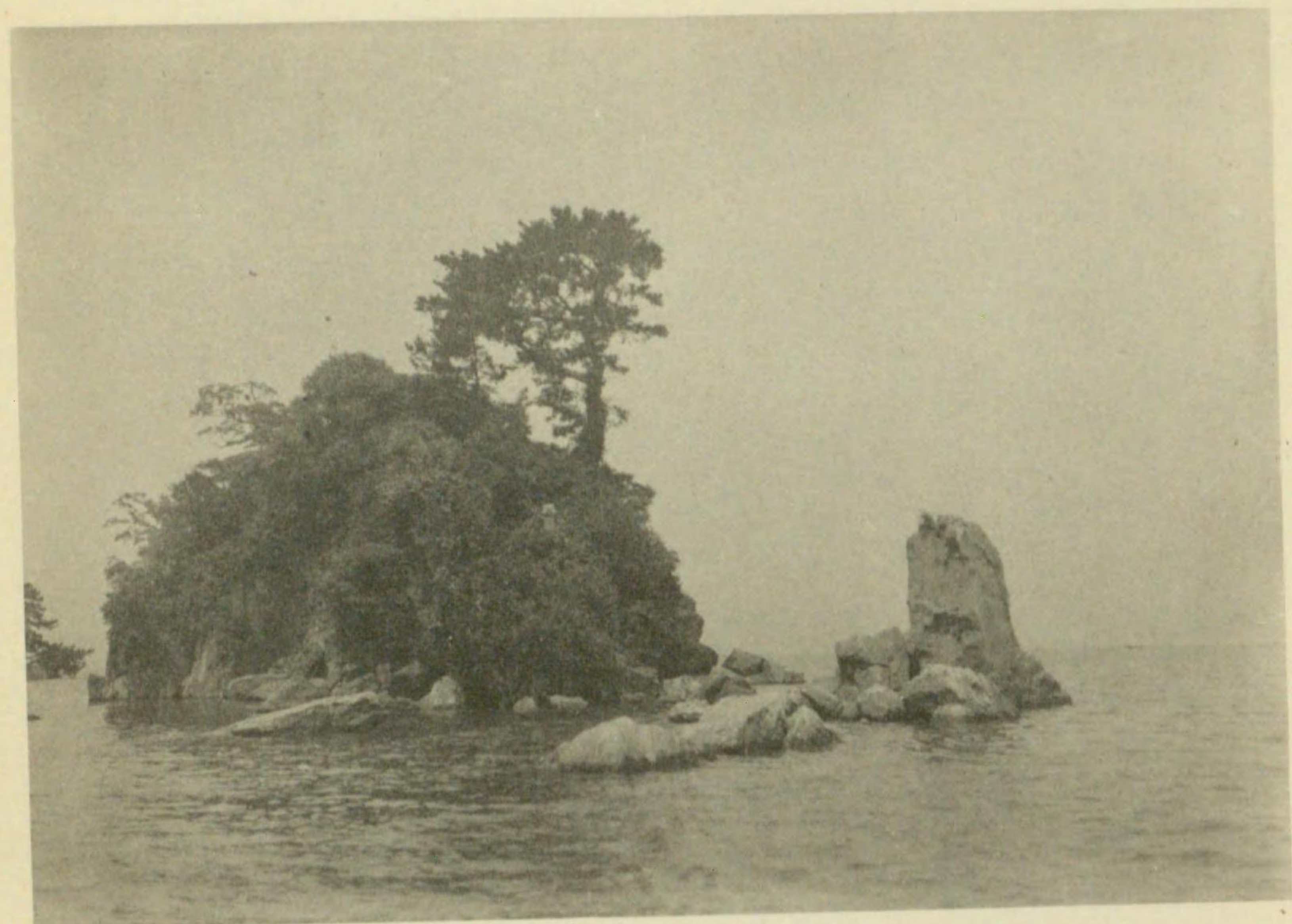


古麓城址

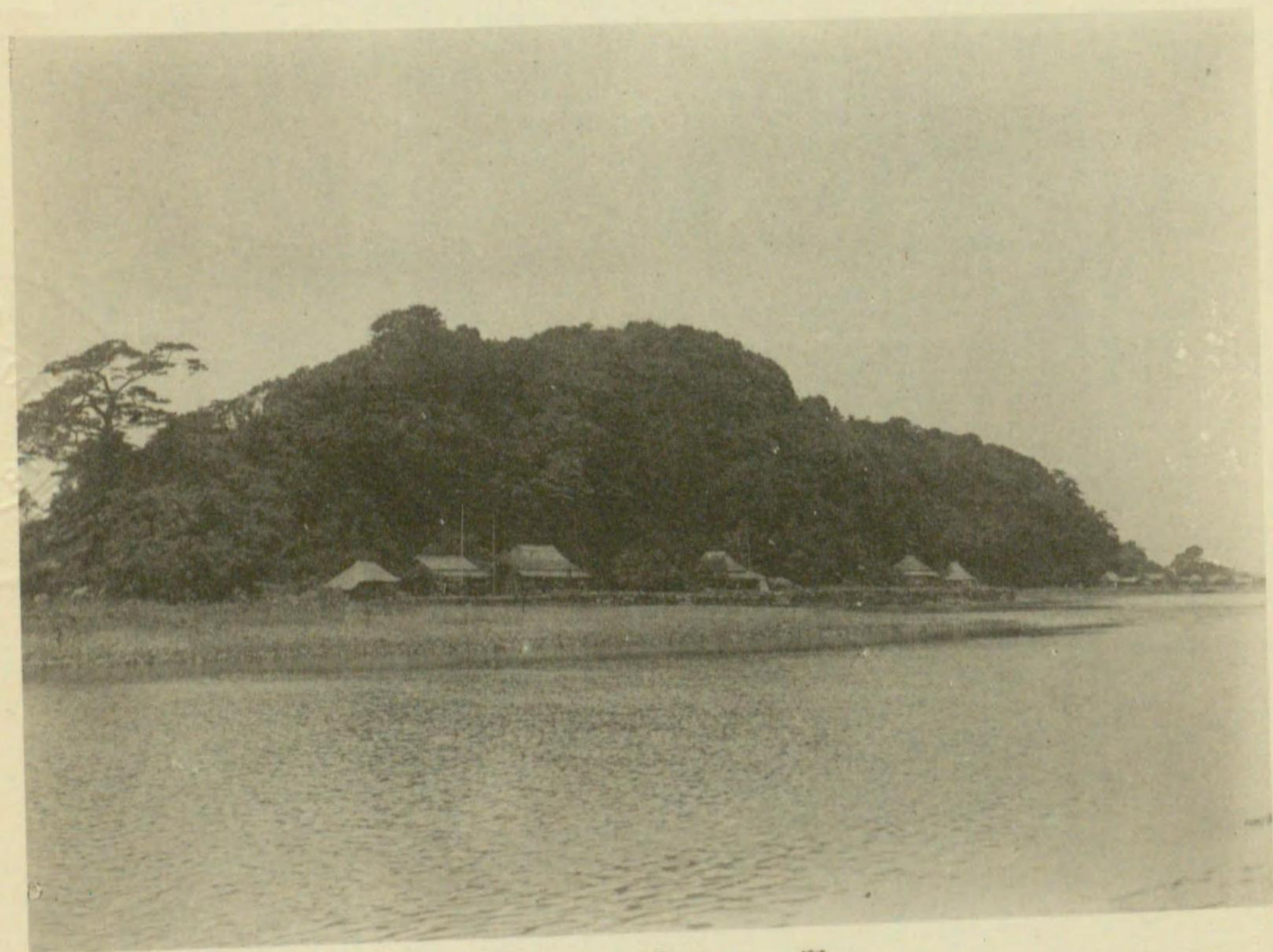


八代城址





島 水

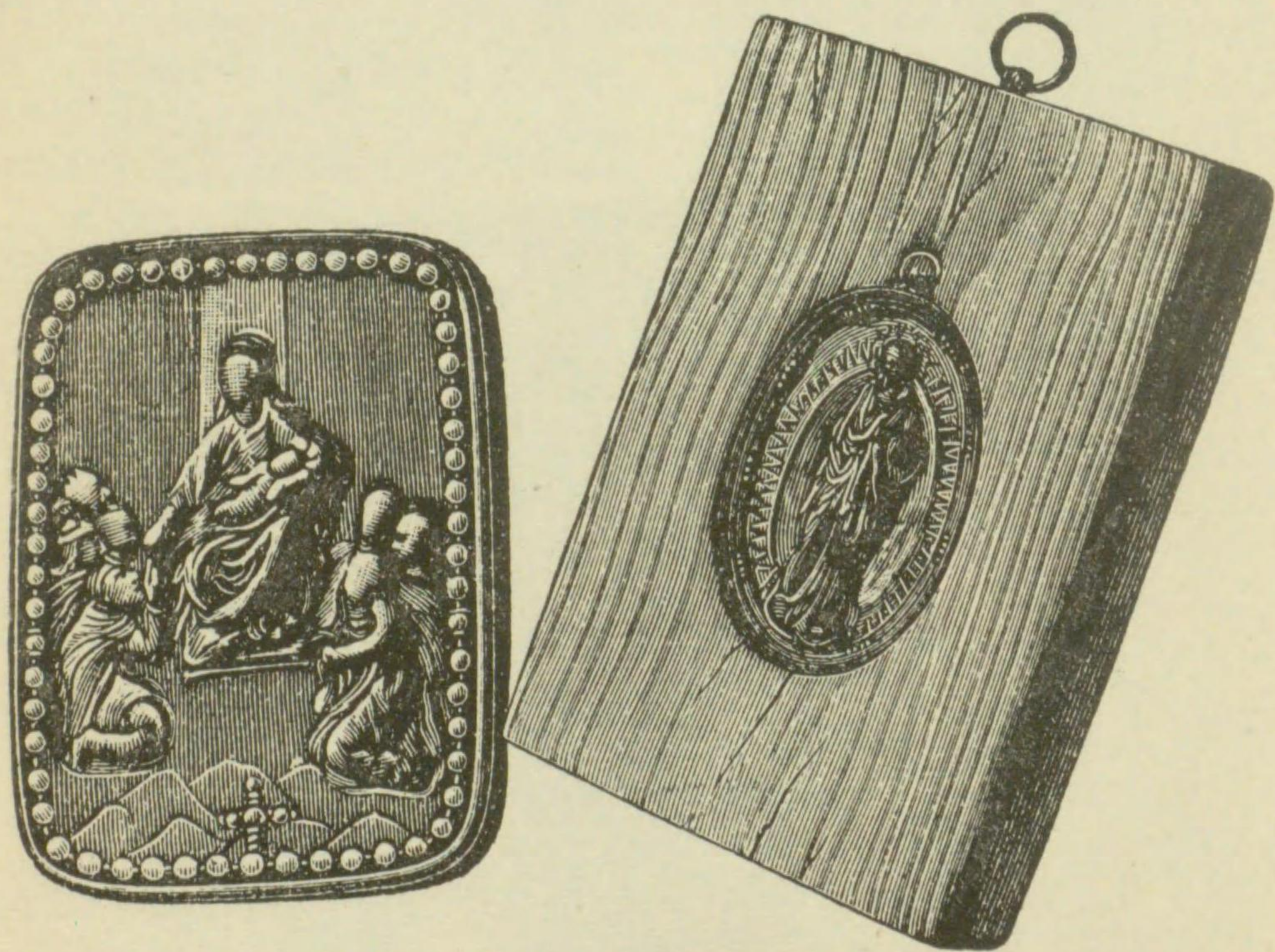


島 藏 鼠



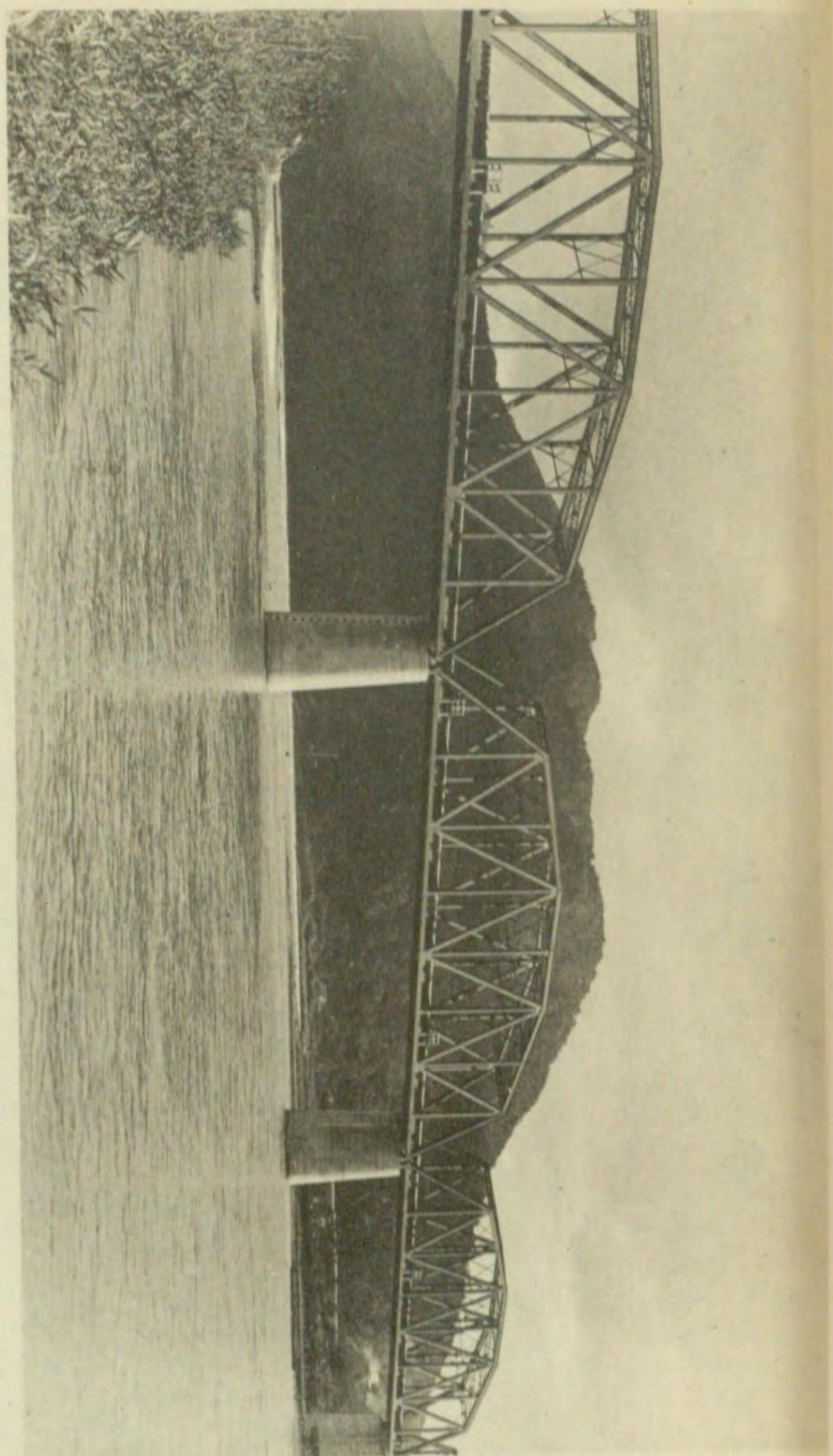


天主敎者所刑圖

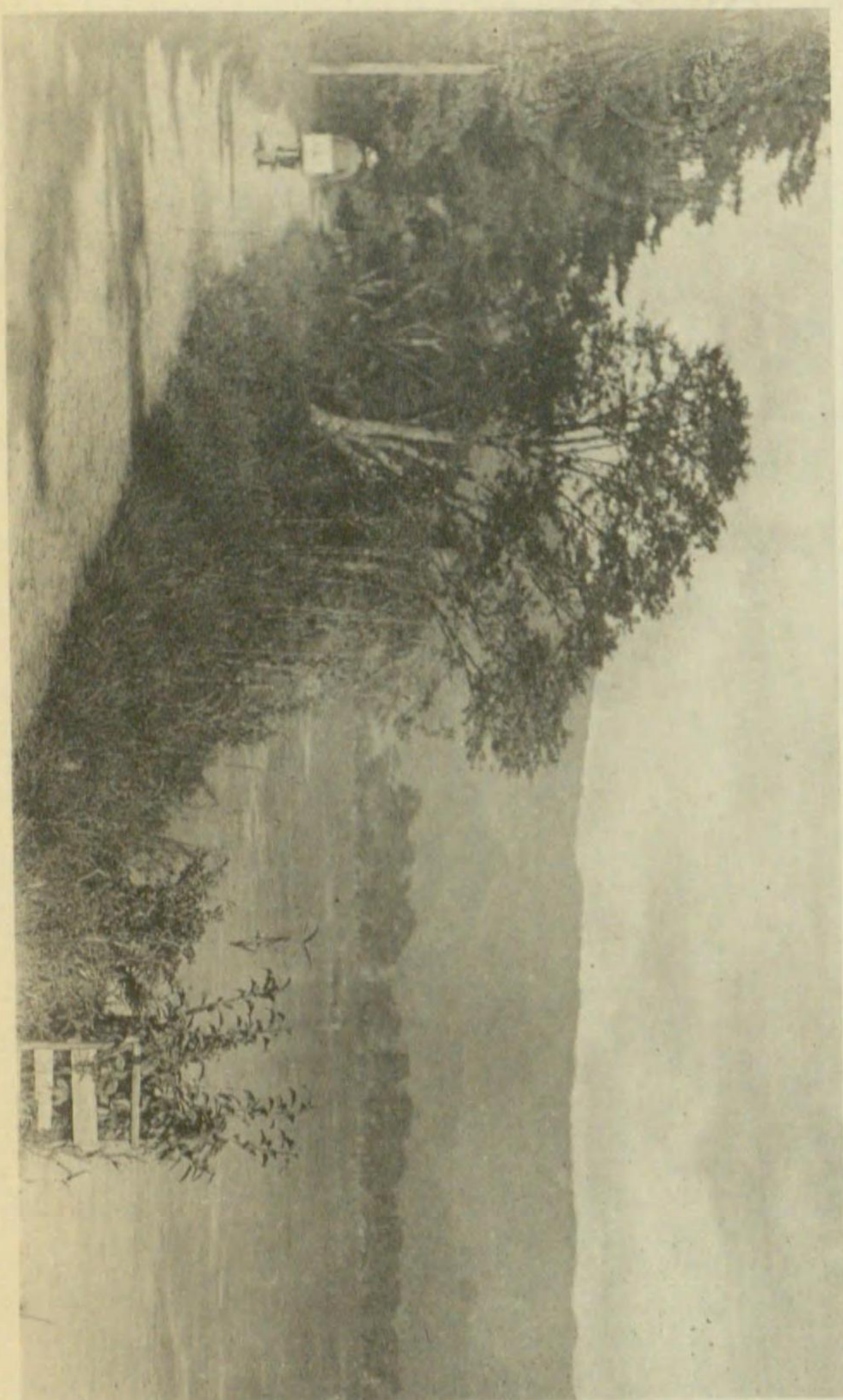


踏 繪

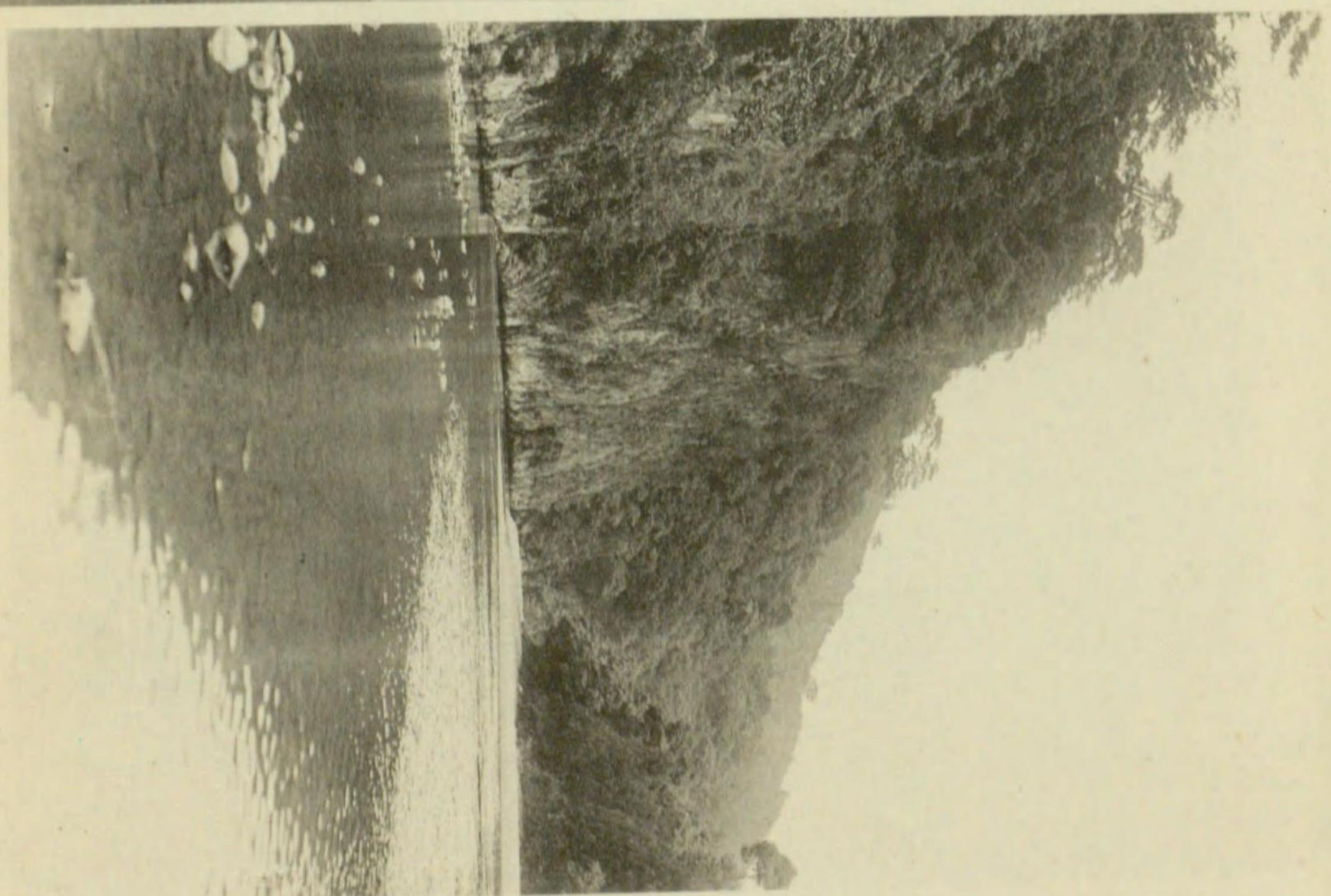




球磨川鐵橋

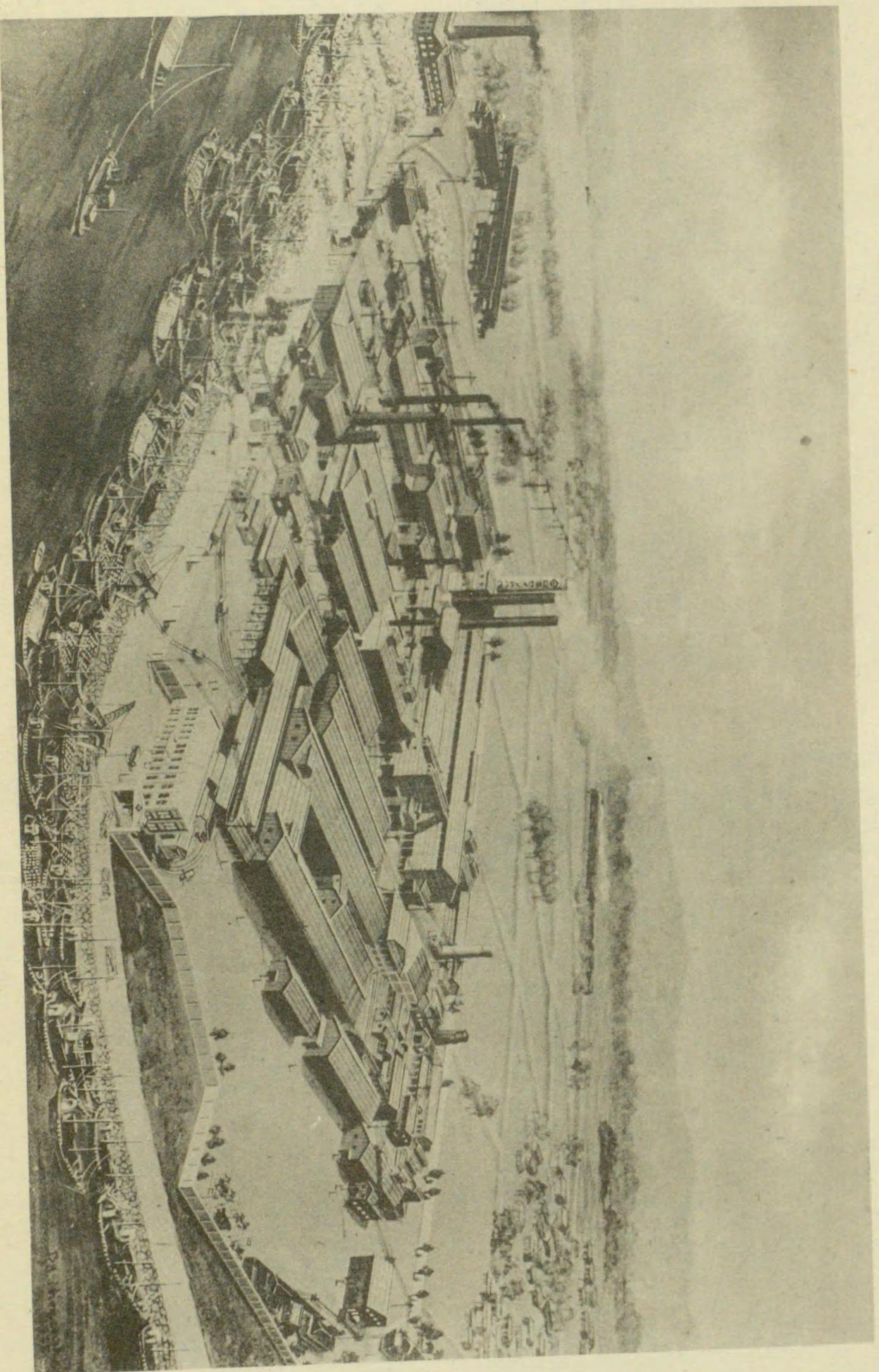


球磨川堤防



立神空瀑布(宮原町)

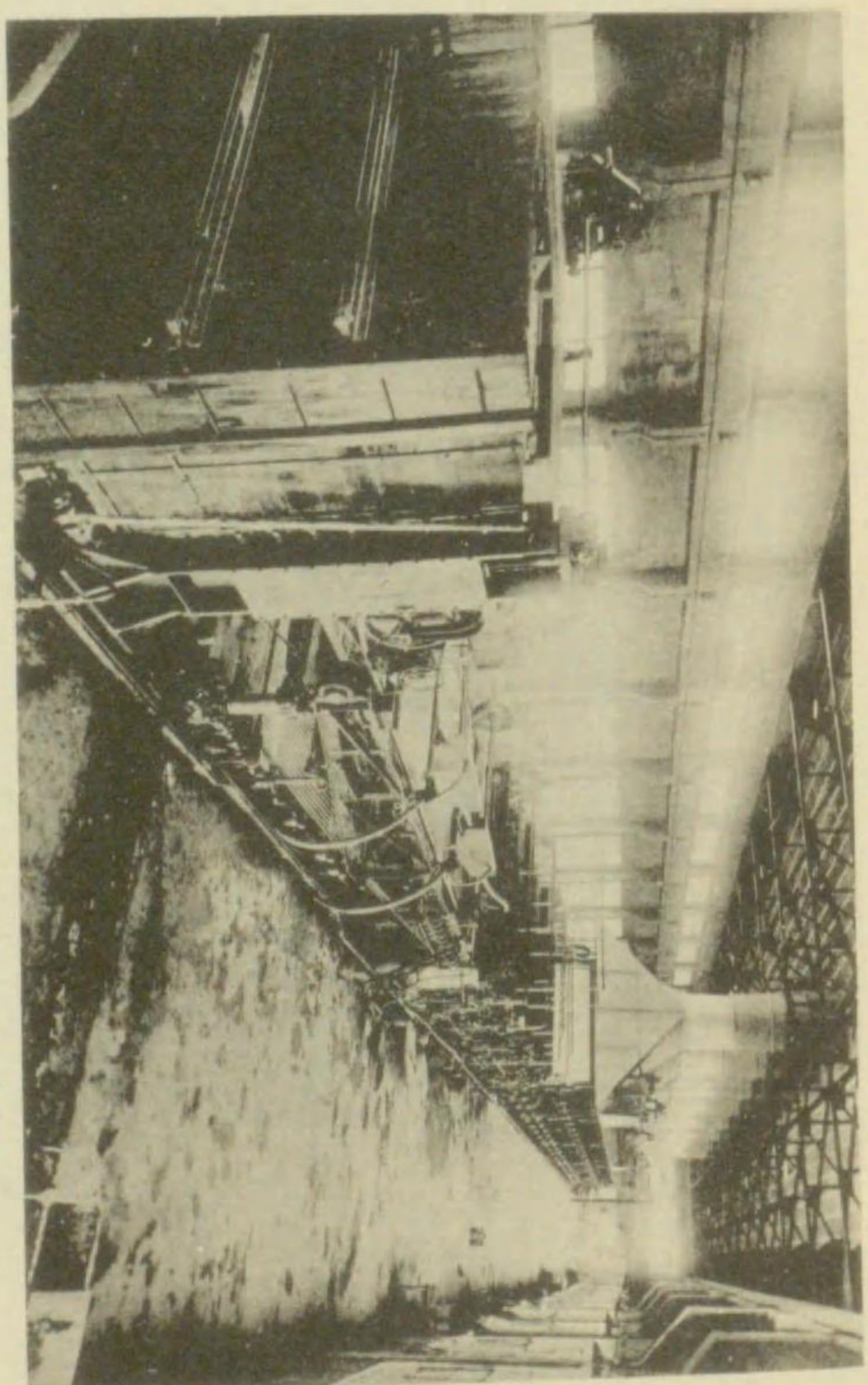
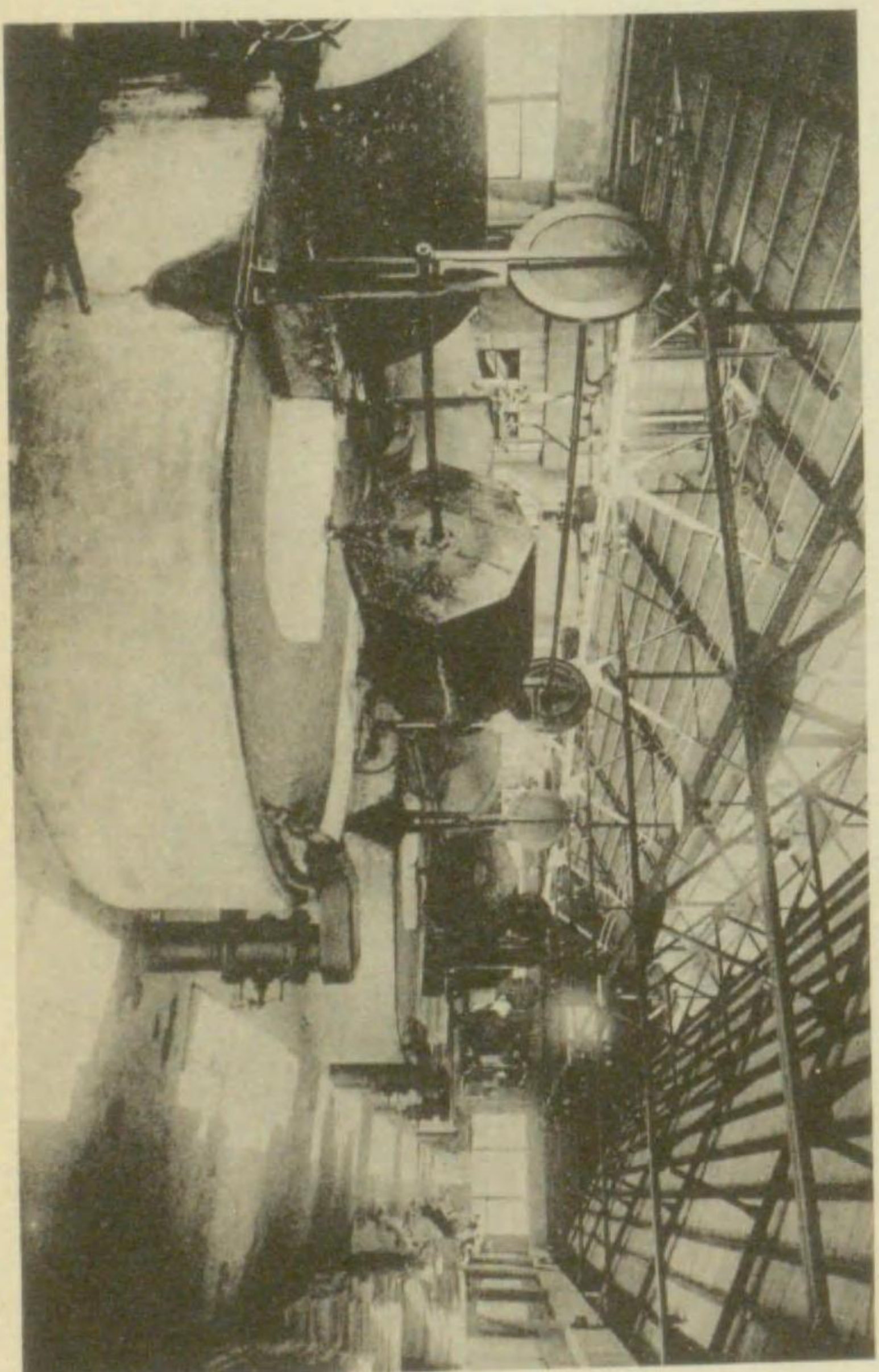
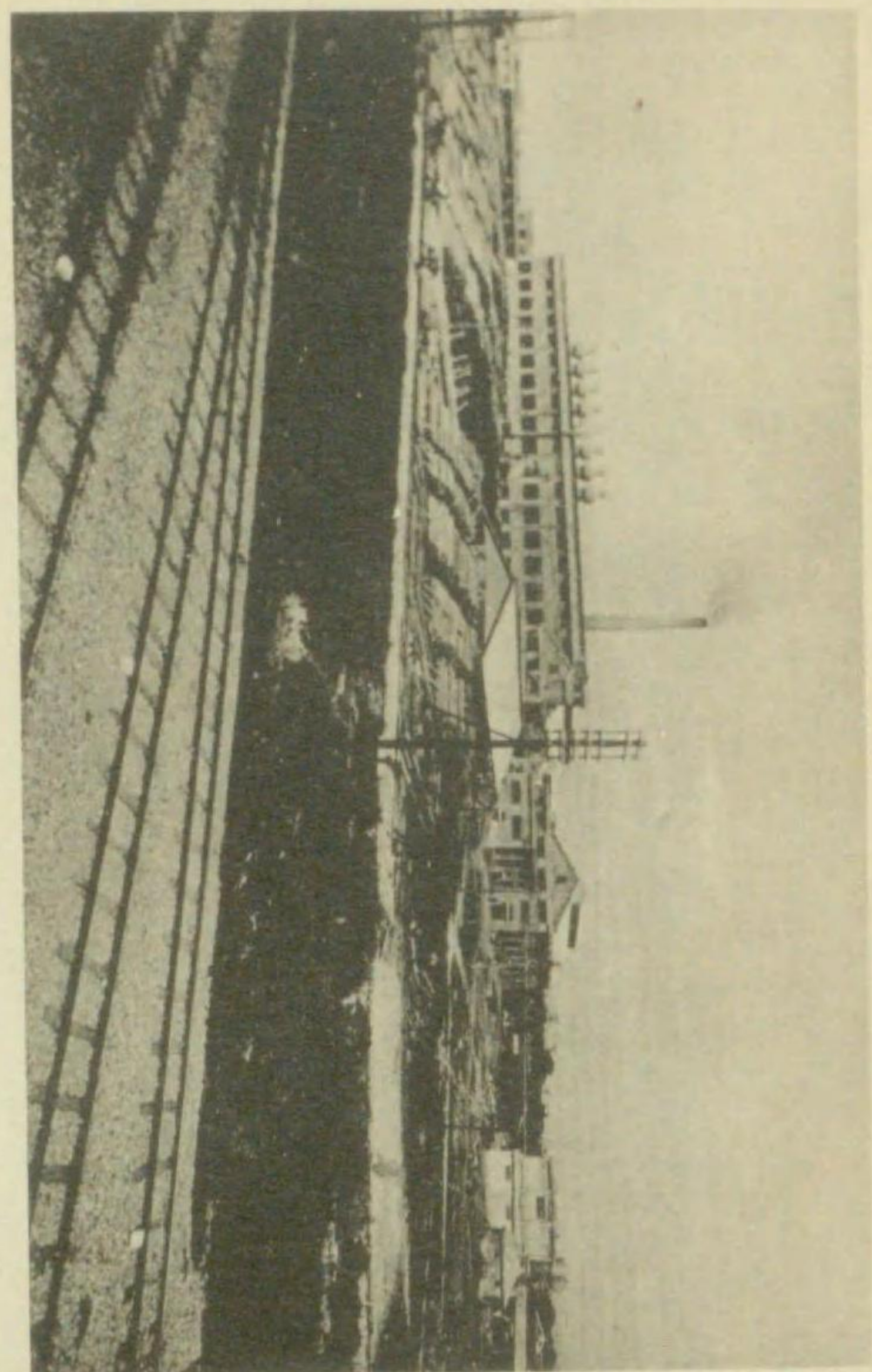
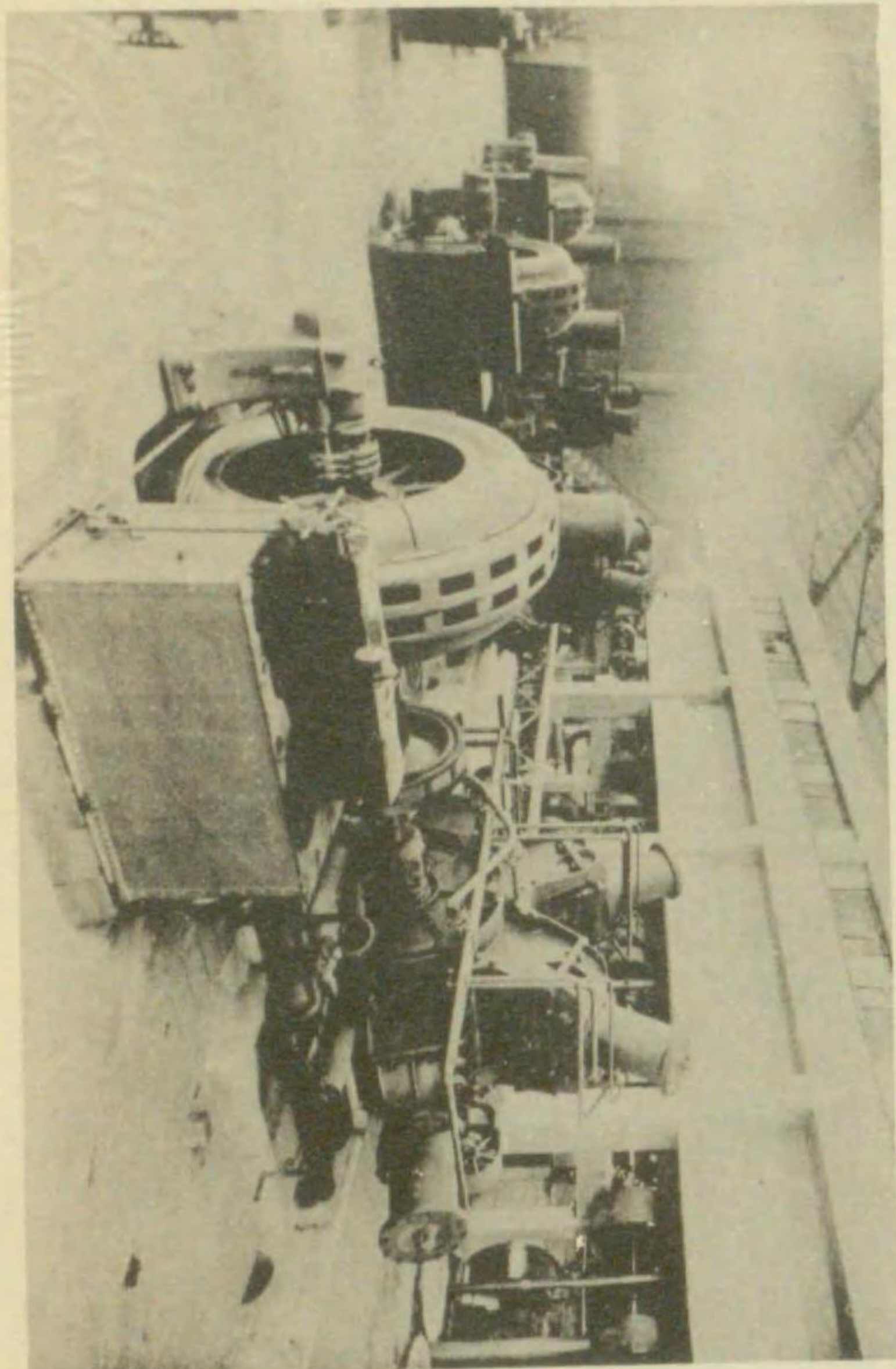


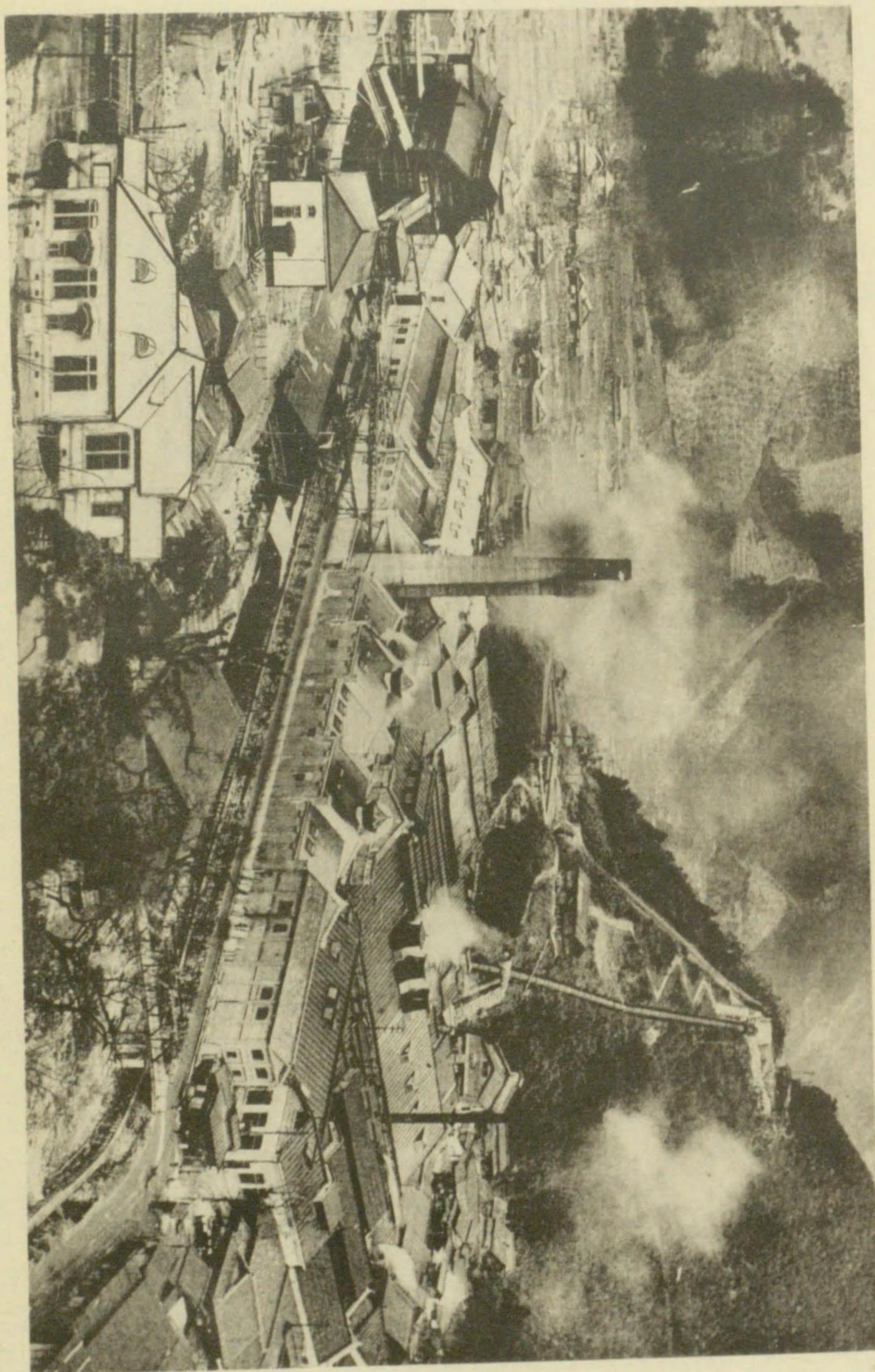


日本セメント株式会社工場



場 工 代 入 社 會 式 及 株 業 全 工 太 伴

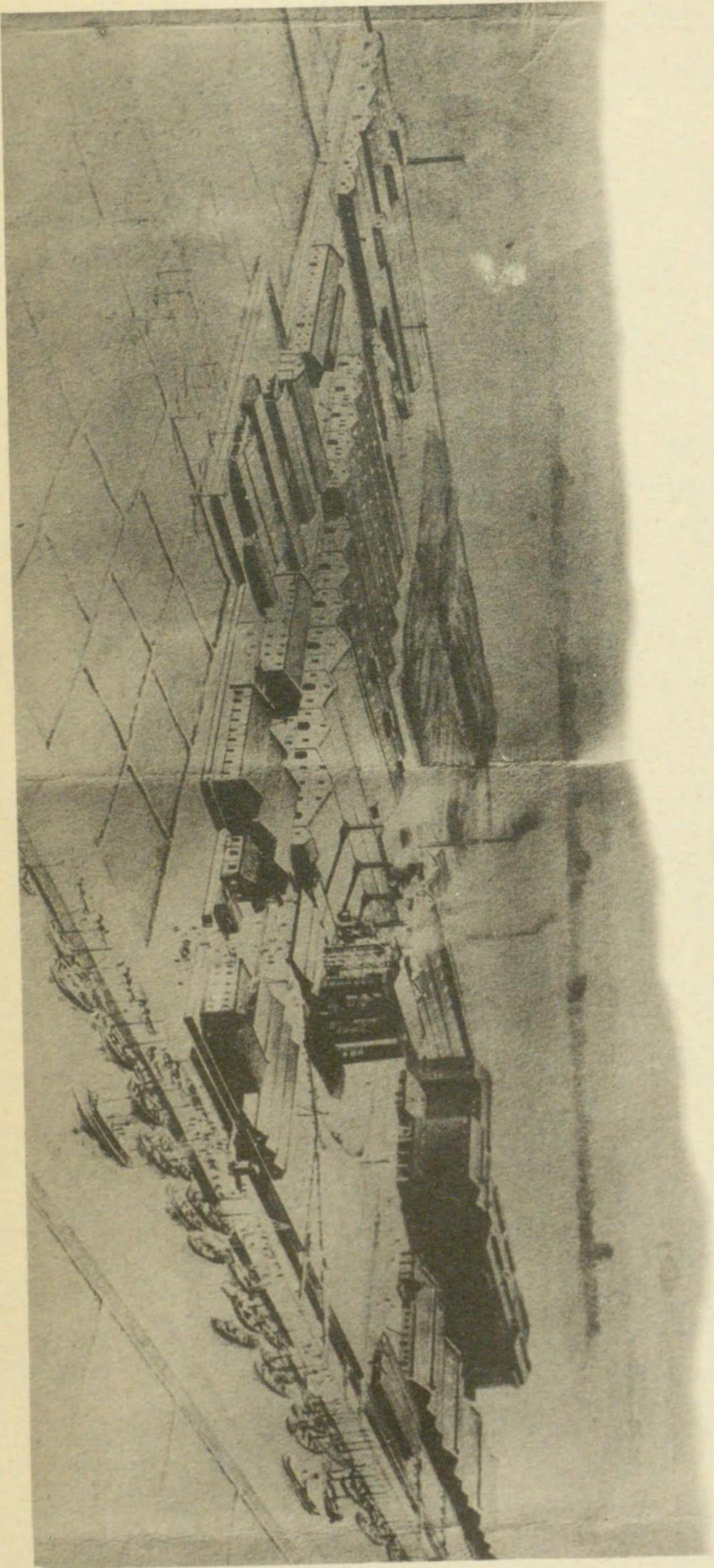




株式會社
板工業本場



日本窒素肥料株式會社



序

龍岳の雄姿東に聳々、球磨の清流南を廻る。萬傾の沃野には銀波漂ひ、點在の工場よりは盛に煤烟を吐く。これ稍く殷賑を表はし、將來の希望に輝く我八代郡の現状なりとす。十余万の民衆此地に生を樂み、文化の惠澤に浴するも、數千年の往古に溯れば平野は主として魚蝦の領域にして、山地は多く熊襲土蜘蛛の棲息せし所なり。星霜の推移は地上に變遷を起し、人事に起伏を齎す。其の迹を釋ねて今日あるを知るは、聽て將來發展の方途を策するの前提にして、吾人の責務たらずんばあらず。是れ郡誌編纂の舉ある所以なり。

余曩に郡に宰たるの故を以て、推されて教育支會長の職を汚す。偶頓挫の姿にありし郡誌編纂再興の議を起し、小川通榮・石川茂房・二神敬之・白木成邦・鈴木重久の五君を煩はし、委員として専ら其の衝に當らしむ。公務多端なる諸氏は努力を惜まず、或は古書の涉獵に、或は口碑傳説の穿鑿に、拮据經營し上梓を

急ぎしが、郡長廢止と共に職を轉するの己むなきに至り、其の脱稿を見るを得ざるを恨事ごせり。然れども幸にして教育支會長を後繼せる右田君また克く之を督せしを以て、茲に事業の完成を見る。宿望果し得て悦に堪へず。若し讀者温故知新の一助ごもならば幸之に過たるはなし。發刊に際し編纂經過の梗概を記して序ごす。

昭和二年七月

廣田増太郎

自序

夫れ郷土は人類生活の根源にして國民定住の本據たり、故に苟も生を此土に亨くるもの誰か先人の遺徳に浴し、其遺業に依らざるものあらんや。我城南の地たる山河秀麗、沃野廣濶、氣候又温和にして天産の豊富なる、人事の殷賑なる、縣下有數の郷土たり。是れ實に悉く先人の吾等に遺せし寶物にあらずや。然らば則吾等は其本源に溯り、此郷土の因に來る所を稽へ、且つ先人の遺せし功業偉績を探り、更に將來の企畫經營を策して之をして一層の發展を遂げしめ、而して之を後世に傳へざるべからず。且つ夫れ郷土を知れば國縣を解し國縣を解すれば帝國を知り帝國を知得すれば更に全世界を了解するの道に進むことを得べし。左れば郷土を解せしむるの要ある又實に多言を待たざる所なり。是れ實に郷土誌發刊の企ある所以にして、又輕々に筆を執ること能はざるもの實に茲に在り。

抑も本郡郷土誌編纂の事業たる、端を明治三十六年四月に發し、本郡教育支會の事業として當時の委員高木虎親、緒方八郎、緒方千尋、赤阪元男の四氏は直に郡内町村を區劃分擔して寒暑を厭はず、遠近を論せず調査を進め、教育支會は勿論、地方有志の士亦奮つて其事業を翼賛、後援したりしを以て著々進行を見しが圖らざりき、明治三十八年の交より委員中に退職、死亡等の異動を生じ一時中止の止むなきに至れり。然るに大正十四年本郡教育支會にては右の事業をして速に完了せしむべき必要を感じ新に委

員を囑托せしも何れも公務に多忙なるのみならず、淺學非才固より其任に非ず然りと雖も本郡として郷土誌なきは甚た歎すべきを以て奮つて之に應じ嚮きに委員の蒐集せしものを骨子とし、更に舊記を探り長老の記憶に頼り、又は當事者の有力なる援助の下に諸種の材料を得て綜合成案し、且つ始終委員の會合を重ねて討究檢覈し或は長を削り短を補ひ、舊を捨て、新に就き、疑惑を避けて眞實を選ぶ等苦心慘憺の結果漸く茲に脱稿の域に達したり。必竟前委員諸氏の基礎を置きしにあらずんば焉ぞ能く茲に至ることを得んや。吾等は眞に諸氏に向つて深く感謝の意を表する所以なり、然りと雖も急遽編纂の餘、或は遺漏の点なきにしもあらず。識者の叱正を惜まるゝなくんは幸なり。茲に本誌編纂の概要に述へて序に代ふと云爾。

尙本誌編纂に當りては諸官衙各町村役場、各小學校並に八代宮、松井男爵家、悟眞寺、春光寺、醫王寺等よりは種々の便宜を與へられ又左の諸君に對しては多大の援助を被りたり茲に芳名を掲げて感謝の微意を表す。

故中西純一君、 坂井秀敏君、 大谷壽雄君、 守屋充次郎君、 山田友記君、 今田哲夫君、
緒方源吾君、 奥田憲之君、 米知徳君、 佐藤立次郎君、 坂田道男君、 關康國君、
森崎文喜君、 満田與君、 平岡昌藏君、 宮原律雄君、

昭和二年七月

編纂委員長 小川通榮

委員	石川茂房
全	二神敬之
全	白木成邦
全	鈴木重久

凡例

- 一、本誌は各編に分類せしも、彼此相交錯するは止むを得ざる所なり。假令は偉人學者の傳記は人物誌にのみ記述せずして其關係の個所にも分載し、又は名勝古蹟も各編に散見するものあるか如し。
- 二、諸乱を涉獵し又は長老の言を蒐め、若くは區々の材料を一括したるを以て、多少文体の不一致、又は記事の精粗繁簡あるを免れず。
- 三、右の事情の下に成りたるを以て、人物に對し或は敬語を用ひ、又は省略したる個所も亦少からず。
- 四、人物誌には現存の偉人を傳せず、是れ將來ある人々にして今後の偉業大徳を期待すればなり。
- 五、各町村の記事は、町村役場及び小學校に依頼したるものなれば、報告未着の分は省略し、又は格外精密の報告ありしも他町村との權衡又は紙面の都合上、遺憾ながら其一部に止めたり。
- 六、第三編以下は町村順に依りたり、社寺等の由緒書は原文の儘に登載したり。
- 七、口繪には御綸旨の如き、又は從來秘佛とされし佛像、若くは門外不出の秘藏品の如き此際夫々所有主の甘諾を得て登載したり。
- 八、統計は可成最近に依りしも間々往年のものなきをも必せず。

昭和二年七月

八代郡誌目次

第一編 自然地理

第一章	位置及び廣袤	一
第二章	地勢	一
第三章	地質	八
第四章	動物	一五
第五章	植物	一七
第六章	氣候	一九

第二編 人文地理

第一章	區分	三〇
第二章	戶口	三二
第三章	官衙公署	三五
第四章	産業	三六
第一節	總說	三六
第二節	農業	三七
一、一般農業	……	三七
二、蠶業	……	四四

附録

八、海防に關する事……
 九、口賦に關する事……
 十、口賦に關する事……
 十一、口賦に關する事……
 十二、口賦に關する事……
 十三、口賦に關する事……
 十四、口賦に關する事……
 十五、口賦に關する事……
 十六、口賦に關する事……
 十七、口賦に關する事……
 十八、口賦に關する事……
 十九、口賦に關する事……
 二十、口賦に關する事……

凡例

第三編 八郡 史

第三節	製	茶	四六
第四節	畜	産	四六
第五節	漁業及び水産		四七
第六節	工業		四九
第五章	商業		五九
第六章	交通及通信		七三
第一節	總	説	七三
第二節	道路		七四
第三節	鉄道		七七
第四節	通信		七八
第五節	水運		八〇
第七章	教育		八一
第一節	中學校及女學校		八一
第二節	小學校補習學校幼稚園		八五
第三節	教育會		九七
第四節	小學校設置前の教育		一〇六
第八章	町村誌		一〇七

第一章	總	説	一三九
第二章	國造時代の概観		一四三
第三章	國司時代の概観		一四五
第四章	守護地頭時代の概観		一四六
第一節	守護地頭時代初期		一四六
第二節	名和氏地頭時代		一四七
第三節	相良氏居城時代		一五〇
第五章	城主時代の概観		一五三
第一節	小西・加藤氏時代		一五三
第二節	松井氏城主時代		一六四
第六章	明治維新以後の概観		二九〇
第一節	維新以後の變遷		二九〇
第二節	海面埋築		三一五
第三節	町村沿革及び附表		三三〇
第四編	史蹟及び名勝		三四六
第一章	神社		三四六
第二章	寺院及び佛堂		五〇三

第三章	古城趾及古戰場	六六七
第四章	貝塚及び古墳	七〇〇
第五章	名勝及び古蹟	七二七
第六章	墳墓	七八四
第五編 人物誌		
第一章	偉人及學者	八一三
第二章	孝子順孫節婦義僕	八七六
第三章	技術家	八八四
第六編 諸團體及び傳説		
第一章	諸團體及各種統計	八九二
第一節	諸團體	八九二
第二節	各種統計	九〇五
第二章	傳説及び俚諺	九二一
補遺	戸長及町村長、八代築港	九三〇

熊本縣八代郡誌

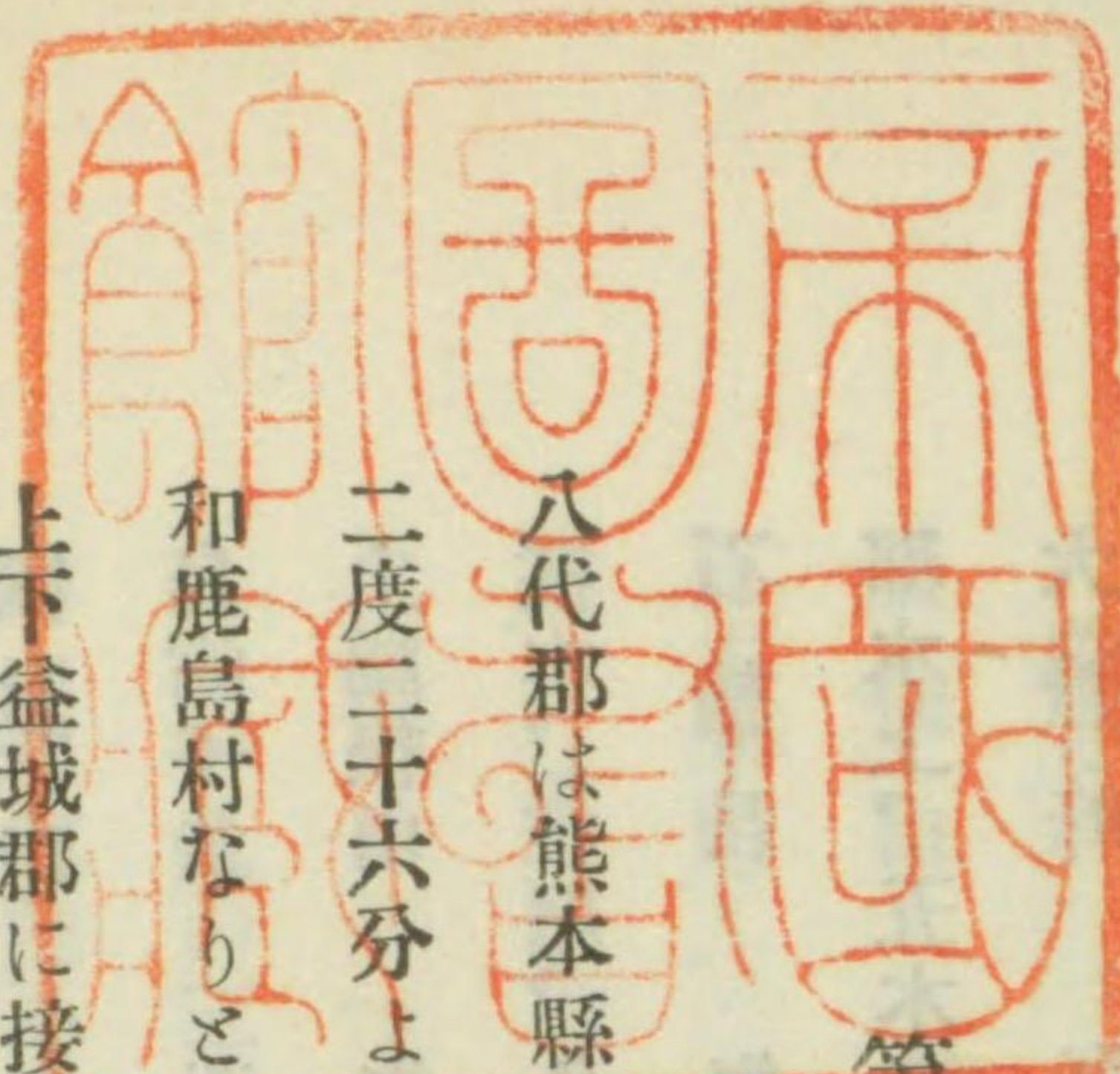
第一編 自然地理

第一章 位置及び廣袤

八代郡は熊本縣の稍南部に位し、東經百三十度三十二分五十三秒より百三十一度四分に及び、北緯三十二度二十六分より三十二度四十九分に達し、極東は樅木村、極西は金剛村、極南は上松求麻村、極北は和鹿島村なりとす、東は宮崎縣西臼杵郡に接し、西は八代海に面し、南は球磨郡、葦北郡に界し、北は上下益城郡に接す、東西約十里、南北約七里、面積四十一方里餘にして本縣の十一分の一を占む。

第二章 地勢

東端宮崎縣に境する地方は、九州南部山系横はり、其餘脈郡内に延亘するを以て山岳重疊し。西部は肥後平野の一部をなし、球磨川、氷川の成せる沖積平原にして、全郡の約六分の一を占むるに過ぎずと雖も、天産豊富に戸口稠密、運輸交通の便又宜しく全郡の主力は實に此平坦部にあり。



西部の海灣を不知火海又は八代海と云ひ、遠淺にして碇舶の便宜しからず、唯八代町、鏡町に小帆船の出入するのみ、海中魚介の産少からず、蛤、牡蠣、小袖貝、蛸貝、貽貝、鰈、鱒、鱈、鰻、鰻、烏賊、章魚、鰕、海苔等あり。

●山岳

白鳥山 五家莊の東隅樅木村に在り、宮崎縣との境に聳ゆ、海拔千〇六十米なり。

國見山 白鳥山の北方に聳へ、海拔千七百卅九米、宮崎縣との境にあり眺望廣濶、九州の雄峯たり。

烏帽子岳 樅木村の東北隅に聳へ、白鳥山と南北相對す、海拔千五百十五米なり。

上福根山 海拔千六百四十五米、五家莊の中央にあり、巍然として天空を摩するもの實に此山なり、

樅木、椎原、久連子の三村に跨る。

石楠岳 海拔千二百十二米、横尾山は海拔千〇七十米、東西に連りて久連子の南境に峙ち、球磨郡水上、五木の兩村に跨る。

大鐘峰 海拔千三百九十五米、小鐘峰海拔千三百七十七米にして南北に連り、五家莊の西部を横

斷す、仁田尾村は悉く其山麓中に在り。

朝見山 海拔千三百七十米、雁俣山海拔千三百米にして東西に相並び五家莊の北境に聳へ、下

益城郡西砥用村に跨る。

保口岳 海拔千二百八十一米、一名を日向をふと云ふ、柿迫村の東南隅に在りて横尾、上福根、

小鐘の諸峰と相對す。

六本杉山 海拔千二百十五米、一名を大峰と云ふ、栗木村の南境に聳へ、川俣村及び球磨郡五木村

に跨る。

雁俣山 葉木村と下益城郡西砥用村との間に峙つ、海拔千二百四十米なり。

三本木峠 海拔一千米、栗木、柿迫の兩村に跨り保口岳の西に在り、其脈北に延びて笹越峠、内桑

岳となり白山岳に連りて、川邊川、氷川の分水界をなせり。

白山岳 海拔千〇七十二米、釋迦院岳海拔九百八十米、權現岳海拔七百七十三米（一名糸原岳と

云ふ）此の三山は東西に連り、柿迫村の北境を限りて下益城郡西砥用村に跨る、釋迦院岳の頂上に金

海山釋迦院あり、山中樹木鬱葱として晝尙暗く、林間に異草奇樹あり、昔より西の高野山と稱し古來

賽者亦少からず。

矢山岳 下岳、栗木の兩村に跨る、海拔八百七十米、山容秀麗なるを以て一に「肥後の小富士」

又は「袴腰」と稱す。

龍峰山 龍峰村の東に聳へ、海拔五百十七米に過ぎるも、平野の東方に屹立し山容秀麗なるを以て

其名高し、殊に冬季に於ける積雪は古より八代八景の一に數へられ、又鎮西八郎の舊城址今尙存す。

●河 流

球磨川 縣下第一の大河にして古來日本三急流の稱あり、源を球磨郡水上村江代山中に發し、川村にて五家山中より來れる川邊川を合して西流し、球磨郡、葦北郡の境界を流れ本郡に入る、其長さ約百八籽、人吉町より八代町に至る五十六籽の間に六十四瀬あり、激しては奔瀨となり、集りては深潭となり、絶壁前に當り、奇岩横に蹲る將に是れ

短槩截波下急流、白雲紅葉峽中秋、

石馳山奔舟頻轉、欲寫奇峯不自由、

の概あり、下流平野に出で二派に分る、本流は本川と云ひ南に流れ梅檀に至りて更に南川を分ち海に入る、又支流は萩原より分れ新川と云ひ八代町に接して前川と稱し、本流との間に麥島の三角洲を成す、寛文八年舟楫の便を開きしより、明治四十一年鹿兒島本線の一部人吉線開通迄は、旅客の往來物資の運送一に舟運に依りたりき、河身に發電所二個所あり、一は鮎歸谷に、一は深水谷にあり、共に九州製紙株式會社の工業用に供す、又郡内の灌漑用水は概ね此の河水に依る、現今平坦部に於ける球磨川の右岸山鹿町井手用水に依るもの約三千町歩、郡築用水井手に依るもの約一千町歩、一面更に縣營新地一千余町歩の灌漑用の井手新設あり、又左岸遙拜堰井手の用水に依るもの約一千五百町歩に及ぶ河中魚類の産多し、殊に鮎は夙に其の名聲甚た高く、産額亦多大にして其の首位を占む、下流海に注

く處に海苔を産す。

川邊川の上流柿迫村の深溪永尾俣川に千段瀑の瀑布あり、高さ約九十米、絶壁削立の間に一條の素練を引き、碧瑤瑠璃を碎き、轟聲四隣に響き、烟霧濛々瀑面を掩ひ、日光映射すれば彩虹を現し、三伏の候尙膚に粟を生せしむ、幽邃の境、壯絶の狀實に一偉觀たり。

深水谷の中流に走水瀑あり、高さ約百米余にして風致絶佳なりしも、現今上流を水電に利用せるを以て舊觀を存せず。

氷 川 柿迫村内桑の山中に發源し、岩奥川、栗木川等を併せ下岳村、種山村を經、川俣川を容れ宮原町を横斷して、鏡町の西芝口に至り海に入る、流程約三十六籽、舟楫の便なくも灌漑の地積約七百三十町歩あり、河の右岸に立神の乾瀑あり、斷崖絶壁數十丈實に一奇勝たり、此の川古來燧石を産し其の名高く、又鮎を産す、産額球磨川の比なきも、其の味は夙に他産を凌ぐ。

日本の本の肥後の氷川の燧石

日々に一と二たひろうひとひと、

日置川 水流約十六籽、一名紅葉川又水無川と云ふ、宮地村猫谷の三峰山に發源し、八千把村に至り海に入る、舟楫の便絶無にして却て屢々溢水の患あり、宮地村、八千把村、千丁村の田地に灌漑する數百町に及ぶ。

流藻川 高田村の清水に發源し、植柳村、金剛村を経て海に入る、灌漑の用をなすこと少からず

●島嶼

高島 松高村に在り元海中の一小島なりしが、文化十三年海面埋築の爲め半島なり、更に明治三十七年郡築新地竣成の後全く一丘陵となれり、島上に親世音を安置す賽者少からず全島石灰岩より成り、現今日本セメント株式會社八代工場の原料として採取す。

大島 周圍殆ど一里、松高村に屬す元無人島なりしが、明治維新後石灰製造の爲め移住者漸次増加し、現今八十余戸、人口約五百五十、明治四十一年九月株式會社を組織し石灰の製造販賣の統一をなす、現今製品の總額百萬俵以上に達し價格二十一万余圓に上る、沿岸魚類を産す、島中に學童八十余名を有する小學校あり。

三ツ島 大島の西方にあり、南島、中島、北島の三島より成る、地籍は松高村に屬す、元來樹木なく單に草叢の島なりも、近時同村の青年團に依りて植林をなせり、附近魚類の産額多し。

築島 金剛村の海上に在りて植柳村に屬す、大築島、小築島、觀音島、黒島、女島、鷓子島より成る、大島、高島と同じく諸島皆石灰岩より成るを以て、從來日本セメント株式會社八代工場に原料として採掘し來りしが、近年大牟田市に於ける電氣化學工業會社も亦本島の石灰石を採掘するに至れり。

白島 八代町に屬せる海中の一小島なりしが明治三十七年郡築新地築造の際、堤防の一部に利用せられたり、全島大理石より成る、白島石と稱し硯、文鎮、風鎮、門札等の類より石碑、墓碣其他建築用材として廣く賞美せらる、島の東端と西端とに清冽なる湧泉あり、西なるを地獄尻と稱し水量頗る多し、郡築村の用水に供せらる、本島は名勝の地として遊覽者多し。

産島 一名を龜島と云ふ八千把村に屬す、白島と同じく郡築新地築造の際其一部となる、往年石灰製造地として有名なりしも、現今は原料盡き僅に數戸の人家を算ふるに過ぎず、里俗傳へて鷓鴣草茸不合尊降誕の地なるを以て産島の名ありと云ふ、嘗て古墳を發掘して種々の埋藏物を收めたり。

加賀島 球磨川河口の海上に横はる、往昔檳榔樹ありたるを以て檳榔島と稱したり、又巨松斜に出で、土瓶の口に似たるに依り俗に土瓶島とも云へり、本島は古來無人島にして島中に辨財天を祀る。

水島 金剛村の海岸に接する小島なり、清泉崖側より湧出す、昔景行天皇御西狩の際、御船を繋かれしに冷水を薦めし所なりと云ふ。(古跡の部參照)

甲子島 球磨川の支流南川の河口に横はる一小島なり、植柳村に屬す、金剛村の村名は此島に採りたりと傳ふ。

鼠藏島 大鼠藏、小鼠藏の二島ありて金剛村大字彌次に屬す、元海中にありしが彌次村の海面埋

築の際、陸上の丘陵となれり、小鼠藏に露出の石棺二個あり、大鼠藏に完全なる石廓を存し、廓上に尾張大明神の小祠あり。

第三章 地 質

地 質 概 説

明治三十六年リヒトホーフエン博士は、從來西南日本内帯と考へられし北中部九州より中部に相當する長崎三角地域を分離獨立せしめ、内外兩帶の性質を共有することを指摘し、其北縁を所謂西南日本中央線と認め之を松山伊萬里線と稱し、其南縁は地形學的に著しい斷層線即ち松山八代線を以てせり、松山八代線は或意味に於て緑川斷層なるものと同義語と認め得るが、此等の名稱は共に余り用ひられず、又リヒトホーフエン博士の長崎三角地域を分離せる構造地質學的意味も大に認められず、殆んど吾國の地質學者全部がリヒトホーフエン博士の松山八代線を、九州に於ける内外兩帶の分割線即ち中央線となせり、然れども最近矢部博士はリヒトホーフエン博士の長崎三角地域分離なる功績の大なるを指摘し、同時に松山八代線なる名稱の不當なるに氣付き、茲に臼杵八代線なる純地質學的の名稱を附與せり、而して臼杵八代線なる地質構造線は、中生、新生代の交に成生されしものなるが、此れと位置こそ略一致せるも成生の時期の遙に新らしく、恐らく洪積紀に完成されし地形學的に顯著なる斷層崖あり、此れ祖母

山斷層崖と稱せらるゝものなりとせり。

九州は地体構造上西南日本彎と琉球彎との結合点なり、臼杵八代線以北即長崎三角地域の本郡に含るゝ部分は僅少の部分に過ぎず、肥後平野の大部分は、宮原町附近の片狀花崗岩及吉野村附近に見ゆる片麻岩等より成る、臼杵八代線以南の所謂南部九州は、主として古生層及中生層に依つて其基盤が形作られ阿蘇熔岩即ち灰石を介在する洪積層や各河川の運搬せる土、砂、礫等に依つて構成さるゝ沖積層は構造上全く被覆物なり、基盤たる古生層及中生層は、大体に於て臼杵八代線に平行、即ち東東北——西西南の走向を保ち、傾斜は甚だ急にして、或は東南に、或は西北に向ひ、處々に花崗岩、閃綠岩、斑禰岩、蛇紋岩、石英粗面岩、輝綠岩玢岩等の岩脈或は岩床に貫かれ、或個所には又含銅硫化鑛床胚胎せり、蛇紋岩は時にクローム鉄鑛を含み、或は又石綿を産す。

地 質 各 説

第四紀層 第四紀層の内沖積層は八代町附近の平原を構成するものを最大とし、球磨川、氷川、砂川等の運搬せる、少くとも當區域内の洪積層以前のものに係る岩種より導かれたる土、砂、礫等によりて形成さる、洪積層は段丘として存し、祖母山斷層崖附近及其以北即ち長崎三角地域の方面に廣く發達し、下益城郡西砥用原町附近より、下岳村中尾附近のものには其の最上部の二五〇米に及ぶものあり、又種山村に於ては海面高距二〇米位より存す、其の厚き處は少くとも二〇〇米位あるものゝ如く、其大部分

は阿蘇熔岩に依つて代表さる、此等沖積、洪積兩層は、何れも水平の位置を保つ。

第三紀層 本郡には存在せず、中生層は略古生層と並行して發達し、何れも最初の基盤たりし古生層内に斷層に依つて嵌入されたるものなり、大部分砂岩、頁岩、角岩の互層と疊岩とより構成され、時に鱗狀若くは灰色石灰岩の小「レンズ」を挿む、上松求麻村坂本に在る鱗狀石灰岩よりは侏羅紀の化石を産す、又當郡の最南端に發育する鳥の巢石灰岩帯も此れと全く同一の化石を産する灰色石灰岩を挿む、但し其の露頭は葦北郡吉尾村簾瀬、同郡大野村白木等に露はる、本郡内の疊岩は白堊紀のものなり、砂岩は青灰色、灰色、黄灰色の三種に分類し得べし、併し絶對のものにあらず、頁岩は砂岩と同様古生層のものと殆んど區別すること能はず、黒、灰、黄稀に淡紅色等に分つことを得るが無論風化が斯る外觀を呈せしむる主なる原因なり、下松求麻村大字小川、宇袈袈堂附近には石灰質の頁岩あり、坂本附近にも亦類似せるものあり。

當郡内の中生層に二群あり、一は當郡の最南端にある前記の鳥の巢石灰岩帯にして砂岩、角疊岩質砂岩頁岩、角岩、硅岩よりなり、他は白杵八代線の南方に三叉をなして東北より西南に走るものにして、此には角疊岩質砂岩、角岩、硅岩なく、只疊岩の發達實に著し、後者を八代中生層と稱す。

八代中生層は數多の蛇紋岩等の岩脈に貫かれ、其の大部分は白堊紀層なるも、上松求麻村坂本附近には前記鳥の巢石灰岩なる侏羅紀層あり、又栗木村深山谷には三疊紀層あり、化石は白堊紀層よりはナチカ(川

口、古麓) プルプロイデヤ(川口) ツリテラ(川口) シレナ蜆貝(川口) オストレア牡蠣(川口) アムモン貝(古麓) ボドザミテス其他の植物化石(今泉、袈袈堂、川口、九折、衣領等)を産し、鳥の巢石灰岩帯よりはケーテトプシス、クリーニーター、タムナストレア等の珊瑚類、海百合の破片、海膽、腕足類等を産し、三疊紀層よりはシユードモノチス、オコチカを産す。

秩父古生層 八代中生層を抱いて其周圍にある岩層なり、白杵八代線に略平行せる四帯、即ち北より龍峰山石灰岩帯、小田尾石灰岩帯、深水石灰岩帯、與奈久石灰岩帯より成る、其構成せる岩石は砂岩、頁岩、粘板岩、角岩、硅岩、石灰岩、輝綠疑灰岩等なり、頁岩は板狀節理能く發達し粘板岩と云ふも差支なきものもあり、色は主に黒色なれども時に風化に依つて種々に變ず、角岩、硅岩の發達は古生層全体を通して殆んど普遍的にして、従つて八代中生層を古生層より分離する場合、云はゞ一種の古生層の特徵的岩石の如く取扱はれたり、併し龍峰山石灰岩帯よりは殆んど認められず、色は紅、青灰、灰白又は其等中間色のものもあり、其の厚さは一〇米以上のものより薄き小「レンズ」として介在することもあるなり、輝綠疑灰岩は小田尾石灰岩帯、與奈久石灰岩帯に良く露出し、又大通越の南部、深水石灰岩帯の南部に僅に現はる、石灰岩には緻密のもの、不完全なから鱗狀のもの、半結晶狀のものとの三種に分つことを得、色は黒、灰、白の三種若くは其中間色を認む、最北龍峰山石灰岩帯のもの、如きは半結晶質にて皚白なり、小田尾石灰岩は處に依つて色を異にし、且又度々鱗狀となるが、坂本石灰岩の如く著し

からず。

最北の龍峰山石灰岩帯は下益城郡西砥用原町の近傍より八代町の東方宮地村迄連亘するものにして殆んど化石を見ず、唯僅に石灰岩中に海百合の莖を認むるに過ぎず、此れ以外三帯の古生層石灰岩帯は、何れも紡錘虫科の化石を含む石灰岩を有す其一は臼杵八代線に近く下益城郡西砥用村(年禰村)小田尾より川俣村鶴邊を連亘する小田尾石灰岩にして、石炭紀最上部若しくは二疊、石炭兩紀の境邊のものなり。又其二は五家莊の北方葉木村より柿迫村迄連る深水石灰岩帯と、其三は柿迫村の南方下鶴より球磨郡五木村小鶴、下松求麻村與奈久、葦北郡佐敷町の北方佐敷隧道迄連る與奈久石灰岩帯となり、此最後の二帯は何れも二疊系なり。

龍峯山石灰岩帯は火成岩の變質作用を受け硬砂岩粘板岩、大半結晶質の二枚の石灰岩とより成る。其二枚の石灰岩の間に斷層の存在するもの如く、兩者何れも其内側に傾斜せり。

小田尾石灰岩帯の略中央に小田尾石灰岩あり、一般に輝綠凝灰岩の發達著しく、小田尾石灰岩の南北共に存し、矢山嶽以東は可なり純粹なれども、其西部に至つては次第に不純の度増加し、小浦村等にては殆んど總て頁岩、粘板岩に置換さる、而して角岩、硅岩の發達も著しく小田尾石灰岩の北側に殊に著しく小田尾石灰岩よりは何處にも紡錘虫科化石豊富に産し、其屬としてはフズリナ多し。

深水石灰岩帯は余り良く發達せるものにあらざるも深水、大通越の北部、鶴木場(現在の處三ヶ所に)

等に小石灰岩「レンズ」あり、深水の石灰岩は其小を以て化石含有の程度に於ては良く小田尾、與奈久石灰岩に拮抗するの價値あり、ネオシユワグリナやブルプエーキナや他の有孔虫數多あり、角岩、硅岩は南より北迄一様に發達し大通越の南に一帶の輝綠凝灰岩あり、他は粘板岩、頁岩、硬砂岩なり、深水石灰岩の附近は從來全く中生層とされしも、深水谷紡錘虫石灰岩の存在とまれに整合する岩層の層序性質より見て確に古生層なり。

與奈久石灰岩帯の北境は、秩父古生層と八代中生層との最南境界斷層線を以てし、其南境は佐敷國見山の線なり、當帯の石灰岩は與奈久に於ては少くも一籽半の幅を有し、其間に石灰岩が大体七帶、角岩、硅岩、粘板岩、硬砂岩、輝綠凝灰岩の發達著しけれども石灰岩の間には寧ろ少し。ネオシユワグリナ、クラチキユリフエラなる紡錘虫科の化石は、其の六枚の石灰岩何れよりも發見さるゝが、ミッチャの如き海藻類、他の有孔虫、紡錘虫科の他の屬種の多きことは、北より五番目のものと六番目の鎌瀬とにあるものなり、殊に鎌瀬のものよりは、ブルプエーキナ、ブルプエーキなる紡錘虫を多量に産す、第七番目のものは中津道及び川原谷にあり。

八代中生層と古生層との境は、何れも斷層にして大体臼杵八代線に並行し、或ものは小川日奈久線に並行す、前掲古生層四帯の各の西南端を見るに、何れも九州外帯に於ける古生層の一般走向、即ち東東北、西西南の走向を取らずして東北、西南に向ふは小川日奈久線の存在する爲めなり。

地 史

洋々たる大海の底に靜かに堆積せし秩父古生層を構成する砂岩、頁岩、輝綠凝灰岩、角岩、硅岩、アヂノール板岩、其他幾多の化石を藏したる石灰岩等は、古生代末の地殼變動の爲めに褶曲を起し、海面上に陸地として出現したり、即ち我日本島の先驅の一たり、斯くて三疊紀の初、中期の記録なき爲め其間の變遷不明なるも、恐らく準平原化されし陸地は、此紀の終りに近づきて滄海に没し、三疊紀の海成層を堆積せり、夫よりアムモン貝の榮ゆる侏羅紀の時代と化し、も、又其初、中期の遺跡を發見し得ず、謎の時代として今日に残れり、鰐狀の鳥の巢石灰岩を含む海成堆積層は、明に其の末期の海浸を示すものなり。

此の上部侏羅系堆積後又々陸地として一度海面上に浮ぶも、直に海面下に没し白堊紀の時代となりたり、即ち秩父古生層、三疊系、侏羅系の上に堆積せるものにて陸地より運ばれし木葉、シジミ、或は時にアンモン貝等の化石を交へて砂岩、頁岩層は厚く其基底礫岩上に成層せり。

白堊紀の後期に又々陸地となり中生、新生兩代の交、北西若くは北よりの偉大なる壓力に依つて、西南日本の中央線と白杵八代線の成生を見、後日同一力の反覆に因つて、各新舊地層群は白杵八代線に並行せる發達を示すに至る。此大なる造山力は先づ閃綠岩、斑礫岩、蛇紋岩其他基性岩に噴騰の機會を與へ、次で花崗岩、流紋岩等酸性岩の溢出をも誘發せり、其後第三紀も可なり末期に近ひ頃準平原化され、次

に洪積紀に至つて祖母山斷層崖は完成されたり、又阿蘇熔岩を洪積層中に介在することは、昔時阿蘇の活動如何に激烈なりしかを雄辯に物語るものなり、洪積層の堆積を終へて、次の沖積層の堆積に移る迄又々著しき隆起を起し、小川日奈久線の成生を見る。

人類の全盛期たる沖積期に入つて以來、地勢は殆んど現状と大差なきが如きも、山地の削剝は益進み球磨川の如き日夜營々として山体を浸蝕して暫くも休まず、斯くして生せし土砂、礫を不斷に八代海に向つて搬出し、次第に肥後平野をして發育を速ならしめつゝ、以て今日に及びたり、而して此營力は今後に於て繼續すべきは自明の理にして、従つて峨々たる秀峰は、益崢嶸の相を現はし、各河口の干潟は愈發達するに至るべし。

鑛 泉

本郡に於ては温泉の見るべきものなく、唯上松求麻村字葉木に徹温湯の滾々として湧出するのみ、泉質は單純泉にして清澄、古生層の石灰岩の間にあつて僅に露天の浴槽を有し附近住民の共用するに過ぎざるのみ。

第四章 動物

本郡所産の動物につきて 高等動物より下等動物に至るまでを通觀すれば、種類極めて多く、其學術的

の調査に至りては、未だ一小部門につきてすら調査の完成したるものなし、されど既知動物の各種にわたりて概要を摘記したらんには、そのみにて一大冊子をなすに至るべし、故に摘要をなすこと、又頗る困難の状態にあり、されば主要なる脊椎動物の名稱を列記するに止めんとす。

(イ) 哺乳類

山地の林間 ムササビ(方言モマ)、タヌキ、井ノシシ、ノウサギ、キツネ(稀)。

平地 イタチ、ムグラモチ、クマネヅミ、ノネヅミ、キクガシラカウモリ、アブラムシ。

八代海 イルカ(稀)、アザラシ(往年球磨川にて一頭を得たり)、スナメリ(稀)。

(ロ) 鳥類

ハシブトガラス、キジバト、カハラバト、フクロウ、コミミヅク、コゲラ、ヒバリ、キジ、ヤマドリ、タマシギ、キウシウミンクワウテウ、コクマルガラス、ハヤブサ、カササギ(明治三十年頃までは棲息せしも今は全く見へず)。

冬季來遊する鳥 マガモ、ヨシガモ、ツクシガモ、コガモ、トモヘガモ、ウミアイサ、シマアヂ、キン

クロハジロ、ウミスズメ、コクガン、アビ、カモメ、ヘラサギ、ゴ井サギ、ハジロカイツブリ、カハウ。

(ハ) 爬虫類

トカゲ、アヲダイシヨウ、ヤマカガシ、ヒバカリ、マムシ、ヂムグリ、イシガメ、スッポン、セグロウミヘビ。

(ニ) 兩棲類

ヒキガヘル、トノサマガヘル、アカガヘル、アマガヘル、ツチガヘル、シロスジツチガヘル、カヂカガヘル、ブチサンセウウヲ(山間の溪流)。

(ホ) 魚類

淡水魚 フナ、コヒ、ウナギ、ドゼウ、チチブ、ナマヅ、ドンコ、オイカハ、タナゴ、アユ、ウグイメ

ダカ、スズキ、カマツカ、イワナ(エノハ)、スナヤツメ。

近海魚 ボラ、チヌ、コチ、カレイ、ヒラメ、アカエヒ、サヨリ、ハゼ、メバル、コノシロ、サバ、ハ

モ、アナゴ、ムツゴラウ(ガタハゼ)、マフグ、コモンフグ、シホサイフグ、スズメフグ、タツ

ノオトシゴ、ヤウジウヲ、ハウボウ、カナガシラ。

淡水魚の分布は、筆者が嘗て北九州に於て調査したるものに比較するに、久留米地方を境界として南部九州とは其分布状態の相異なるを認む、例へば北九州の淡水に普通なるヨツメ、モロコ、ギギ、カジカ如きもの八代地方にては筆者は見當らざりき。

第五章 植物

本郡所産の植物種類は羊齒類以上にて千五百種以上に達す、地理的分布は暖帯一名帯に屬し、常綠潤

葉樹に富む、五家莊より柿迫村、川俣村、上松求麻村方面の山地には、所謂櫛帯固有の植物景觀を見ることを得、その樹種は、シヒ、クリ、クヌギ、コナラ、ミヅナラ、シラガシ、アカガシ、イチ井ガシ、アラガシ、ウラジロガシ、シリブカガシ等の殼斗科植物と、タブノキ、カゴノキ、ヤブニツケイ、カナクギノキ、シロダモ、ケクロモジ、アラガシ等の樟科植物を主とし、加ふるにアカマツ、クロマツ、カヤ、ヤマモモ、ネデキ、コバンモチ、ナナメノキ、クロキ、ミミヅバイ、カンサブラウノキ、バクチノキ、イヅセンリヨウ等を混生す、往々カギカヅラ懸りに奇觀を呈す、林間の濕地にはイシカグマ、フモトシダ、ヒノキシダ、トキハトラノヲ、アヲガネシダ、クモノスシダ、エビガラシダ、オホイハヒトデキンマウ井ノデ、クリハラシ、コモチシダ、コシダ、ウラジロ、ツルシノブ等百數十種を産す、敷河内村山中の杉林の下隠には珍草ホンゴウサウを産すれども極めて稀なり。

平地には樟(栽)、エノキ、ムクノキ、センダン、ホルトノキ等の大樹稀ならず、蘇鉄は野生なけれども栽植したる巨株少からず、白島、大島などにはオホイタビの繁茂するを見る。

海岸近き平地にはハマボウ、ハマクサギ、トベラ、アカウ、マルバグミ、シマシヤリンバイ、クロドチウ等の樹木あり、海濱植物にはボタンボウフウ、ツルナ、ハマウツボ、ハマウド、ハチジャウナ、ハマナタマメ、ハマエンドウ、ハマヒルガホ、ルリハコベ、シホツメクサ、ケカモノハシ、ヨシ、ア井アシダンチク、ハマヒエガエリ等あり、大島に繁茂したるハカマカヅラ(ワンジュ)、タマシダ、シマシヤリ

ンバイは石灰岩採集のために將に絶滅せんとするは惜むべし。

平地の淡水中にはクワ井、セキシヤウ、キクモ、タヌキモ、ヤナギモ、トチカガミ、ミツヒキモ、エビモ、ササバモ、ミクリ、セキシヨウモ、ホザキノフサモ、ヒルムシロ、イトモ、ミヅオホバコ、マコモ、ハス(栽)、カハホネ、アカウキグサ、アヲウキグサ、アサザ等あり、清澄なる水中にカハモヅクを産す。ヤツシロラン(八代蘭)を始めて發見したるは本郡川俣村山中にして其名の起りたる所以なり、この蘭は熱帯性植物であつて、後年鹿兒島、和歌山の兩縣下に於て採集せられたるも、何處も産株少し、林間濕地の腐植土に生し、園藝的美觀なく、只學術的價值あるものとす、八代蘭の産地に近くマヤランを産す。

要するに本郡の植物と和歌山縣、高知縣、宮崎縣、鹿兒島縣の植物とを比較するに大に共通種に富み、分布上類縁深く、共に暖帯性に屬す。

第六章 氣候

本郡は山地に富み平野に乏しく、且つ山地は漸次に海岸に遠さかり、平野は海に瀕するを以て、處により自ら氣候に差異あるを免れず、概して平野地方は、氣候溫和にして盛夏の候と雖も氣溫攝氏三十五度を超へず、冬季亦零度以下に降ること稀にして、平均氣溫攝氏十七度に過ぎず、従つて氷雪を見ること

頗る少なく、毎年十一月中旬初霜ありて四月上旬終霜す、最暖の月は八月にして最寒の月は二月なり、毎年梅雨の候は陰霖旬日、時に河川汎濫堤防決潰、道路破壊し、家屋浸水の憂を見ることあり、又二十日、二百二十日頃は、例年多少の風雨ありと雖、近年は烈風の程度に止まり、颶風を伴ひ家屋を倒し樹木を抜くの禍に罹ること少なく、又雷雨の強烈なるものなく、地震亦強震以上に及べるは安政年間以後殆ど絶無と云ふべし、晴天日数は約二百余日、曇天日数は約七十日、雨天日数約八十日なりとす、雨量は一ケ年一六〇〇耗より二〇〇〇耗の間を往來し、時として一二〇〇耗に減じ、又二〇〇〇耗を超過することあり、又春夏の候、時として蒙古黃沙の余塵天空に瀰漫し、遠望を遮ることあるも氣候の上に影響を及ぼすことなし、實に此平野部は所謂五風十雨、四時の序自ら立ち、専ら海洋性氣候にして我國に於ける健康地を以て推稱するも敢て過當にあらざるを信す、今左に近年に於ける氣象の概要を擧げて以て參照に供せん。

山地にては平野地方よりも、冬季は寒威凜烈、霜雪の期間長く、時々交通に多少の困難を見ることありと雖も、夏季は冷涼にして山紫水明自然の美を添へて毫も片塵を止めず、釋迦院の僧坊の如きは、一日中僅少の時間を除けば温度二十度内外に過ぎず、實に好個の避暑地たり、然れども五家莊の東部地方にては、球磨郡、上益城郡の山間と同しく、冬季は積雪固く鎖してを交通杜絶すること屢々なり。

年 月	天 氣		氣 候		雨 量	記 事
	晴	曇	最 高	最 底		
大正五年一月	二二三	二六	二〇、七五	一、〇〇	三四、五	強風 二
二月	一四	一〇	一六、二五	一、五〇	五七、〇	
三月	一六	一三	一九、〇〇	一、〇〇	九八、〇	地震 二
四月	一五	八	二七、〇〇	三、五〇	一八五、五	
五月	一八	七	二七、五〇	一〇、〇〇	一三〇、〇	
六月	一六	四	三〇、五〇	一八、〇〇	五八五、〇	
七月	一七	八	三〇、七五	二二、七五	四三一、〇	雷雨 二
八月	二四	四	三二、二五	二三、七五	一五二、〇	全 二
九月	二二	三	三一、二五	一七、五〇	一三三、〇	
十月	二三	六	一七、〇〇	一〇、五〇	一三二、五	
十一月	二二	四	二五、〇〇	六、〇〇	九七、〇	
十二月	二四	三	一九、五〇	一、〇〇	三六、〇	雷雨 一
計	二二三	七七	三二、二五	一、〇〇	二〇、七一	

大正六年一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計	大正七年一月	二月
一一	一七	一六	一九	二五	二八	二三	一九	一三	一〇	二〇	八	一七九	一五	九
一六	一八	一〇	一七	三	一四	三	七	一三	一	一	八	一三三	九	二二
四	三	五	四	三	八	五	五	四	〇	二	〇	五三	四	〇
一三、五〇	一五、七五	一六、五〇	二二、〇〇	二六、二五	二九、五〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三一、二五	二六、二五	一九、〇〇	一四、二五	三三、〇〇	一八、二五	一〇、五〇
〇、〇〇	〇、〇〇	一、五〇	七、二五	一一、〇〇	一七、五〇	二三、二五	二二、五〇	二〇、〇〇	一一、〇〇	三、七五	〇、二五	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇
四二、〇	三四、五	八五、〇	四七、〇	六七、五	二七一、五	一一四、〇	二〇五、〇	七九、〇	一三九、〇	三四、〇	二〇、五	一一九、九	二八、五	四、〇
雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨	雷雨
二	三	一	二	一	一	一	二	二	一	二	二	二	二	一

大正八年一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
一三	一七	一八	二二	二五	二二	一九	八	一八	一五	一四	一九	一八九
一〇	五	二	三	一	一	三	五	六	八	六	三	九九
八	六	八	七	六	五	五	六	四	七	八	七	七六
一九、五〇	二二、〇〇	二七、〇〇	三〇、七五	三一、五〇	三一、二五	二八、〇〇	二二、二五	一六、〇〇	一一、二五	二七、〇〇	三三、〇〇	三三、二五
二、〇〇	七、〇〇	一一、二五	一六、〇〇	二一、五〇	二二、五〇	二一、五〇	一五、〇〇	九、〇〇	六、〇〇	一、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇
一一四、五	八七、〇	一一二、五	三九二、〇	二八三、五	三九六、〇	一四七、〇	二七三、〇	一三九、五	一〇三、五	二〇八、〇	一一七、〇	六〇、五
烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風	烈風
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

第二編 人文地理

第一章 區分

本郡は自治制施行前に際し多數町村の併合を行ひ區劃を制定したる結果、現今三町二十九ヶ村を數ふ、然れども地勢上組合村役場を有するところ二ヶ所あるを以て、町村役場は二十四ヶ所とす、其の名稱、位置、並に其の管轄内の大字を擧ぐれば左の如し、

名稱	町村役場位置	大字
八代町	字西本町	鏡町、鏡村、内田、上鏡、野崎、芝口、
鏡町	大字鏡町	宮原町、宮原村、立神、今、早尾、拵、
宮原町	大字宮原町	植柳、大福寺、麥島、
植柳村	大字大福寺	高植、彌次、敷河内、
金剛村	大字高植	奈良木、豊原、本野、高下
高田村	大字本野	

上松求麻村	字大門	市ノ俣、横様、根ノ俣、中津道、三坂、上鎌瀬、下鎌瀬、上葉木、下葉木、佐瀬野、荒瀬、澁利、大門、藤本、合志野、松崎、坂本、油谷、片岩、坊ノ木場
宮地村	大字宮地	古田、今泉、小川、袈裟堂、段、横石、原女木、板平、小崎辻、大林、馬廻、小崎、衣領、木々子、古屋敷、早水、九折、日田地、日光、辻、川口、生名子、瀬高、下代瀬、嶽、上深水、下深水
太田郷村	大字萩原	宮地、古麓、猫谷、
八千把村	大字古閑	片野川、片長、日置、萩原、横手、松江、井上、
松高村	大字高子原	會地、田中、古閑、
郡築村	七番割	高子原、松崎、沖、井上、高島、大島、
千丁村	大字新牟田	一番割ヨリ十二番割ニ至ル、
龍峯村	大字興善寺	大牟田、新牟田、吉王丸、古閑出、
有佐村	大字有佐	川田、興善寺、岡、谷川、岡中、岡小路、
文政村	大字兩出	中島、下有佐、上有佐、
和鹿島村	大字鹿野	兩出、寶出、貝洲、鹽濱、
		網導、鹿野、鹿島、島地、

吉野村	大字高塚	吉本、高塚、新田、大野、
野津村	大字野津	野津、河原、
種山村	大字南種山	北種山、南種山、小浦、
河俣村	字鶴	
下岳村	字古屋敷	
柿迫村	柿迫村字土井	
栗木村		
久連子村		
椎原村		
仁田尾村		
葉木村		
縦木村		

附記 北種山村、南種山村、小浦村の三村組合組織をなし之を種山村と稱し、柿迫村、栗木村、久連子村、椎原村、仁田尾村、葉木村、縦木村の七村組合組織を行ひ柿迫村と稱す。

第一章 戸口

本籍人口 男 六〇、五一七 女 六一、五三七 計 一二二、〇五一

現住人口 男 五一、五四五 女 五五、二二九 計 一〇六、七六四

本籍戸數 現住戸數 一七、〇八六

本籍戸口族籍別

華族 戸數 一 人口 男 三 女 三 計 六

士族 戸數 六五八 人口 男 二、二八〇 女 二、三五二 計 四、六三二

平民 戸數 一六、四二七 人口 男 四九、二六二 女 五二、八六五 計 一〇二、一二七

縣會議員選舉有權者 二〇、七四三

人口の移動

第二編 人文地理 第二章 戸口

三三

出 寄 留

他 府 縣	九、三九四	他 町 村	五、一〇四
他 郡 市	五、四六七	計	一九、九六五
陸海軍在營艦	五八四	在 臺 灣	一、一七六
在 朝 鮮	七三五	在 樺 太	一 八
在 關 東 州	三五一	在 外 國	二、八四九
囚 人	三九	出 の 部 合 計	六、六三九
入 寄 留			
他府縣より	二、四〇〇	他 郡 市 以 上	五、三〇七
他町村より	五、九八二	其 の 他	一四九
計	一三、八三八		

在留外國人	男 一、六二六	女 八九七	計 二、五二三
入の部合計	一六、三六一		
出 産	男 二、〇二三	女 二、〇〇五	計 四、〇一八
死 亡	男 一、一九五	女 一、一〇五	計 三、三〇〇

婚 姻	計 二、七四〇
離 婚	計 一四四

第三章 官衙公署

八代區裁判所 八代町字西本町

明治九年十月二十日創立

明治十五年一月一日八代治安裁判所と改稱

明治二十三年十一月一日八代區裁判所と改稱

八代葦北二郡を管し、八代郡の宮原、柿迫及葦北郡の佐敷、水俣に出張所を設置せり、其の本郡内に於ける本所及び出張所の登記事務區域左の如し。

八代區裁判所 八代、植柳、金剛、高田、上下松求麻、宮地、太田郷、八千把、松高、郡築、千丁
 宮原出張所 宮原、鏡、龍峰、有佐、文政、和鹿島、野津、吉野、種山、河俣。
 柿迫出張所 下岳、栗木、柿迫、久連子、椎原、仁田尾、葉木、椋木。

熊本地方裁判所八代支部 八代區裁判所内に設く
 熊本刑務所八代出張所 八代區裁判所構内に設く

八代警察署 八代町字本町

管轄區域 八代町、植柳村、金剛村、高田村、下松求麻村、上松求麻村、宮地村、太田郷村、八千
把村、松高村、郡築村、千丁村、日奈久町、二見村、百濟來村。

宮原警察署 宮原町大字宮原村

管轄區域 宮原町、龍峰村、有佐村、文政村、鏡町、和鹿島村、野津村、吉野村、種山村、河俣
下岳村、柿迫村、栗木村、久連子村、椎原村、仁田尾村、樅木村、葉木村。

八代稅務署 八代町字堀端

管轄區域 八代郡、葦北郡。

八代營林署 八代郡太田郷村字松江

管轄區域 八代郡、葦北郡、球磨郡。

八代郵便局、宮原郵便局、鏡郵便局、植柳郵便局、出町郵便局、宮地郵便局、千丁郵便局、文政郵便局
松求麻郵便局、種山郵便局、柿迫郵便局、小原郵便局。

第四章 産業

第一節 總說

本郡生業の主要なるものは農業にして、従つて物産の主位を占むるものは農産物なり、養蠶の業は殆んど全郡に行はれ、繭及生糸の産出亦少なからず、西方沿海の地方、球磨川沿岸の地は漁業盛んに行はれ、商業は八代町を第一とし、主として市街の地に行はるゝも、何れも大規模に經營するもの稀なり、工業は樺太工業株式會社八代工場、日本セメント株式會社八代工場、日本窒素肥料株式會社鏡工場を主要なるものとす、何れも大規模の下に經營さるゝを以て、其産額甚大なり、其の他小規模の工場數個所に在り、地方的工産物は上松求麻村の製紙、八代町のセメント、鏡町の窒素肥料は特別とし、宮地村の紙及七島蓆、千丁、有佐地方の藁蓆を重なるものとす、今職業別戸數を擧ぐれば左の如し。

農業	專業	九、一七〇	兼業	二、八一四	計	一一、五八四
蠶業	專業	一一〇	兼業	二〇六	計	三一六
漁業	專業	二一八	兼業	一、三〇六	計	一、五二四
工業	專業	一、五六六	兼業	六三一	計	二、八〇三
商業	專業	二、三八六	兼業	四一七	計	二、八〇三
第二節 農業						
第一項 一般農業						

本郡は東部一面山岳に抱擁さるゝを以て、耕地の見るべきものなくも、西部は所謂有名なる肥後平野に

して、地味肥沃、且漸次海面埋築され、耕作地従つて擴大せるに依り、農業に従事するもの、多數を示すは、當然の歸結にして地の利よく之を誘發するものなり、試みに詳細なる統計表により、左に農業者の戸口及び人員を擧げん。

戸數

自作	專業	六九三	兼業	四五七	計	一、一五〇
自作兼小作	專業	三、二六九	兼業	一、三〇四	計	四、五七三
小作	專業	三、一九一	兼業	一、四三五	計	四、六二六
計	專業	八、九五三	兼業	三、一九六	計	一二、一四九

人員

男	專業	一七、六九二	兼業	五、一二三	計	二二、八一五
女	專業	二〇、一四一	兼業	四、七三二	計	二四、八七二
計	專業	三八、〇三三	兼業	九、八五五	計	四七、六八七

耕地反別

田	五一、四九〇	畑	四九、五二六	計	一〇一、〇一六
---	--------	---	--------	---	---------

米收穫高

本縣各郡に配する産米は玉名郡を第一とし二十一万八千七百石、次は飽託郡、上益城郡、下益城郡、菊池郡にして八代郡は實に第六位に在り而して其收穫高は十二万九千余石なり。

粳	一二九、四〇六	糯	九、七〇六	平均	一、六七九
平均	一、六九〇	平均	一、六六八	平均	一、六七九

麥作附段別

大麥	一、一九一	裸麥	一、六四八	小麥	四、五九八	計	七、四三七
----	-------	----	-------	----	-------	---	-------

麥一段歩收穫高

大麥	一、〇二五	裸麥	一、七七一	小麥	一、八九六	平均	一、五七二
----	-------	----	-------	----	-------	----	-------

其他食用農産物の産出高

大豆	九、〇五四	蕎麥	六八
小豆	四、〇八四	玉蜀黍	四七一
粟	二、一八八	豌豆	七三四
稗	二二、二〇一	蠶豆	三三五
黍	三四四	馬鈴薯	三五、一一〇

甘藷	一一〇	燕青	七四、五二五
蘿蔔	五〇五、二〇六 ^買	葱	二二、九四〇
蓮根	四、五〇〇	青芋	五五一、七〇〇
西瓜	一七三、七〇〇	蒟蒻	三〇、五七六
南瓜	二〇〇、八八〇	筍	四二、八〇〇
胡瓜	六八、八二〇	胡蘿蔔	四七、五〇〇
茄子	一〇六、二〇〇	牛蒡	八九、一〇〇
瓢瓜	三一、八二〇	薑	五、〇一〇
苾	一四七、七五〇		
特別農産物			
菜種	一〇、一三〇〇 ^石	榿	一八八、一七〇 ^買
蘭	四〇三、八八二〇	苧麻	四一、一二三
七島蘭	一三、五六五 ^買		
果實		密柑温州紀	九七、四一七
梅	二、五一二	密柑温州の類	

農産物中産額尤多くして輸出品の主要なるものは米なり、而して米質佳良其の名夙に著る、朱欒は八代朱欒と稱して美味佳良亦他産の比にあらず、古來其の名高く特産品たり、高田密柑は舊藩主の御用品として昔より名聲頗る高し、然れども今は其の名を存するのみ、高田村、宮地村、吉野村等の諸地方には却てネーブル、温州密柑の栽培盛んなるに至り、年々産額多大なり、八代蘿蔔は其の質佳良にして使用多く、就中漬蘿蔔に適せり、販路頗る廣く地方に輸出すること多量なり。

米	券	倉	庫
一、八代倉庫			
創立 明治四十三年			
入庫米			
一等米	三四 ^俵	二等米	一、三三四 ^俵
四等米	一、八一二 ^俵	三等米	一一、八三七 ^俵

一、有 佐 倉 庫

創立 明治三十八年四月

入 庫 米 二九、九四二石

高田密柑の來歴

人皇第十一代垂仁天皇御不豫にて異國の橘を御好みに付、近臣(田道ノカンジウ)一命かけ遙々異國に渡り、方々尋ね求め漸つと常世の國にて、橘三つを求め得て歸朝しぬれど、余り年數かゝりしかば、帝は既に二三年前崩御まし、皇子景行天皇西巡して高田にましくけるに、其橘をさげ其身は前帝の御治世の内、御間に合ひ兼ねしを悼みて、自殺して失せけるに、天皇甚其志を痛ませられ、其橘の實を高田に植ねさせられしに、或時人々の夢に、何地ともなく異人來りて、橘は檳榔の木の中に枳と云へるカツラあり、夫に接木いたしぬれば實を結ぶよし、委しく教へければ人々喜び其檳榔の木を尋ねしに、高田の西に當りて檳榔島とて海中の島に檳榔の木あり、其の中に枳といへるカツラあり、是に接木すへしとて接穂せしより、次第に繁茂し實を結びければ方々に移植せし處を江川端と云ふ、亦接木せし島をツグ島といひしを、後世誤りてツク島と唱へなしける、其密柑樹は年を経るに従ひ繁茂しけれど、戦れ乱打續きて誰取る者もなかりしに、天正十五年秀吉公薩州征伐の時、宮地村悟真寺に御宿陣し處々巡見の節、大福寺の僧江川の塘に罷り出て、密柑一籠を捧げ御目見え申ければ、秀吉此の密柑を召上げら

甚悦び禁廷へも差上げ申すべきよし仰付けられけれども、しかと世話するものなかりければ、其後高田處士松岡某、此事に委しかりければ受持となりて追々に治定しける、(中村氏先祖書には「始秀吉公密柑のこと委しく尋ね玉ひしに、中村宗右衛門の先祖彌三兵衛と申す者來歴申をしければ、秀吉公甚御感なされ禁廷献上のことを命せられけるとぞ」)。

天正二甲戌年中紀伊國、有田郡、宮原組我庄、中番村伊藤仙右衛門來り、密柑苗八本を求め歸る、是れ紀州密柑の元祖なり。

天正十六年加藤清正肥後入國の後松岡藏人長重を、當庄の大庄屋を仰付られ、八代郡敷川内に高地百石下され、氏を高田と改む、藏人より長恒を經、長供に至り、弟長行平山に分家し、一領一正を勤め密柑支配役となる。

長行の長子長道父の後を繼ぎ、弟仙之允長積、七右衛門長敏の養子となり、之れより本家は代々總庄屋を勤め、分家は代々密柑支配役を勤めたり、長積の子長貞、長貞の子長時、長時の子長經、喜平次と稱し山奉行役となり、劍術、柔術、砲術師範たり、子理三郎長陽、慷慨家を以て聞ゆ、嘗て南朝の昔を慨き詠して曰く

みよしの、よしの、奥の遠き世を

一日も思ひ出てぬ日はなし、

又偶感に

頭より先つ光らかし衣手の

錦を世々に輝かさめや、

養子長泰献上支配役となる、當時密柑一株にして二十間四面に蔓り、三千個入七十三籠ありしと云ふ、又以て其の盛況を想像するに足れり、其後寶曆洪水の爲めに大損害を受け、更に補植したるも今存するものは左の如し。

奈良木の内 (寺の迫、南照寺、飯屋床、墓の下)

豊原の内 (遙拜、大森、仕立木、出口、石王、ダシヤ、諸木園、八幡、芝原、平山)

高下の内 (塘町、權田)

大福寺

植柳

第二項 蠶業

當郡は寶曆年間に養蠶を奨励せしも、氣候地味等の關係上良好の結果を得難く、從て他郡に比し産額頗る劣れり、今其計數を擧ぐれば左の如し
飼養個數

春 蠶 二八二ア 秋 蠶 二八三 計 五六五

繭の收穫

春 蠶 四、二六六石 四七、五一五町

秋 蠶 三、二六五 二八、八〇五

計 七、五三一 七六、三二〇

掃立枚數

春 蠶 七五九枚 秋 蠶 一、七六二 計 一、五二二

桑畑反別

總計 四九町

製糸の始

寶曆年間熊本に機織所を建て各地より繭を持ち來らしめ製糸を始む、其頃島已兮(本名は志賀小左衛門と云ふ)とて斯道に志ある者を召出され上洛せしめ能く製糸、機織の法を視察せしめしに、己兮京より近江に下り織工を伴ひ來る、其後又糸を取る事に堪能なる女工三人を近江より召し、國中の男女に其業を學ばしめ、又遠隔の地方は習得の便を計り、時々島已兮を派遣し、一定の場所に志望者を招集し傳授

せしめらる、是より領内普く斯業を営むこととなれり。

第四節 製茶

茶業は主として山間に介在せる、東部の五家莊、柿迫、栗木、下岳、河俣、上下松求麻等の地方の副業として行はれ、未だ專業として大規模に製造せるものなし、左に製造戸數及製造高を示す。

製造戸數 二、一〇〇戸

製造高

煎茶 二四、六六五 九八、六六〇

番茶 四二〇 一、二六〇

計 二五、一七四 一〇七、三五四

茶畑反別 三六四町

第五節 畜産

家畜は牛馬を主とし羊豚之に次ぐ、牛は山間部に多く馬は平坦部に多し、何れも農耕運搬に利用するのみにして自由放牧を行ふの餘地なし、近時養雞、養蜂亦盛んなり左に二三の統計を掲げん。

牝

牡

計

牛 三六三 九九五 一、三五七

馬 一七一 三、二二三 三、四〇四

豚 一六七 五五 二二二

山羊 五 一一 一七

雞 二九、〇八〇 七、九九三 一〇九、〇七三

家鴨 三二〇 一六八、一二〇 四四〇

第六節 漁業及び水産

漁業は重に西部の海面に瀕せる地方に多く、球磨川、氷川の流域地帯にも亦少からず、南葦北郡界より北下益城郡に至る海面に於ける魚類及び漁業者左の如し。

漁業戸數

專業 二二八 兼業 一、三〇六 計 一、五二四

漁業人員

專業 男 三四二 女 一〇四 計 四四六

兼業	男 一、四五八	女 一六三	計 一、六二一
合計	男 一、八〇〇	女 二六七	計 二、〇六七

水産物

一、魚類

黒鯛	四一〇 <small>圓</small>	一、六八一 <small>圓</small>
鱈	一一、一五七	三三二、一八〇
鮎	一八、七二四	一一〇、四二三
鯉	六〇〇	二、一四二
鰻	四〇、〇七七	一六八、七二四
鮪	一三、五六三	六、七八一
鱈	二、五四一	五、〇三一
鯉	二、一〇二	五、〇六六
其他の魚類	六四、六八一	一二九、三六二
魚類價格計		四六〇、三八〇

二、介類

牡蠣	一九四、四二〇 <small>圓</small>	三八、八八四 <small>圓</small>
蛤	四、〇七二	三、〇五〇
合計	一九八、四九二 <small>圓</small>	四一、九三四 <small>圓</small>

三、水産動物

鳥賊	三、八四五 <small>圓</small>	八、一五一 <small>圓</small>
章魚	二、五一〇	三、八九〇
海鼠	六〇〇	六〇〇
蝦	一三、〇三〇	八三、七八三
合計	一九、九八五 <small>圓</small>	九六、四二四 <small>圓</small>

四、藻類

紫菜	四、〇〇〇 <small>圓</small>	二、〇〇〇 <small>圓</small>
----	------------------------	------------------------

漁船の數 八三〇隻

第七節 工業

本郡に於ける工業は、株式會社の經營せる製造工業の二三を除く外、大規模の下に従業するものなく、

一般的に小規模の者多し、統計に依れば左の如し。

工業戸數

專業 一、五六六戸 兼業 六三一戸 計 二、一九七戸

工業人員

專業 男 一、八六二名 女 八六五名 計 二、七二七名

兼業 男 四七六名 女 七三三名 計 一、二〇九名

合計 二、三三八名

蠶絲

一、器械

生糸 二、一二七戸 四〇五、〇六八戸

慰斗糸 九五九 一四、五七七

合計 三、〇八六戸 四一九、六四五

二、座繰

生糸 三九戸 五、九四四戸

慰斗糸 一 二

生皮芋 九 五四

合計 四九 六、〇一〇

三、玉絲 五戸 五七〇戸

生糸 一 九

慰斗糸 一 九

合計 六 五七九

四、眞綿 一〇 六〇〇

織物 數量 一〇 六〇〇

織物 三七、九九六戸

和紙 製造戸數 七六〇

職工 男 八五名 女 一九〇名

計 二七五名

產出高 半紙 二、九八〇戸

紙 一四、九〇〇戸

其他	七八、一六八
合計	九三、〇六八

壘表類

一、壘表

備後表	五二〇、〇〇〇 <small>枚</small>	四五、一四〇 <small>円</small>
琉球表	七〇、八〇〇	五九、四七二
合計	五九〇、八〇〇	一〇四、七二二

陶器

製造戸數

製造高

二、三一六円

八代陶器製作の解説

八代陶原料は、白石、鼠色土、灰色土、薄赤土、赤土の五種なり、白石は白色陶、白色嵌土又は釉料に用ひ鼠色土、灰色土、薄赤土の三種は一種又は二種三種を混合したるものにして、赤土は黒色嵌土の用に供す、製土の法は石碓にて粉碎し、水に漉しこれを乾燥す、造杯は普通造杯の方法と異なり、各種一個に要する原土を輾塊となし、これを輾轆の上に移して一杯を造了し、毎回一坏つゝ製造す、杯陶半は乾燥

せし時、書紋を彫刻し、原土を嵌挿す、又古來毛彫と稱し彫刻のみに止むるものあり、嵌土用の原土を以て黒色、白色の刷毛目を施すものあり、素焼を経て釉料を塗着し本焼となす、
 頼山陽嘗て此地に過きりし時に詩あり。

竹鼎沙餅從喚呼 受看魚眼濺爲珠
 卅年嘗盡人間味 獨有心情向駱奴

八代陶傳記

八代陶（一名高田焼）は、細川三齊忠興侯の創勦せらるゝ所にして、俸祿を世襲し、藩主の用器を製せしが、廢藩の後初めて販賣品となれり。
 陶法は高麗各種の製法に起因し、種々の變化を経て現今の製法となれり、其沿革は初代より三三代の間には、更に注目を要する變動なきも、四代に至りて一變し、尙六代より七代に及びて再變せり、其の起原及傳記は左の如し。

初代上野喜藏は、元朝鮮釜山海の城主尊益の子にして尊階と稱せり、文祿征韓の役、加藤主計頭清正公に従つて歸化し、肥前國唐津に留寓して陶器を製す、尊階其の後渡韓し、高麗の陶法を傳習して歸る、慶長七年三齊忠興侯、尊階を豊前に召し俸祿を給せらるゝ、全國上野郷に地を賜ひ陶場を開設す、全侯の

命によりて地名を家名に用ゐ、尊階を改めて上野喜藏と稱せり、點茶家小堀遠江守守政、一千道安等の諸人と共に茶器を製し、又茶事を修む、此地に居ること三十年、門人七十余人に及びしと云ふ。

寶永九年細川忠利侯の轉封に際し、全侯の父三齊忠興侯に従ひ、喜藏の長子忠兵衛、次子藤四郎と共に肥後に入り、三子孫左衛門は豊前に止まる、初め八代郡奈良木村に地を賜ひ築窯す、これ八代陶創始の地なり、后来此地を稱して壺焼谷と云ふ、三齊侯八代城に居り、時々陶事を視察せらる、喜藏茶を點して全侯に献供せり、この時使用せし茶器今尚保存す、全所にあること二十余年、萬治元年全郡豊原村に移窯す。

二代藤四郎は寛文九年喜藏の遺業を繼ぎ、兄忠兵衛と同時に兩家本末の別なく、齊しく俸祿を給せらる、正保六年藤四郎の次子太郎助分家して一家をなし又俸祿を給せらる、三代栗右衛門の長子は四代藤四郎なり、次子梶右衛門分れ一家をなし俸祿を給せしが、同人の子丹治の時、全國飽田郡、松尾村に移窯し、八代陶と同じく藩主の調度に供し、松尾焼と稱せしが、維新後廢窯せり。

藤四郎は正徳元年十七歳にして、各地の陶業を巡察して江戸に到り、到る處原料の土石を得て歸郷し、右の原料を以て種々の實驗をなし、陶法を精究すること多年にして、釉料及窯の構造を改良し、遂に黑白嵌土の法を案出し陶法を一變す、又先きに蒐集せし所の原料は、各國に散在して採集に不便なるを以て、自國內に於て原土を搜索し、良好の原料數種を得たり。

延享中藩主に従ひ江戸に到り、陶業家及茶道家を訪ふ、久我大納言公の藩邸に臨駕せられし時、樂焼をなし御覽に供せしに、公深く感賞せられ、悉く京都に持ち歸り私に觀覽に供せられたり、これによりて久我公より、法橋に任せんとの内命ありしと雖、先代に禁官の例なきを以て其事熄みしと、又藝州侯松平宮内少輔及び佐竹、堀田、酒井、建部等の諸侯に眷顧を忝せり。

此時建部勝隱侯より錦様樂新助より樂焼、大鹽助三郎より陶器目利の傳授を受けしと云ふ。

八代藤四郎に至る迄、世々陶器根役に任せられ陶業を總管せり、五代野四郎は、四代より改良の陶法によりてこれを開發し、陶業又進む、天明年中豊前上野に至り陶工十時孫左衛門、全榮藏、渡久之允、吉田喜藤太等へ陶法を傳授して歸る。

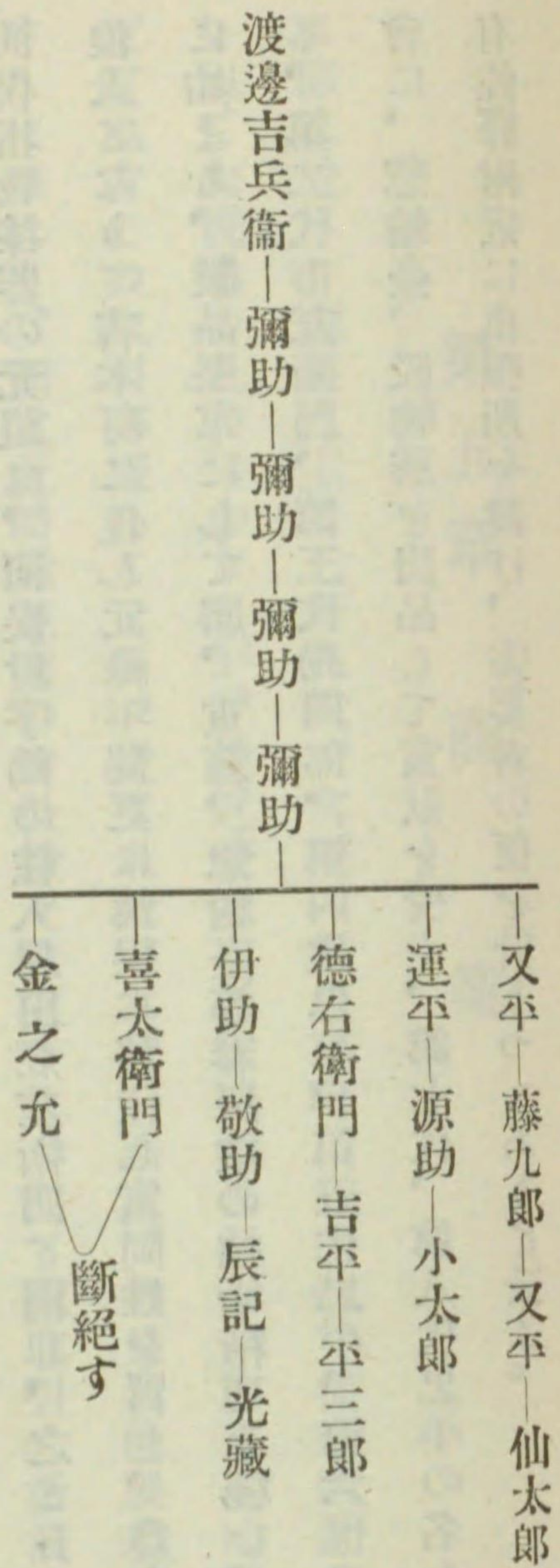
六代藤四郎は、寛政八年藩主に隨行して江戸に到り、藩邸に於て杯陶を製して、一橋公及松平讃岐守、井伊掃部頭、松平阿波守等の御覽に供せり、四代より陶法一變すと雖、古製の風致を存せしが、同人より七代野熊に至りて精巧の陶風に改良し、陶法又一變せり、野熊は老年致仕の後、陶事を後見し陶法を教授せり。

八代藤四郎は、第一回内國勸業博覽會に於て龍紋賞牌、又佛國巴里萬國博覽會に於て名譽の賞牌を得たり。

平山瓦の由来

平山瓦の由来を尋ねるに、其の祖先は平山陶と同じく高簾人なり、而して彼は盛名を得、此は然らざるは、畢竟藩政時代にありて祖先の系統を明にすること能はざりしに依る、一は詳に他は疏にして傳はらず、豈騒痒の嘆なからんや、今古老人の傳説と斷片的舊記とにより、之を總合し以て其一班を左に示さん。

瓦焼の祖を吉兵衛と云ふ、元平山陶の祖先喜藏等と共に、三齊公に従ひ豊前より我が本肥に来る、地を現地に卜し瓦を造ることを業とし細川侯御用瓦焼となる、此の時瓦焼たること舊の如く、五人扶持二十五石を賜はり、寛永十年(二二九四年)二月職場を建築することを命せられ、銀子若干を賜はり屢職場にも御覽あり、毎に賜物等あり、正保二年三齊公御逝去の翌年、松井佐渡守興長入城あるや、八代城御用瓦焼を命せらる、扶持はなかりしも年々銀米等の下賜ありたり、且國中何地へ瓦を賣捌くとも運上は免せられたり、初代伊助追々登城し、年頭には毎歳種々の賜物を受け、御絞付、御上下も兩度賜はる慶安二年(二三〇九年)三月伊助死す、其子伊助父の職を襲き、御用瓦焼となり御拾杯を賜はる、三代伊助も紋服を賜はり、四代伊助亦父祖の業を襲き大に精製せり、時に寶曆五年(二四一六年)乙亥十二月なり、幾何もなくして左の如く分派し、以て今日に至る、吉平瓦と名つく。



瓦製造戸數

同製造價格

一、五〇〇円

宮地製紙の沿革

文祿五年加藤清正肥後を領せし時、立花左近將盟關ヶ原の役、石田に與みせし故を以て加藤氏に領けらる、左近將盟加藤氏に勸むるに製紙業を以てす、加藤氏其の言を容れ、即ち筑後國、上妻郡、溝口村より、矢賀部新右衛門を招き、宮地村中宮谷に於て、製紙業を創めしめ扶持米を給せらる、寛永九年細川氏肥後を領せらるゝに及び、前例に依り御用紙漉を命し、更に矢賀部の親族原四兵衛、下川孫兵衛を招き、盛に御用紙漉を命せられ、各扶持米を給せらる、爾來漸次同業者増加し、天保年間に至り藩より紙楮會所に

を設立し、以て一般に製紙業を奨励せらる、之より一層盛大に赴けり、而して葦北、松求麻地方より楮皮を會所に納め、製紙者へは會所より紙と交換して下渡し、製造の紙は私に賣買を禁し、若し之を犯すものあらは相當處罰をなして之を取締れり、斯くて明治維新に至る、其後松岡長景其例に倣ひ、數年繼續せしも終に失敗に歸したり。

大高檀紙の製法は木村喜三次なる者、各地を遍歴して遂に其法を研究し、始めて當地に製造するに至れりと云ふ、明治十六年の頃、藁紙製法傳はりたるを以て正楮紙を漉くもの甚た少なきに至れり、而して大正五年八代製紙會社を創立せしより、從來手漉の紙は遂に振はさるに至れり。

河俣指漆器

河俣指物漆器の元祖は、河俣村字鶴の住人早田莊左衛門と稱し、之と日向國伊東修理太輔の臣なりしが浪人となりて吉本町に住し元祿年間更に河俣に移住し富岡姓を冒し、農事の副業として指物業を創めしに始まる、製品堅牢にして膳、重箱、惣輪臺等春慶塗の技術精巧を極む、世に之を河俣指と稱するに至る、第二代市左衛門、第三代勘四郎、第四代忠平、第五代忠平、第六代忠平は明治十一年内國勸業博覽會に、惣輪臺、吸物膳を出品して賞状を受く、第七代、第八代忠平の名を襲ひ、第九代文三に至り近時、有佐驛附近に出張所を設け、需要者の便を計りつゝありと云ふ。

第五章 商業

本郡に於ける商業は主として八代、宮原、鏡の三町に行はれ、從來四近の農村を目的とせしものなりしを以て大規模のものなかりしが、軌近交通、通信機關具備し、加ふるに需用供給の關係上九州各地又は京阪地方との取引亦盛んとなり、從て米穀、木材、薪炭、魚貝其他製造品等特産の物品亦自ら活氣を呈するに至れり、加之近時諸工業の會社續々設立され、從て商取引の活潑ならんこと今後に於て大に見るべきものあらん、現在に於ける商所爲の現況左の如し。

商業戸數	専業	二、六五四	兼業	三三九	計	二、九九三
人員	専業	男 三、一一五	女 二、八六七	計	五、九八二	
	兼業	男 二九二	女 二九二	計	五九一	
合計		三、四〇七	三、一六六		六、五七三	
會社	日本セメント株式會社	八代町	セメント	明治二十二年二月創立		

樺太工業株式會社坂本工場	上松求麻村坂本	製紙	明治三十六年八月創立
吉野製糸株式會社	吉野村	製糸	明治四十一年三月創立
合名會社 宮崎醬油店	八代町	醬油	明治四十三年創立
球磨川運輸合資會社	八代町	運送業	大正二年七月創立
日本窒素肥料株式會社鏡工場	鏡町	硫酸	大正三年九月創立
株式會社 鏡魚市場	鏡町	魚類依託販賣	大正三年九月創立
株式會社 八代魚市場	八代町	鮮魚依託販賣	大正四年三月創立
八代製紙株式會社	宮地村	製紙	大正六年一月創立
飯田石粉 第二工場	八代町	石粉	大正六年十月創立
合名會社 栗田商店	八代町	材木	大正八年一月創立
合名會社 米谷商店	八代町	米穀	大正八年一月創立
八代 緒方印刷所	八代町	印刷業	大正八年八月創立
鏡軌道株式會社	鏡町	運輸業	大正八年十一月創立
樺太工業株式會社八代工場	太田郷村	製紙	大正十四年一月創立

銀行

鏡、大鞘(文政村)、古閑入江(八千把村)、八代、植柳、

株式會社安田銀行八代支店	八代町	明治四十年五月創立
株式會社共榮銀行八代支店	八代町	明治三十二年創立
福榮無盡株式會社八代支店	八代町	大正二年三月創立
株式會社八代共立銀行	八代町	明治三十二年八月創立
株式會社 井芹銀行	宮原町	明治三十三年創立

質屋

店數 二七、

貸出金高 一四四、一一六^円

樺太工業株式會社坂本工場沿革及現況

(元東肥製紙株式會社なりしを九州製紙株式會社と改稱し尙大正十五年樺太工業株式會社と改稱せり)

本社の前身は元東肥製紙株式會社にして、明治二十九年藤村紫郎、安場保和、岡崎唯雄、大谷高寛、古

閑信喜等の諸氏によりて計畫され、八代郡上松求麻村、鮎歸谷の水量の豊富を認め、之を利用し約五馬力の原動力を以て、工場を坂本に創設し、抄紙機械二臺を据付け、明治三十二年漸く其の事業を開始せり、同年十一月不幸にも火災に罹り、工場殆んど灰燼に歸し、復興の困難なる窮境に陥れり、此時に當り偶現社長大川平三郎氏の盡力を得、一旦同社を解散し、更に資本金八十二万圓の九州製紙株式會社を組織し、明治三十六年八月事業の開始を見るに至れり。

明治四十年四月資本金一百萬圓に増資し、更に抄紙機械二臺を増設せり、同四十二年十月自家用水力電気事業を起し、大正元年九月木質紙料工場を新設し、大正五年十月更に抄紙機械二臺を増設並に資本金二百五十萬圓に増加し、又大正十二年十二月株主總會の決議により、事業の大擴張を計り、又々資本金壹千萬圓に増加し、遂年銳意經營の改善、作業の進歩を計り以て今日に至れり。

現今坂本工場は、由來山間狹隘の地積にして、現状以上工場を擴張せしむること困難なるに依り、八代驛接近の地を卜し新に八代工場を設置し、以て事業の増大を實現せり、八代工場には米國最新式の機械を据付け、抄造能率に於ては我國製紙界の霸王にして亦斯業家の羨望の標的たり、機械は世界有數の新式にして、製紙家の齊しく之が据付に躊躇するにも係らず、製紙王たる大川氏の勇斷よく是れを遂行し得たるは、産業界の一明星たるを失はず、斯くして經營其法を得事業は益順調に進捗し、大正十五年一大飛躍して遂に樺太工業株式會社と併合し、茲に世界的市場たらんとするに至れり。

一、生産額及職工

(大正十四年末調)

産 額	四四、九五九、九七六封度	計	一〇五九 [△]
職 工	九二一 [△] (坂本)		

二、製品販賣及輸出先

内地の販路は東京、大阪、名古屋、京都、中國地方、九州一圓、臺灣、朝鮮等なり、輸出先は印度、南洋、濠洲、支那方面等にして、多くは特約販賣店を経由するものなり、其の數量は概して内地向は全生産額の七割五分、輸出向は二割五分に相當す。

三、販賣方法及資金需給の状況

販賣方法としては各地の特約販賣店を通して、市場又は需要者へ販賣す、此収入金を以て會社經營費に充當す。

四、従業者の雇傭及待遇

従業者の雇傭は人事部にて担当し、雇人れんとする職工志願者は、其使用係員と立會し、雇傭検査票を作成し、戸籍抄本添付誓約書に記名捺印せしめて雇入る、使傭の上其日給を査定し、先つ見習工となして現業に従事せしむ、見習工は三ヶ月以内に職工となす、職工は日給定額以外、皆勤賞及生産に依る賞與金を支給す、職工の内技術優秀者を抜擢して工長、工長心得、世話役とな

し、月手當金を支給す、尙業務の成績に鑑み、半期特別賞與を支給す、亦半期に於て職工慰安會を開催す。

原料産出地及供給地並に需給の沿革現況

一、木材

イ、産出地及供給地

樺太、沿海州、北海道(以上産地)、熊本縣内(供給地)、

ロ、需給沿革及現況

製紙業と山林とは重大なる關係を有し、山林の背景なくして製紙業の發達を期し難し、世界に於ける製紙國たる瑞典、諾威、フィンランド、米國、加奈陀等皆豊富なる山林を有するを見ても明なり。

帝國の斯業界は如何と云ふに木材使用のことは、未だ新らしき時代に屬して、當時相當の期待を有し居たりしも現在に於ては既に將來を念して、痛く寒心に堪へざる状態に陥らんとせり。

北海道の大森林も正に禿山とならんとし、樺太又危險に瀕せんとす、原料産出地漸次暗黒に導かれんとする淋しき有様は、正しく製紙業の前途悲觀せすしては居られぬ、今世界に於ける原料材の分布を見るに

一、スカンデナヴィヤ半島

二、加奈陀

三、樺太及沿海州

以上三ヶ所に過ぎず、而して此三ヶ所こそ惠まれたる世界の製紙國たる主因を爲すものにして、實に木材の關係重大なりと云ふも宜なり、然れども沿海州は露領にして之が伐採には尙幾多の困難を有す、露國との協定成立する曉には、帝國は實に世界に於ける製紙國たるの、素質を確實に獲得したるものと云ふべきか、此意味に於て大川社長は既に樺太の帝國領となるや、挺身直に製紙事業將來の爲め建築し、一面樺太木材組合を組織し、又樺太に原料(パルプ)工場を創立し、近く又樺太製紙株式會社を新設し、原料を供給すると同時に、他面木材を内地工場に供給せり、尙沿海州材木會社を創設し將來の大計畫をなせり。

二、藁

イ、供給地としては主に肥前、福岡、肥後等の各方面よりも、相當に産出す。

ロ、本社創立以來、不斷唯一の原料として、藁を使用し來り今尙ほ相應に使用しつゝあるも、元來藁は産出も多量にして、且原價比較的低廉なるも、一面貯藏の困難なるを、容積擴嵩にして運送上不便の結果、自然運賃の不廉なるを免れず、使用上一考を要すべく、漸次抄造上和洋兩

紙共減少の傾向あり。

三、襪

イ、内地各方面より供給す。

ロ、原料としては最適当なるも、品種雑多にして之が撰分費用多大なると、現今混合物尤多く、且染色方法異りたる爲め、一定の原料を得るに頗る困難なる故、漸次特種品の配合に止り、自然需要減退しつゝあり。

四、バルブ

普通にバルブと云ふも、バルブの内に左の種類に分たる。

イ、ケミカルバルブ、

ロ、メカルバルブ、

尙「ケミカルバルブにも普通バルブとクラットバルブあり。

ハ、バルブの産地は瑞典、樺太、加奈陀、安東縣を以て主要地とす。

ニ、本社の原料移入は、重に樺太工業會社、鳴緑江製紙會社に依る、一ケ年の輸移入額は約八千余噸なり。

五、石 炭

イ、九州地方より移入す。

ロ、移入の方法は三井物産會社、三菱鑛山會社等と、年契約をなし納入せしむ、一ケ月約貳千噸乃至三千五百噸なり。

六、藥品及染料

藥品及染料は大部分内地産を使用す、松脂（サイズ）等は米國及加奈陀より輸入す。

製品生産方法及之に要する設備装置等

一、木質原料

イ、ケミカルバルブ（一名サルファイトバルブ）木材を細片とし、蒸煮機にて蒸煮し洗滌す。

ロ、メカニカルバルブ（一名グラウンドバルブ）木材を其儘「グラインダー機」（砥石）にて摺りたる原料。

二、藁原料

稻藁を蒸煮釜にて蒸煮せる原料。

三、襪原料

破布を細片として蒸煮釜にて蒸煮せる原料以上の諸原料を紙の種類により各種配合抄造せるもの

なり。

製紙用機械設備の概要

一、抄紙機械	六台	一、木質原料蒸煮釜	二台
一、藁原料蒸煮釜	二台	一、襤褸原料蒸煮釜	二台
一、原料漂泊叩解機	一三台	一、原料調合機	六台
一、全調整機	六台	一、斷截機 ボロノ部 ワラノ部	三台
一、木材細斷機	一台	一、割材機	一台
一、節拔機	二台	一、木材細片刻機(チップバー)	一台
一、木片篩機	一台	一、木質原料整調機	二台
一、壅木機(グライ ンダー)	三台	一、ソルター	五台
一、レファ井ナー	四台	一、ウッドマシン	二台
一、デツカーマシン	五台	一、丸鋸機	一台
一、荷造水壓機	二台	一、紙斷截機	七台
一、光澤を附くる機械	二台	一、巻取機械	二台

動力用及原料蒸煮用汽鐘

一、ランカッシャー汽鐘	五基	一、水管式汽鐘	四基
各動力用汽機及モーター水車			
一、汽機	八基	一、水車	四基
一、發電機	二基		
一、モーター各種	四十六台	最大 一、二〇〇馬力	
		最小 五馬力	

製紙の種類

- 一、蠶座紙 (藁蔴代用)
- 二、防虫紙 (俵装内包)
- 三、半紙 (和紙代用)
 - 九州、梅、竹、白縫、初霜、菊水、折鶴、白菊、野菊、柳、牡丹、
- 四、柿色模造紙 (越中富山方面ノ藥袋、海陸軍用ガーゼー袋)
- 五、カレンダー用紙 (毎年曆用紙)
- 六、片艶ロール薄物
 - チャリロール、松ロール、花ロール、梅ロール、竹ロール、福緑紙、洋雁皮用紙、ナブキ

ン紙、(生果包、小間物、陶磁器類包装、造花紙料、翫具、紙函)

等に使用する

七、輸出品各紙

フールス紙、書翰用紙、表紙、包紙、

八、荷札用紙

九、包紙

セメント包紙、紡績包紙、燐寸包紙、諸袋用紙、

一〇、模造紙（木質原料）

クラブ、ライオン、仁丹、其他高等化粧品、藥品等の袋、各證書用紙、三越其他商店の意

匠裝飾用紙、ミルクキャラメル包菓用紙、

一一、印刷紙

白蝶、鷗、菊、雪、月、

一二、雜記帳

星、董、松、紅葉、各學校用ノート用、

一三、煙草口紙

一四、新聞用紙

一五、輸出有光紙（支那向）

一六、電報用紙

一七、葉書用紙

前記抄紙機六臺の任務及名稱（坂本工場据付分）

- 第一号抄紙機 ホルドリニア 模造紙、印刷紙、上等包紙、
- 第二号全 全 新聞紙、模造紙、
- 第三号全 ヤンキ ロール紙、中等印刷紙、
- 第四号全 ホルドリニア 新聞紙、包紙、
- 第五号全 ヤンキ 模造紙、ロール紙
- 第六号全 全 模造、ロール紙

日本窒素肥料株式會社鏡工場の沿革及現状

本工場は鏡町の西方字郷開に在り、敷地坪數約二万余坪を有せり、鏡入江に北面し、満潮の際は水深く大小船舶岸邊に繫留し、其往來に便なるか故に、原料の移入、製品の運搬に依る亦少きにあらず。元來本工場は、電力供給を目的として、明治三十九年一月、薩摩國伊佐郡に於て創立せられたるものにして、事業開始後日ならずして、別に又川内川の中央にある曾木瀧を利用し、電力により炭化石灰カル

シニウム、カーバイト製造の目的を以て會社設立せられたるが、其後經營上の都合に依り、兩會社併合し鏡町の現工場地が、電化工業に適當なる地域たるを物色し、明治四十年、日本窒素肥料株式會社鏡工場として創立せらるゝに至れり、尙一面には姉妹工場として、明治四十一年十二月、水俣町に水俣工場として設立せられ、兩々相對して事業の振興を計れり、爾來一般の好景氣に促され、製造能力も十分に擴張され、各方面の需要に應じ居たるも、近年に至り宮崎縣に新工場を設立さると同時に、該工場の事業を縮少し、従つて製品も亦限度せられたる觀あり。

動力 當工場には元來自營に係はる、内大臣川、綠川、白川の各發電所よりの送電と、尙不足せる幾分を熊電に仰き、計三萬馬力の電力を使用せり。

製品及産額 酸素、カーバイト、窒素、セメント、硫酸アンモニヤ等を製造せり、其の産額は酸素（一時間に四百立方米突）カーバイト四萬噸、窒素五萬噸、硫酸アンモニヤ四萬噸、セメント三十萬樽なり。

原料の移入 原料中尤多量なる石灰は、重に八代沿海一帯より移入す、其の方法としては、會社の所有に於て隨意採取し、石炭は三井物産會社の手を経て、支那鴻基方面より輸入す。

製品の運搬 製品は全國一般に供給し、陸運は工場より有佐驛に通する軌道に依り、海運は所有船若くは、汽船によりて需要地に輸送す、概して當工場は運送上海陸其便を得たり。

重役及従業員 本社の重役は取締役七名（内社長一名、専務、常務各一名、支配人一名取締役兼務）監

査役三名、相談役一名にして、従業員には正社員並に准社員數十名あり。

職工及勤務時間 業務の如何によりて、常に職工の増減あるは免れずと雖、通して男女職工一千名内外あり、而して勤務時間は一日三更代として八時間制を實行せり、又勤務外の勤務に對しては特に割増金を給す。

硫酸アンモニヤ製造は、最新式にして、獨逸の學者アトルフブランクエヌカロー氏の發明に係る特許法を用ゐて居る。

本縣に於ける工場労働者は四万六千二百余人にして全國の百分の一なり

第六章 交通及び通信

第一節 總 說

本郡の西部平坦地方は、八代、千丁、有佐三驛によりて鉄道の便を得、國道は鹿兒島線、里道は鏡線南北に貫通し、車道及人道は縦横に敷設せられ、球磨川には舟楫の便あり、海路には船舶を用ひて南北相通す、山間部の松求麻地方は肥薩線の貫通せるを以て、坂本、瀬戸石（葦北）兩驛に接近せる地方は之を利用するの便あり、所謂東部の山間地は必ずしも鐵道の便、舟運の利を羨ますとも、宮原より柿迫、川俣の兩村へは、夙に車道の敷設せられ、尙新に自動車の來往するあり、東端柿迫村以東は峻嶺嶮阪を

越へ幽谷に沿ひ纒かに細徑を通するに過ぎず。
通信機關は、平坦地方なる八代、鏡、宮原附近は、電信、電話を利用するに最有利なれども、山間僻地及び海岸方面は、唯郵便の配達、電報の特達によりて其惠澤を蒙むるを得るに至れり。

第二節 道路

國道鹿兒島本線は吉野村より、宮原町、龍峰村を経て宮地村に入り、西下して太田郷村字萩原に至り球磨川を横斷して高田村を貫き、金剛村字敷河内を通りて葦北郡日奈久町に至る、郡中を通すること約二十四軒に達せり。

縣道

- 一、熊本、八代線 熊本市南千反畑町を起点とし、八代町を終点とす、經過地は太田郷村にして太田郷村大字萩原迄は國道鹿兒島線と一致せり。
- 二、宮原、鏡線 宮原町を起点とし鏡町を終点とし、有佐停車場を通過す。
- 三、人吉、宮原線 宮原町を起点とし球磨郡人吉町に終る、河俣村を通過す。
- 四、八代、八代港線 八代町を起点とし八代港に終る。
- 五、松橋、鏡線 鏡町を起点とし下益城郡松橋町に終る、和鹿島村を通過す。



- 六、八代、鏡線 八代町に起り鏡町に終る、太田郷村、八千把村、千丁村、有佐村を通過す。
- 七、柿迫、小川線 柿迫村に起り下益城郡小川町に終る、下岳村、種山村、吉野村を通過す。
- 八、八代、種山線 八代町に起り種山村に終る、太田郷村、龍峯村、宮原町を通過す。
- 九、八代、郡築線 八代町に起り郡築村に終る、松高村を通過す。
- 一〇、八代、金剛線 八代町に起り金剛村に終る、植柳村を通過す。
- 一一、八代、葉木線 八代町に起り葉木村に終る、太田郷村を通過す。
- 一二、鏡、小川線 鏡町に起り下益城郡小川町に終る、和鹿島村、吉野村を通過す。
- 一三、松高、鏡線 松高村に起り鏡町に終る、八千把村、千丁村、文政村を通過す。

村道

八代中道通 鹿兒島往還中下益城郡河江村より分れ、本郡吉野村字新田に入り、鹿兒嶋、鏡二往還の間を南し、八千把村字會地に於て鏡往還に合す、郡中を通すること凡十二軒余、全部車を通す、又熊本、八代間の便道なり、左の町村を經過す。

吉野村大字新田、和鹿島村大字島地、松本橋（氷川）鏡町大字上鏡、有佐村大字下有佐、千丁村大字大牟田、新牟田、八千把村大字會地。

椎原往還 下益城郡西砥用村大字原町に於て、縣道堅志田往還に分れ、七郎次の峻阪を登り本郡仁田尾

村に入り、葉木村を過ぎて再び仁田尾村に出で、小鐘峰の半腹を迂回し椎原橋（縦木川）を渡り、椎原村を過ぎて久連子橋を經、柿迫村の南隅を通り球磨郡五木村に入り、字頭地に於て五木往還に合す、本郡を通すること凡三十二軒、砥用より葉木迄は漸車馬を通すべく、其他は懸崖危棧纜かに人馬を通するに止まる、葉木より分岐し縦木を經て、宮崎縣那須の山郷に入る道路あり、亦漸く車馬を通す、久連子橋、椎原橋は元釣橋にして藤蘿を以て粗朶と竹とを編み、之を兩岸の大本に結び付けたりしと云ふ、通行する人は動搖し、慣れざるものは頗る艱む、古來五家の釣橋とて著名なりしが、今久連子橋は眼鏡式の石橋となり、椎原橋は刳橋式の木橋となり、安全に通行し得るに至れり。

五家莊の東北部及び宮崎縣の那須山郷の物産は、椎原往還によりて原町に輸出せらる、五家莊は殆んど牛馬を使用せず、貨物の運搬は一に人背に負ふを常とす。

五家莊往還 鹿兒島往還中、下益城郡小川町より分れ、海東村を過ぎ、新道越の險を越へ、本郡下岳村に入り、氷川に沿ふて東し、柿迫村を過ぎ、三本木峠の險を越へ、久連子橋の附近にて椎原往還に合す、郡中を通すること凡二十八軒、車の通するは只下益城郡内の一部に止まり、其他は多く牛を以て貨物の運搬をなす、柿迫村内より分岐し、笹の越峠の險を越へ、永尾俣川、一渡瀬川に沿ひ、仁田尾村、小原を經て椎原往還に合せる一線あり、辛ふして漸く牛馬を通す。

五家莊の南部栗木、柿迫、下岳地方の物産は、五家往還によりて小川町に運搬せらる。

第三節 鐵道

鹿兒島本線は福岡縣門司より來り、明治二十八年一月二十八日有佐まで開通し、初めて郡内に汽車の運轉を見たり、翌二十九年十一月二十日には愈八代町まで開通し、遇々當日は陰曆十一月十八日の八代神社大祭にて開通式には一層の賑を呈せり、然るに九州鐵道は當分八代驛を終点としたりしが、國有線は次で八代、人吉間に着手され球磨川沿岸の難工事も愈竣工し明治四十一年六月一日を以て開通するに至り、先是九州鐵道株式會社線は國有線となれり、其後八代、鹿兒島間の肥薩線起工され大正十二年七月十五日八代、日奈久間開通し八代驛は實に主要の驛たるに至れり、即ち鹿兒島本線は有佐、千丁、八代及び坂本の諸驛を經て鎌瀬の鐵橋を渡り葦北郡に入り鹿兒島に至る、郡中を通すること約十五哩、八代驛より球磨川驛に至る支線ありて、貨車を運轉す。

肥薩海岸線は、八代驛より分岐し、宮地村古麓鐵橋を渡り、高田村、金剛村を經て葦北郡湯浦に至る、球磨川鐵橋は、宮地村と高田村との間なる遙拜の急瀬に架する鐵橋にして水面上五十二呎、長さ千七百五十呎、九州第一の長橋にして工費實に五十万圓を要したり。

有佐驛 有佐村大字下有佐にあり、鏡、宮原兩町の間に位し、各約二十町を隔つ。

距千丁驛

三哩

千丁驛 千丁村の東端大字吉王丸にあり、有佐、八代間の中央に位し、大正十五年六月一日新設せしものなり、從て千丁村龍峰村の交通上、一層の便を見るに至れり。

距八代驛 二哩八、 距有佐驛 三哩、

八代驛 太田郷村大字萩原にあり、八代町を距る約十八町、

距坂本驛 六哩六五、 距熊本驛 二二哩二八、

距人吉驛 三二哩〇八、 距門司驛 一四五哩〇〇、

距麿島驛 九二哩五六、 距三角驛 三二哩四二、

距日奈久驛 六哩三、

坂本驛 上松求麻村字松崎にあり、

距瀬戸石驛 五哩三〇、

第四節 通信

本郡郵便局の設置個所左の如し、

八代郵便局 特定三等 八代町字本町に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金、電報、電話を取扱ふ、

區域 八代町、植柳村、高田村、郡築村、松高村、太田郷村、宮地村、八千把村、

八代出町郵便局 三等 八代町字出町に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金を取扱ふ、八代局の区域内なるを以て、郵便物集配の取扱をな

さす

植柳郵便局 三等 植柳村大字植柳に在り、

無集配前に同し、

宮地郵便局 三等 宮地村大字宮地に在り、

無集配前に同し、

千丁郵便局 三等 千丁村大字新牟田に在り、

無集配前に同し、

鏡郵便局 三等 鏡町大字鏡町に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金、電報、電話を取扱ふ、

區域 鏡町、文政村、有佐村、千丁村、和鹿嶋村、

宮原郵便局 三等 宮原町大字宮原町に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金、電報、電話を取扱ふ、

區域 宮原町、龍峰村、野津村、種山村、川俣村、
柿迫郵便局 三 等 柿迫村大字筒井に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金を取扱ふ、

區域 柿迫村、栗木村、下岳村、

五家莊郵便局 三 等 仁田尾村大字小原に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金を取扱ふ、

區域 仁田尾村、椎原村、久連子村、葉木村、樺木村、

松求麻郵便局 三 等 上松求麻村字坂本に在り、

普通郵便、小包郵便、爲替、貯金を取扱ふ、

區域 上松求麻村、下松求麻村、

右の外金剛村は日奈久郵便局の區域に屬し、吉野村は小川郵便局の區域に屬す。

有佐、八代、坂本の各驛は、特に公衆電報及電話を取扱ふ。

第五節 水 運

八代町は球磨川の支流前川に沿ひ、鏡町は鏡入江に臨み共に碇泊の地たり、然れども干潮の時は、海面

遠く干潟となるを以て大船を容るゝこと能はず、天草、葦北の物産は、此の兩港によりて輸入せらるゝ、もの多し、植柳村飯屋、八千把村古閑入江、文政村大鞘亦小舟を通す。

九州汽船株式會社の定期航路三角米ノ津線は、三角を基点とし八代を経て南下し、米ノ津間の諸港に寄港し、又三角半深線は、三角を基点として八代港を経て天草の諸港に通す。

第七章 教 育

第一節 中學校及女學校

熊本縣立八代中學校、八代町字松江城（舊城内二の丸）に在り、明治二十九年四月、熊本縣尋常中學濟々疊八代分疊として設置せられ、八代町光徳寺内に仮校舎を設く、明治三十年福岡縣尋常師範學校教諭兼舎監石丸關次、濟々疊教諭兼舎監に任せられ分疊主任を命ぜらるゝ、同年四月民家を借りて生徒寄宿舎に充つ同月八代城内舊傳習堂の跡を下し校舎建築を勸む、明治三十一年一月校舎竣効し之に移る、建築に要せし經費は、八代、葦北、球磨三郡の寄附に係る、敷地三千三百六十坪の内二千四百坪は八代町より寄附し、其の他は官有地を拂下げたるものとす、同月名稱を熊本縣尋常中學濟々疊城南分疊と改む、明治三十一年十二月教諭石丸關次死亡せしを以て、教諭大江安之助主任代理を命ぜらるゝ、明治三十二年

一月二十日教諭足立喜六主任代理を命せらる、同年六月金澤來藏囑托教諭に任せられ序で主任を命せらる。

明治三十三年四月獨立して熊本縣第一中學校と稱し、同月靜岡縣濱松中學校校長杉田平四郎學校長に任せらる、同月敷地を擴張して七千四百四十四坪となす、同年十二月熊本縣八代中學校と改稱す、同三十四年三月校舍増築成る、其の經費の三分の一は、八代、葦北、球磨三郡の寄附にして、三分の二は縣費たり、同年六月熊本縣立八代中學校と改稱す、十一月二日 御聖影を下賜せらる、十二月新築寄宿舎落成す、同三十九年十一月杉田平四郎山口縣立岩國中學校長に轉任し、休職大分縣立中津中學校長村上俊江學校長に任せらる。同四十二年四月、熊本縣立鹿本中學校長水上浩然學校長に任せらる、大正九年十一月熊本縣立天草中學校長井嶋政吉學校長に任せらる。
現在職員左の如し

校長(奏任待遇)	一人	教諭	十六人(内奏任待遇五人)
教諭心得	六人	囑托教諭	一人
助手	一人	書記	三人
學校醫	一人		

現在生徒數及び學級數

生徒數 七五〇人、
學級數 一五學級、

熊本縣立八代高等女學校 八代町字長丁に在り、私立八代郡教育會の建議により郡會の決議を経て創設の認可を得たるは、實に明治三十四年七月三十一日なりとす、同三十五年四月、熊本縣立八代中學校長杉田平四郎校長事務取扱を命せらる、同年五月六日八代町代陽女子尋常小學校の一部を假用して開校す、同年六月村岡素一郎學校長を命せらる、同年十月新築校舍落成、十一月移轉せり、同三十六年村岡素一郎辭退し八代中學校長杉田平四郎再び校長事務取扱を命せらる、同三十七年四月五日宮地欣吉學校長に任せられ、同四十四年五月、熊本縣立八代中學校教諭松尾敬吾學校長に任せられ、大正七年五月鹽野學進校長に任せらる、大正十三年四月熊本縣に移管し熊本縣立八代高等女學校となる。

現在職員左の如し

校長(奏任待遇)	一人	教諭	男女 十六人(内奏任二人)
助教諭心得	二人	囑托教師	一人
書記	二人	學校醫	一人

現在生徒數及學級數

生徒數 三四七人、

學級數 八學級、

私立八代成美等高女學校 八代町字長丁に在り、明治四十二年四月、校舍建築の工を起し七月竣成し、私立八代女子技藝學校と稱し、十月校主ウラリ學校長となる、四十三年三月開校の式を舉行す、四月一日勅語贈本下賜せらる、七月ウラリ現職を辭し、小野元莊學校長となる、同四十四年六月寄宿舎竣成、八月専科新設、大正三年二月私立八代技藝女學校と改む、七月研究科新設、同七年九月校舎一棟新設、同十年三月本科の組織を改め八代實科高等女學校となす、同年六月私立八代技藝女學校を八代技藝女學校と改め専科を廢す、十月研究科を廢し、同十一年三月寄宿舎一棟を新築し、從來の寄宿舎を改造して二教室を設く、同十二年一月校主ウラリ死亡に付同年三月ガラシエス校主となる、同十五年三月高等女學校に組織を變更し元山口縣立徳山高等女學校長米原鶴太學校長となる。

現在職員は左の如し

校長	一	人	教諭	男	四	人
教諭心得	男	一	女	一	人	
學校醫	一	人	書記	男	一	人
			女	一	人	

現在の生徒數及學級數 三〇〇人、

學級數 六學級

第二節 小學校、補習學校、幼稚園

學校數

尋常高等小學數 二八

小學校及學級數

尋	尋高計		場數	尋常科學級數			高等科學級數				
	尋	高		單式	複式	單級	計	單式	複式	計	
一〇	二八	三八	一一	二六〇	三一	一一	三〇三	一七	二〇	三七	三二九

學齡兒童數

大正十四年度

學齡兒童數	計	猶不豫學兒童數	
		男	女
九、七二二	八、六五七	一八、三七九	五
			五
			三
			一

就學兒童數並其步合

大正十四年度

就學兒童數	就學步合		平均
	男	女	
計數	九九、六九	九九、五四	九九、六一
七、〇八一	六、〇三二	一三、一一四	

尋常小學校	農業補習學校	商業補習學校	幼稚園
一〇	二四	二	二

小學校一覽

學校名	學級數	生徒數	職員數
代陽男子	一七	男 九〇三	二〇
代陽女子	一六	女 八二四	一八
植柳	七	女 二一七	八

學校名	學級數	生徒數	職員數
麥島	五	女 八三四	五
金剛	一〇	女 二二七	一一
高田	一二	女 二二八	一三
三坂	一六	女 一〇〇八	一八
藤本	一三	女 二四〇九	一五
下松西部	八	女 一四四六	八
中谷	七	女 一四一四	七
深水	三	女 七八九	四
鮎歸	七	女 一六五〇	七
宮地	一〇	女 二二〇三	一一

久連子	栗木	柿迫東部	柿迫西部	下岳	河俣	種山	宮原	野崎	鏡
一	五	四	三	七	八	〇	一四	三	二六

女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男
一一七	一二〇 一三五 〇五	七三 七七 七四	七五 七七 七九	一四七 一七九	一六三 一九〇 三〇	二二三 三〇〇 三三〇	二八七 三三五	五四 五三	五七〇 七三六

八九	一	六	四	三	八	九	〇	一六	三	三一
----	---	---	---	---	---	---	---	----	---	----

文政	有佐	龍峯	千丁	郡築	大島	松高	八千把	太田郷	猫谷
一四	八	八	二〇	一〇	一	九	一一	一九	二

女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男
三四〇 〇二七	二二二 二二二 四二	一七〇 一七〇 四三	四四四 四九〇 五	一一九 一九五	三五三	二〇五 二五三	二二四 二七六	四六一 四五七	四五九 五六六

一五	九	九	二〇	一〇	二	一〇	二	二〇	三	八八
----	---	---	----	----	---	----	---	----	---	----

小原	一	女	二四	九〇
葉木	二	女	一六	一
計	三三二	男	四八	二
		女	四九	三七〇
		男	五二一	
		女	三四二	

義務教育費國庫交付額

一金四萬五千參百九拾圓〇九錢

內

八代町	四、六三一、五四〇
植柳村	一、六七七、七四〇
金剛村	一、三七八、三七〇
高田村	一、六六六、九九〇
上松求麻村	二、五〇四、八五〇
下松求麻村	三、二七〇、七八〇
宮地村	一、五八八、六〇〇

(大正十五年度)

太田郷村	二、六〇六、六一〇
八千把村	一、四六九、〇五〇
松高村	一、四六八、八八〇
郡築村	一、四一八、三三〇
千丁村	二、六四三、三三〇
龍峰村	一、〇〇二、三二〇
有佐村	一、二四八、〇六〇
文政村	一、八八五、〇七〇
鏡町	四、〇九八、五四〇
和鹿島村	一、四一九、七〇〇
吉野村	一、〇三三、〇五〇
野津村	八六四、三一〇
宮原町	一、七八六、七一〇
種山村	一、三八九、四五〇
河俣村	一、一三三、五六〇

下 岳 村

柿迫村外六ヶ村組合

一、〇一四、六一〇
二、一九九、六五〇

補習學校一覽

學校名	學級數	生徒數	職員數
代陽商業	三	一四一、八一三	八
代陽女子實務	二	四〇、八八五、五〇	五
植柳農業	一	一、八八五、〇四三	二
麥島農業	一	四、〇四八、〇五〇	三
金剛農業	五	二、〇〇〇、二七八、四	九
高田農業	二	一、〇六四、三三七、一	四
三坂農業	四	六、〇〇〇、六三三、七、七	三
藤本農業	四	二、〇〇〇、〇〇〇、一、二、六	四
宮地農業	四	三、〇〇〇、〇〇〇、〇、五、七	三
猫谷農業	一	一、〇〇〇、〇〇〇、〇、〇、二、〇	二

太田郷農業	三	六、五	四
八千把農業	一	五、一	三
松高農業	二	九、〇	四
郡築農業	一	三、三	二
千丁農業	二	九、一	七
龍峰農業	一	五、二	四
有佐農業	二	八、一	五
文政農業	二	六、六	三
鏡 農 業	一	二、三	五
和鹿島農業	二	一、〇〇	五
吉野農業	二	七、〇	四
野津農業	二	七、三	六
宮原農業	五	一、八、六	七
種山農業	四	一、〇〇	四
栗木農業	四	一、八、五、七	二

計

五九

一、八九八

一〇八

小學校沿革概誌

明治五年七月學制頒布の後、本郡に於ては明治五年乃至八年に各町村に小學校を設置せられ、初めは某學校と稱し、後公立某小學校と稱するに至れり、校名は多くは學校所在の地名、若くは地名に因みある文字を用ゐたり、初等、中等、高等の制あるに際し、各校三等を通して教授せしが、村落の學校にては中等科の上級、高等科の児童は極めて少數なりき、明治十九年四月、小學校令の發布あり、小學校を分つて尋常、高等の二種となし、特に小學簡易科を設けて、尋常小學校に代用するを得るの制を設けらるゝや、同二十年四月を以て之を實施し、先づ八代町に郡立として高等八代南部小學校を設け其後組合立となせり。

同時に鏡町に分校を置きしか同二十二年八代北部高等小學校として獨立せり、而して各町村役場區域中の主なる一校、若くは二校を尋常小學校となし、其の他を悉く分校となせり、尋常小學校の維持費は授業料本位にして、各町村は其の不足を補充する制なりしかば、授業料徴収に困難なる隣村は多く小學簡易科を設けて尋常小學校に代用せり、尋常小學校は四ヶ年制にして一日の授業時間は凡そ五時間なりしも、簡易科は三ヶ年制にして一日の授業時間は三時間以内なりき、同二十三年十月小學校令を改正せら

れ、小學校簡易科を廢し尋常小學校の修業年限を三ヶ年若くは四ヶ年となし、授業料を廢することとし、同二十五年四月を以て之を實施し、舊來の小學簡易科及び分校は尋常小學校となりたり、而して修業年限は悉く四ヶ年とし校名は務めて町村名を用ひしめたり。

明治二十五年七月八代北部高等小學校の組合を分つて、更に八代東部高等小學校を設く、於是高等小學校は三校となり更に同卅三年別に八代南部女子高等小學校を設置せり、同三十八年の頃より尋常小學校内に二ヶ年の高等小學校の教科を併設するもの多く、其の結果若くは其他の事情により二部教授を行ふものあり、同卅九年組合變更と共に八代南部女子高等小學校を廢す、同四十一年四月義務教育年限の延長に依り尋常小學校の修業年限は悉く六ヶ年となり、尋常小學校に併設の高等小學校は全然之を廢せり。明治四十二年四月、八代東部高等小學校を廢し、其の前後に種山、宮原、龍峯、野津の五校に修業年限二ヶ年の高等小學校の教科を併設せり、大正三年四月、藤本尋常小學校亦之を併設せり、同九年三月八代北部高等小學校の組合を解散せしを以て、其の組合町村の各尋常小學校に二ヶ年の高等小學校を併置するに至れり、同十年五月八代南部高等小學校組合の解散に伴ひ、其の組合九ヶ町村の各尋常小學校に、修業年限二ヶ年の高等小學校を併置せり、是に於て本郡内の特設高等小學校は全く廢止せられ、各町村悉く統一的に、尋常高等小學校の名稱を冠するに至れり。

設立年月	種別	館名	設立者	所在地	大正十五年 總額	大正十五年 購入圖書費	藏書 冊數	閱覽 延人員 一日平均	設立者
大正十三年四月	獨立	下松求麻中谷青年文庫	青年團支部	中谷小學校	12,000	12,000	261	700	28,000
大正十一年十一月	獨立	鏡町立名和圖書館	町	鏡町	9,010	5,000	1,769	2,769	13,400
大正十三年八月	獨立	八代町立圖書館	町	八代町	9,600	7,000	856	3,540	24,000
大正十三年九月	獨立	氷川文庫	私	宮原町			300	830	3,000
大正十三年四月	附設學校	中谷兒童文庫	村	中谷小學校	8,000	8,000	27	2,330	11,000
大正十三年四月	全	植柳小學校兒童文庫	村	植柳村	45,000	45,000	273	3,800	4,500
大正十三年四月	全	野津村立圖書館	村	野津小學校	100,000	100,000	91		
大正十三年四月	全	松高青年圖書館	村	松高小學校	100,000	100,000	177	1,560	4,000
大正十三年一月	附設學校	宮地小學校兒童圖書館	村	宮地小學校	17,000	13,000	332	2,570	4,800

第三節 教育會

熊本縣教育會八代郡支會

事務所 八代町代陽尋常高等小學校内

組織の概要

會員は主として小學教育に従事するものとし、中等學校職員、學務關係官公吏及本會の爲め特に功勞ありと認むる者を特別會員とし、尙名譽會員を推舉す、會を分ちて總集會、評議員會、常委員會の三とす、別に女子部ありて總會、部會を開き、調査部ありて調査部會を開き全部を五部に分ちて部會を開く、幹部は會長一名、副會長一名、理事三名、書記二名より成り、評議員若干名、常委員五名を置く、調査部は部長一名、主事一名、委員五名より成り、女子部は部長一名、主事一名を置き、而して五部には各正副部長を置く、經費は會員の負担と、郡費の補助とに依る、事業としては主に教育上必要事項の調査、學事視察員の派遣、講習會の開設、通俗講演會の舉行、功勞者の表彰、品評會、展覽會、運動會等なり。

沿革の概要

明治十三年督業訓導重富芳翰、郡中の教員一校一名宛を召集し教育上の問題を討議す、是れ本郡に於

ける教育者集合の嚆矢とす、此の會合に於て會則を議定し、更に郡内を數區に分ちて月次會を開く、爾來月次會は繼續的に開會されしも、總會は明治十四年督業訓導の廢止と共に消滅せり。

明治十五年以後、春秋二回各小學校長若くは首座教員（當時の制校長を置けるは、郡中二三の學校に止まる故に首座教員なるものは今日の校長に當る）を郡役所に會し、教授、訓育、管理に關する諸問題を研究するを恒例とせり同十七年全部を五學區とし、各學區一名の學務委員を置くや、學務委員も亦此の會に參與することゝなれり、月次の教育會は、一學區を一區域とし、學務委員管理の下に開會せられたり、同十八年學務委員の制を廢せられたるも、月次會は猶從前の區域を繼續せり。

明治二十年學務主任郡書記佐々布遠幹旋する所あり、舊二番、三番兩區の月次會を併合して八代南部教育會を、又舊四番、五番兩區の月次會を併合して八代北部教育會（名稱は兩會とも屢變更す）を組織し、舊第一番學區たる代陽小學校は更に獨立して一の教育會を設けしが、同二十四年四月八代南部教育會に合併せり。

明治二十年五月代陽小學校長菅沼安隆、南北兩部會に交渉して賛同を得、服部友規、來海實、沼田則英、矢住信道、緒方千尋等幹旋の衝に當り、六月十二日代陽小學校に組織會を開き、私立八代教育會を創立せり、これ郡教育會の濫觴なり、其の組織は正副會長各一名、理事二名を置き、又全郡を五組に分ち、各組一名の幹事を置く、代陽小學校長菅沼安隆會長に當選せり。

明治二十一年六月、八代町に於て八代葦北私立教育會聯合會を開會せり、當時八代葦北郡役所なる一監督官廳の下にありしを以て聯合開設の議起り、毎年春期總會を聯合開會することゝなれり、菅沼安隆辭退の後代陽小學校長安本亘會長の任にありしが、明治二十一年十月、郡長松崎欣哉會長に當選せり、是れ郡長を會長に選舉するの始なり。

明治二十三年四月、兩郡定期の聯合教育會を止め、臨時必要ある毎に聯合開會すること、及び毎年一回聯合評議員會を開設することに決す。

明治二十四年、安本亘再び會長に當選せり、從來總會場は八代町に限られしが、同二十五年十月始めて鏡町に於て開會し、南北交互開設の例を開けり。

明治二十六年十月、各郡市聯合を以て組織せる熊本縣教育會成立せり、同二十七年十月八代、葦北兩郡聯合教育會組織再び成る。

明治二十九年八月、本會の事業として千丁東部尋常小學校に夏期講習會を開設す、これ本會の講習會を開く嚆矢たり。

安本亘辭退の後、八代北部高等小學校長名和範藏會長の選に當りしが、同二十九年九月に至り、郡長辛島格を推舉し會長となす、於是再び前例に復せり。

明治三十年四月、八代、葦北兩郡聯合教育會を廢す、先是會則修正の必要を認め家城鶴年、服部友規、

蓑田貴明、成松幹吾、緒方千尋を起草委員とし、家城、緒方の両委員主査となり、全年十月の總會に於て、條文の整理を行ひ面目を一新せり、其重要事項を擧ぐれば左の如し。

交本 一、理事を三名とすること、

二、評議員十二名を置くこと、(評議員は二十三年頃より設置せられしも會則に條文なかりき)

三、會費を増加すること、

明治三十一年、郡費の補助を仰ぎ、縣外學事視察員四名を派遣し、同三十三年八月、郡費の補助を以て夏期講習會を開設せり、兩者とも以後常例となる。

辛島格辞退の後、郡長尾形惟昭、古城彌二郎相尋いて會長の選に當りしが、同三十三年十月、古城會長の辞退と共に會則を修正し、會長を名譽會長となし副會長を置くこととし、男爵松井敏之を會長に推薦せり。

明治三十五年八月、葦北、球磨、宇土三郡教育會と聯合し、八代町に於て夏期講習會を開設せり、是れ他郡と聯合開設の嚆矢とす。

明治三十五年十月、松井男爵會長を辞す、依て郡長古城彌二郎を會長に推選せしが海面埋立大事業經營の故を以て固辭して受けず、同卅六年五月名譽會長及副會長二名を置くことを廢し、正副會長各一名とし、八代南部高等小學校長服部友規會長に當選せり、同三十七年六月辭退せしを以て同年十月八

代中學校長杉田平四郎を會長に推選す、同三十六年六月郡教育會にて郡誌編纂の議起り高木虎親、緒方八郎、緒方千尋、赤坂元男を委員に擧けたるを以て直に其調査に掛れり、同三十九年十一月杉田會長辭退同四十年十一月、再び郡長古城彌二郎を會長に推選す。

明治四十二年十二月、縣教育會の組織を變更し、從來の聯合體を止めて合同體とし、各郡市教育會は其の支會となれり、従つて本會も熊本縣教育會八代郡支會と改稱す、同年同月八代中學校長水上浩然を會長に推選す。

明治四十四年、夏休日誌及び練習帳の統一を認め、調査部に於て能く之を調査し、熊本市横溝商店と契約をなし、本郡教育支會に於て發賣することとせり、本縣第二師範學校の設置の議あるや、本會は八代町若くは其附近に設置するの當然なるを認め、葦北郡教育會と聯合し猛烈なる運動を開始し、知事に建議し、或は新聞に主張を公開し、大に輿論に訴ふる所ありたり、大正二年從來の本會々報は單に會の事業の報告のみなりしを、會員研究發表の機關雜誌たらしめ、其の面目を一新せり。

大正二年十二月二日、縣評議員改選の結果左の四名當選す。

高木虎親、緒方千尋、緒方八郎、野口吾平、

又支會役員滿期に付、改選の結果、左の通り當選す。

會長 水上 浩然

副會長 田代喜作

理事 高木虎親

緒方千尋

緒方八郎

女子部長 松尾敬吾

主事 野口吾平

調查部長 後藤芳馬

大正四年縣評議員改選左の如し。

高木虎親、野口吾平、池邊用太郎、右田武、

嚮きに縣教育會にて編纂の征西將軍宮御傳記成りしを以て、大正四年六月二十七日八代宮に於て奉告祭を行ひ御傳記を頒布せり。

大正五年九月五日、明治神宮に對し、本支會より献木す、理事高木虎親、右田武専ら幹旋の衝に當れり。

大正六年三月十四日、郡役所に於て、本郡青年團聯合組織を開き、全四月二日委員會を開き團の綱領、團則を制定し、茲に始めて八代郡聯合青年團の組織成る、同年十月全郡教員體育會を八代中學校々庭にて行ふ、是れ本縣に於ける教員體育會の嚆矢なりとす、同年十月會長水上浩然、理事右田武中部支那視察をなす。

大正八年十一月八代南部高等小學校長高木虎親滿州方面視察をなす。

大正八年十一月、從來本郡に於て施設したる郡内教員互助法を徹廢し、熊本縣教員互助會に加入することを決議す。

大正九年一月、從來制定せられたる、教員制服は是を廢止せり、全年三月女學校に於て、郡内各官衙有志等を招待し、教育大懇談會を開く、會するもの多數、各方面よりの教育に對する希望あり、裨益する處尠からず、毎年一回開會することなれり。

全年十月代陽女子小學校長野口吾平滿州視察をなす。

全年九月、縣設海外視察團員として、中部支那方面へ宮原校長二神敬之派遣さる。

全年十月、會長水上浩然退任す、全氏は明治四十二年十二月上任以來、實に十二年間の長期に亘り、本會々長として多忙なる本務の外、熱心常に會務を處理し、各幹部を指導し、着々として會の發展を計れり、其の任を去るに當り、會員一同其功勞を謝する爲め、一大粗宴を張り記念品代を贈呈せり。

大正十年一月、郡長鹿野三郎を本會長に依囑せしが、全年四月退任せり。

全年七月、郡長須藤信立を會長に依囑す、其後迫郡長を経て廣田郡長に至り、會務は教育の進展と共に次第に複雑を加ふ、各幹部の熱心なる社會奉仕的精神は、發露して文化的各種の事業を計畫し、前途多々益々辨するの隆盛に赴けり。

大正十五年六月郡制廢止の擧は本會の運行上支障なき能はず、且つ時代の推移に伴ひ、一般教育と社會教化の連鎖的關係を有するに至り、從來に於ける教育會の如く單純なる業務のみに止まらず、是に於て單獨に組織されたる青年團、處女會、學校衛生會を併合し、教育と社會教化の統一を計るべく、幾多の研究を重ね、現在の八代郡聯合教育團の組織を見るに至れり。

大正十五年七月八代郡聯合教育團組織成る當時の役員左の如し、

- 團長 缺員に付右田教育部長當分會長代理をなす、
- 教育部長 右田武 全部理事 野口吾平
- 青年部長 米知徳 全部理事 谷口廣
- 處女部長 二神敬之 全部理事 沼田靜雄
- 學校衛生部長 小島三郎 全部理事 菅村常正
- 常任理事 缺員 常任書記 石川愛郷
- 第一分團長 右田武 全教育部長 右田武
- 全青年部長 米知徳 全處女部長 安田福松
- 全衛生部長 小島三郎 全教育部長 門司達彦
- 第二分團長 門司達彦 全教育部長 門司達彦

- 全青年部長 龜田亥熊 全處女部長 高木末勝
- 全衛生部長 伊藤熊太郎 全教育部長 後藤續
- 第三分團長 後藤續 全處女部長 二神敬之
- 全青年部長 谷口廣 全教育部長 野口吾平
- 全衛生部長 菅村常正 全處女部長 沼田靜雄
- 第四分團長 野口吾平 全教育部長 水野一二
- 全青年部長 甲斐珍雄 全處女部長 組山重喜
- 全衛生部長 保田文治 全教育部長 水野一二
- 第五分團長 水野一二 全處女部長 組山重喜
- 全青年部長 水野一二
- 全衛生部長 緒方敏徳

大正十五年十月一日評議員會を開いて詮衡の結果右田武を會長に推薦し、其の後任たる教育部長に野口吾平を推し、野口の後任たる教育部理事に水野一二を推し其の他の役員には異動なし、因に大正五年以來の副會長を列記すれば、

大正五年四月 松尾敬吾

大正五年十月 水本東浦

大正八年五月	鹽野進	大正八年五月	續清人
大正八年七月	明石史一	大正九年三月	唐仁原景盛
大正十年四月	木原不二人	大正四年四月	津幡隆

第四節 小學校設置前の教育

八代には傳習堂ありて、城下の士人は主として、是に入りて教育を受け、鏡地方郷士の子弟は、内田村（今の鏡町大字内田）に設置せられたる、野津郷郷士教導所に學べり、又學識あるの士往々家塾を開くものあり、庶民の子弟にして志あるものは、郷士、吏員、僧侶等の文學ある者に就きて、讀書、習字、算術を學び、其の多きは數十人に及び少きは數人なるあり、所謂寺小屋教育是なり。

傳習堂は八代城二の丸に在り、寶曆六年（紀元二四一六年）八代城主松井豐之の創勦する所、其の修學の部を傳習堂と稱し、練武の部を教衛場と稱す、蓋し藩學時習館に倣へるなり、同年十一月十五日を以て其の業を開始す、其の趣旨は文武を練習し併せて城附の士と家臣とを和せしむるに在り、明治維新の後廢し、續ひて愛日堂を設け學制頒布の後、小學校となして本丸に移し代城學校と稱し、専ら士族の子弟を教養せり、翌年代街學校を本町に設けしが後合併して代陽小學校となれり。

第八章 町村誌

八代郡町村戸數人口面積

大正十五年三月調

町村	町數	村數	現		面積	一方里ニ對スル	
			世帶數	人口		戶數	人口
二	三	二	一七、三三	二、三六	四、四三〇	四四	二、七五三

〇 八代町

一、位置及地勢

八代町は、八代郡の西端球磨川の右岸にありて、不知火海に臨み遠く天草島に相對す、東は太田郷村字横手境より、西海邊まで凡三十七町、南は前川口より北松高村境まで凡八町余、市街は東半面を占む、氣候温暖にして氣溫最高九十四度、最低三十五度平均六十度、冬期結氷を見ることが殆んど稀なり、蘇鉄、棕櫚等亞熱帶植物の繁茂するを見て其の一般を知る可し、土地平坦にして地味肥沃、米穀及柑橘の生産に適す。

八代港は、球磨川の河口にありて、港内淺く大船を容るゝに足らず、二百石未満の帆船出入するに過ぎず、汽船は遠く沖合に寄港す。

白島は、西方一里余の地点に在り、元八代海上三島の一なりしが、郡築新地造營せられ半島形となれり
 島内處々に清水湧出し、清烈實に掬すべし、其の大なるものを地獄尻と云ふ、里俗水源を宮地村中宮谷
 滑淵に有すと云ふ、全島大理石にして周圍凡十町昔本島の石にて手洗鉢を製し江戸幕府に献したりき、
 從來國有林たりしも、大正三年八代町に拂下げ現今町有基本財産たり。

一、人口及び戸數

戸數 二、二三五
 人口 男 六、七四七^人 女 七、〇二三^人 計 一三、七七〇^人

之を職業別にすれば左の如し、

職業	戸數	人口	職業	戸數	人口
農業	五六	三三三	交通業	五〇	一四七
水産業	八〇	四九七	公務自由業	四一四	二、三二〇
鑛業	七	四九	其他	三七二	四、一三二
工業	四二九	二、一一二	合計	二、二二五	一三、七七〇
商業	八一七	四、二一〇			

一、神社及び寺院

神社	寺院	神教會道及	
		基督教	基督教
官幣社 一	眞言宗 七	天主教 一	基督教 一
郷社 一	淨土宗 四	神理教 一	メソヂスト 一
村社 四	曹洞宗 二		バプテスト 一
無格社 九	眞宗 一八		
計 一五	日蓮 二	二	三

一、生業及び産業

本町の生業は別表の通り商業を第一とし工業之に次ぐ産業品の重なるものを擧ぐれば左の如し、

イ、農作物

種別	數	價格	種別	數	價格
米	一、二一八石	三六、四二〇 ^円	麥	四五四	六、六八八